
反逆使徒

九条双月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反逆使徒

【Nコード】

N0657F

【作者名】

九条双月

【あらすじ】

闇にうごめく罪人たちを白日の下に引きずり出し、問答無用で免罪符を売りつける。罪人救済のため手段を選ばない最強無敵の聖職者コンビの珍道中！

プロローグ(1)

「そこまでだ、ゴードムさん。おやめなさい」

僕は叫んだ。

黄色い卓上ランプに照らし出された寝室。天蓋つきの寝台の上で、少女から衣服をむしり取るのに夢中になっていた半裸の男が、振り返り、驚きの表情を浮かべた。

「だ、誰だ、貴様。どうやって入ってきた・・・!?」

この太った初老の男はガンツ・ゴードム。バンディアスター管区最大の炭鉱を三つも所有している鉱山主で、この地方で最も裕福で最も権力のある人物のひとりだ。それだけのことはあって、何十人も私兵に警護された大邸宅に住んでいる。この寝室も、まるで都の貴族の屋敷のように、黄金と絹をふんだんに使った豪華な一室だ。カーテンも、寝台の掛け布も、室内に数脚置かれた椅子も、精緻な金系の刺繍がほどこされた美しい絹。ランプの光を受けて鈍く輝いている。壁や飾り棚に所狭しと飾られた美術品や工芸品が、揺らぐ光の中で、今にも動き出しそうな不穏な気配を秘めて鎮座している。

僕は思いきって寝室内に歩み入った。分厚い絨毯が足音を完全に吸い取った。

ゴードムは太った男にしては意外なほど素早くベッドから下り、僕を睨みすえたまま横歩きで移動した。腹回りにはみ出した白い脂肪が揺れた。手を伸ばして、壁に飾ってあった剣を取ると、鞘から抜き放って油断なく構えた。

「貴様・・・盗賊か。金が狙いか」

「違います」

「それでは、この女の身内か何かか。女を奪い返しに来たのか」

「違います。この人を助けに来たのはたしかですが」

「まさか・・・《白服隊》か。このわしを探るために派遣されたの

か。いや・・・違うな。貴様は兵士にしては若すぎる。何者だ!？」
「僕は神の使徒です」

「はっ!・・・なんだ。クソ坊主か」

思いつきり脱力した様子で笑われ、僕は少々傷ついた。人畜無害な相手だと判断したのか、ゴードムときたら剣まで下ろしてしまつたのだ。いくら信仰のすたれた世の中でも、神の使いに対してその態度はないんじゃないだろうか。

ゴードムは傲慢な態度を取り戻し、頭ごなしに、

「坊主がこんな夜中に何の用だ。わざわざ、こんな所まで、わしに説教に来たのか? “みだりな姦淫は第一の穢れなり”か。人の夜の生活にまで首をつつこんで歩くとは結構な趣味だな、え?・・・」
ところで貴様、この屋敷へは誰に入れてもらった? 見張りの者が許したはずはないが・・・」

僕は黙っていた。もちろん僕らはここへ強行突破で入ってきたのだ。見張りを黙らせるためにロラン先輩が使った手は、思い出すだけでも心の痛むようなものだった。「この人たちは雇われて仕事をしているだけで、罪はない」と言つてやったのに、先輩ときたら「コイツらだつてゴードムの悪行を知つてて、おこぼれにあずかつてるわけだろお? 同罪つてやつよ」と高笑いするだけで、まったく容赦無しだったのだ。ひどい。先輩のやり口は本当にひどい。ときどき、どつちが悪者なのかわからなくなる・・・。

そこで僕は我に返つた。自分の役割を思い出したのだ。僕の背後、開いたままの寢室の扉の陰でロラン先輩が聖句を唱えている間、ゴードムの注意を引きつけておくのが僕の役目だった。法術の発動に必要なだけの聖句を詠唱しきるには時間と精神集中が必要だ。妨害を受けないためにもあとしばらくの間、相手に僕が一人だと思わせしておく必要がある。

僕は寢台に歩み寄つた。掛け布の上に、年のころ十五、六の少女が乱れた着衣をとりつくるおうともせず横たわっている。よく陽に焼けた、純朴な顔立ちの少女だ。短く切り散らした黒髪に飾り気は

ない。働き者らしい、がつしりした体型をしている。その視線は、近づいてきた僕に向けられることもなく遠くを泳いでおり、幼さの残る口元はゆるんだままだ。なにか薬でも使われているのだろう。

「この人がミーナさんですね。・・・村で話を聞きましたよ。あなたがどのようにしてミーナさんの父親の商売を失敗させ、借金漬けにしたか。どのようにして、この人があなたの言うことを聞かなければならぬように仕向けたか。そして、あなたがそうやって毒牙にかけてきた娘は、この人ひとりではないことも」

僕は少女の体を起こし、自分の教服の上着を脱いで着せかけてやった。そして手を貸して立ち上がらせた。

剣を構えたまま、ゴードムは鼻で笑った。

「これは自由恋愛というやつだ。その女は自分からわしのベッドに飛び込んできたんだよ。女つてのはな、金と権力のある男が好きなものなんだ。世間知らずのクソ坊主の出る幕じゃない。・・・貴様ミーナの父親に頼まれて来たのか。だったら、とんだ勇み足だったな。今すぐ消えろ。このまますぐに消えれば勘弁してやってもいいさもなくて・・・この町でわしに逆らって、ただで済まないことぐらい、その黴の生えた頭でも理解できるだろう？」

僕は真正面からゴードムを睨みつけた。怒りではない 怒り

は“穢れ”であって、神の使徒たる者の抱くべき感情ではない

が、目の前のこの男に叩きつけてやりたい言葉が湧き上がってきた。

「あなたの罪はそれだけではない。金や権力に物を言わせて、欲望のままに女性を汚すだけでも、すでに十分すぎるほどの罪ですが。・・・あなたが人間を売っている、という噂は真実ですか。あなたの屋敷で働いていて、ある日とつぜん行方が知れなくなった使用人の数は、ここ五、六年で数十人に達するとか。それも若くて見目麗しい者ばかり。このバンディアスター管区や隣のジャンレイシャン管区の貴族や富豪たちの、言葉にするもおぞましい娯楽のために、あなたは人間を商品として販売している。その商売が炭鉱と同じく

らい、あなたの富と権力に貢献していると。・・・それは事実なのですか」

ゴードムは僕の質問には答えず、いきなり声を出して笑い始めた。傲然たる高笑い。全身の脂肪を震わせて笑いたいだけ笑ってから、不意にけわしい表情に戻り、ぎらぎらした瞳で僕を睨んだ。

「そう思うなら告発してみるがいい。証明してみるがいい、総督閣下の法廷で。その、わしの罪とやらを。証拠はあるのか？ 証人はいるのか？ バンディアスターー広しといえども、このわしに逆らって、貴様みたいな痩せ坊主に手を貸そうなどという酔狂なヤツは、誰一人いやしないぞ。能書きばかり並べやがって」

怒りに息を荒らげて叫ぶ間も、剣の刃先は揺らぐことなくこちらに向けられている。ひと突きで簡単に人の魂と肉体を分離できる凶器。光る刃先を間近に眺めながら、僕は不思議なほど落ち着いている自分を感じていた。

「否定しないのですね。残念です・・・人の魂が、そこまで穢れ得るということが。あなたの罪は深すぎる。このままでは来世、人として転生することはかなわないでしょう」

「夜中に人の愉しみを邪魔しておいて、言うことがそれか。まったく、あきれるな。本当にわかっていないのか、いくら説教を垂れたところで、しょせん貴様はわしに指一本触れることはできないのだと？ この辺りでわしに逆らえる人間などおらん。貴様の言葉になど誰も耳を貸さん。神が何だ。宗教が何だ。この世で物を言うのは“力”だよ。財力であり、権力だ。貴様などわしの目から見れば、ただのゴミ以下だ」

「人による裁きを逃れることはできても、神の裁きを逃れることはできません。あなたの悪行を、神は確かに見ておられますよ！」

「くそいまましい青二才が。わしの自慢の地下牢で、十日間飲まず食わずで逆さ吊りにされた後でも、そんなもつたいぶつた口が利けるかな。・・・おい誰か！ 誰かいなか！ 階下したの見張りはなにをやっておるのだ。早く寢室へ来い！ この身の程知らずのクソ

坊主をとつと地下牢へ放りこめ・・・！」

そのとき、僕の耳に、不意にはつきりと届いてきた。聖句の最後の部分を唱えているロラン先輩の低い声が。

「この一連を献げて、百億の夜と百億の昼の恵みを乞い願わん。」

この一連を献げて、百億ダローリウスの海と百億ダローリウスの大地の恵みを乞い願わん。

この一連を献げて、人と樹と鳥獣との循環の恵みを乞い願わん。

この一連を献げて、完全なる創世の恵みを乞い願わん。

・・・第六の円弧開放。具現化。出でよ、守護天使『アヴァドゥ

ータ』！」

ああ、ちよつと待って、先輩。まだミーナさんを部屋の外へ連れ出してない。

僕が止めるより早くロラン先輩は法力を放出し、

足元の床がぐらり、と揺れたかと思うと視界が暗転した。

プロローグ(2)

最初に意識を打つのは強烈な腐敗臭。それに混じって、かすかに肉の焦げる臭い。暗闇に慣れ始めた僕の目に徐々に映ってくる周囲の光景。そこはもう、部屋ですらなかった。果てしなく広がる暗いがらんだ空間。頭上も闇に覆われ、その先にあるのが空なのか高天井なのか見て取ることはできない。足元の感触は意外と堅くて、石畳に覆われた床のようにも思えるけれど、おびただしい量の液体で濡れていて、ぬるぬると滑りやすい。血、なのだ、その液体は。何の前触れもなく床のところどころが爆発的に裂け、灼熱の溶岩が噴き上げてくる。

空気を満たすのは、悪臭、溶岩の熱、そして悲鳴。

苔か何かのように床にへばりついている巨大な肌色の物体のあげる悲鳴だ。

その肌色の物体は様々な大きさの手や足や顔や腸はいつわたや性器で出来ていた。ばらばらに切り刻んだ人体の部品を適当につなぎ合わせて作った手芸細工のようだった。その一つ一つの部品はあきらかにまだ生きていた。何百個、何千個もの青やら黒やら茶色やらの目が助けを求めるように僕をみつめた。流れる溶岩が肌を撫でるたびに、無数の口が悲鳴をあげた。溶岩に照らされ、桃色に光る血まみれの粘膜がうごめいた。

そしてそれらすべての地獄図を見下ろして中天に浮遊するのは『アヴァドゥータ』。長い角と翼を持つ漆黒の獣。ロラン先輩の守護天使だ。

ゴードムは狂ったような激しさで周囲を見回した。

「何だ何だっ!? いったいどうなってるんだっ、これは!？」

はっとした僕は、あわてて傍らのミーナの顔を見たが、彼女はあいかわらずぼんやりと宙をみつめたままで周囲の異変に気づいた様子はない。よかった。薬で意識が濁っていて、かえって幸いだっただ。

ロラン先輩の現出する地獄絵図は強烈だから、心の弱い者なら、目にしただけでおかしくなってしまうこともある。

世間には「守護天使なんて、人間に幻覚を見せるだけだろう？」と言う人もいる。そんなことを言う人は実際の守護天使を見たことがないか、あるいは法力の弱い使徒にしか出会っていないに違いない。人間がものを見るには、「肉体」という容器の一部品である眼を使つて、「心」というフィルターを通して、「魂」が見て理解する。だが守護天使の見せる世界は、使徒の心象光景を相手の魂に直接送り込むものだ。見せられた側にとって現実と区別はつかない。どころか、様々なフィルター抜きで魂で直接感じる分、いつそう鮮烈で生々しい。

へたりこんだゴーダムのすぐそばで溶岩が噴出した。腕と脇腹の一部が焼け焦げ、彼はすさまじい悲鳴をあげて転がった。溶岩は本物ではないが、焼かれた痛みは幻覚ではなく本物。そして、火傷も本物だ。肉体と心と魂は一つのもの。魂の感じた“現実”は肉体にも変容をもたらす。

のたうち回るゴーダムに、ロラン先輩はゆっくりと近づいた。

「これこそが、未来永劫おまえの住処となるべき場所・・・地獄だ！ 現世で罪を重ねた者の行く先は地獄！ 現世で我欲のおもむくまま人を苦しめた者の行く先は地獄！ 神をも恐れぬ者の行く先は地獄だ・・・！」

戦慄するほどの威厳に満ちた声。悪魔の威厳だ。

ゴーダムは泣きながら先輩の足元に身を投げ出した。

「た・・・たすけてっ。助けてくださいっ！ ひいひいひいっ熱い熱い熱い・・・！ お、お願いですっ。わしが悪かった。懺悔でも何でもしますっ、本当に、何でもしますからっ！ ああっ、ごめんなさいごめんなさい・・・お願いだから助けて・・・！！」

ロラン先輩はしばらく無言で炭鉱主を見下ろしていた。

「改心して・・・神に赦しを乞うというのだな」

「はいっ！ 誓って・・・！」

「おまえの犯してきた罪は大きすぎる。生半可な懺悔で赦されるものではないぞ？」

「何でもしますっ！　どうか・・・おっしやってください」

血と涙と煤で汚れた顔で、必死に見上げるゴーダム。

あー、ここまでできたら、もう先輩のペースだな。僕はミーナの肩を抱いて、寢室の扉があると思われる方角へ向かって歩き出した。

法術は魂の感じる“現実”を変容させるけれど、実際に存在する物体に影響を及ぼすわけではない。溶岩が流れれば、それに触れた人間は火傷をするけれど、高熱のため周囲の物が発火したりはしない。たとえ人の感覚が、ここを広大な暗黒の空間だととらえていても

実際にはここはまだ、ゴーダムの寢室の中なのだ。左方向へ約六歩。そろそろと左手を伸ばすと、なにも存在しないように見える空間で、硬い物に触れた。開いたままの扉のようだった。

「免罪符、というのを聞いたことはあるか」

恐ろしげな声で、ロラン先輩が言った。

「ああ・・・あの、よく大きな街へ行くと街角で説教師が売っている、アレですか。お札を買うだけですべての罪が許されるという・・・」

「そんな簡単な言い方はやめろ。・・・まだ信仰心が十分ではないようだな・・・」

激しく溶岩が噴き上げて、炭鉱主の腹の脂肪を焼け焦がす。再び苦痛の悲鳴をあげて転げ回るゴーダム。

相手がすこし落ち着いたのを見計らって、ロラン先輩は再び口を開いた。

「免罪符というのは、過去数百年にわたって数多の聖人の積んできた功績のお徳を頂戴して、教会につながる者の罪に対する償い、罰、苦難を教会が免除するという、権威ある証明書だ。おまえのように地獄行きの確実な咎人の魂も、教会の御名において救済されるのだ。普通に暮らしている一般人の罪なら、説教師の販売している免罪符でも十分あがなえるだろうが、おまえの罪は重すぎる。地獄行きを

逃れたければ・・・教皇庁発行の金印免罪符ぐらいでなければ駄目だろう。

一枚、五万フアイラだ」

あまりに法外な金額に、苦痛や恐怖を忘れてゴードムが目をむいた。ロラン先輩はそんな相手の反応には目もくれず、指を二本立てて、相手の眼前に突きつけた。

「それを、二十枚買え。おまえの罪にはそれぐらいが相当だ。・・・それで天国への入場券が買えるなら、安いものだろう？」

「はいっ、はいっ、わかりました！ すみません！ 買わせていただきますすっ！」

「それから、この近隣にある古い教会をすべて、私財で建て直せ。金に糸目をつけるな。神への感謝を込めて、立派な教会を作らせるんだぞ。どうせ今まで汚い商売でたんまり貯め込んできたんだろう？・・・もしおまえの私財だけで工事費に足りなければ、公金を使え。おまえの立場なら地方総督を抱き込んで、管区の事業費予算を流用させることもできるはずだ。神の理ことわりは人間の法に優先する・・・！」

うつわー。またとんでもない事を言い出したぞ、この人は。

僕は急いで寝室を出て、扉を手探りで閉めた。この後の先輩のセリフは、聞かない方が自分の信仰的良心のためだと予感したからだ。扉を閉めたとたん僕らは法術の影響から逃れた。やけに狭く感じられる、ゴードム邸の薄暗い廊下が戻ってきた。豪華な刺繍に覆われたえんじ色の絨毯がひどく現実的に見えて、ほっとさせられた。

僕はミーナの顔をのぞきこんだ。彼女の顔はまだ無表情のまま、何も理解できていないようだった。

「行きましようか。この屋敷を出て、すこし落ち着ける所へ行ったら、あなたを癒します。それが済んだら一緒に村へ帰りましょう。あなたのご両親のところへ」

僕はできるだけ優しい声で少女に語りかけた。相手が聞いてくれているかどうかはわからなかったが。

「大丈夫ですよ。ゴードムさんは金輪際、あなたたちに迷惑をかけたりしないでしょうから。あんな目に遭った後ではね」

チャニア帝国暦九一六年。ドヴァラス正教の最高祭司にして神の代理人である教皇デズデモーナ三世は、後に「教勢復活令」（ウイスヴェル勅令）と呼ばれることになる指令を全教に発した。その目的は、長らく停滞している教勢を盛り返し、約百年前の「躍進期」のような活気を教内に取り戻すことだった。

かつて多くの使徒が布教熱に駆り立てられて大陸全土に散った「躍進期」には、神の教えが爆発的に広がった。どの町にも教会が築かれ、祭典日には信者があふれ返った。それはちょうどチャニア帝国が周囲の異民族との果てしない戦争を繰り返している時代で、帝国の国境の拡大に合わせて、ドヴァラス正教もその勢力圏を広げていったのだ。けれどもドヴァラス正教はチャニア帝国の国教となつてから勢いを失った。戦乱の時代が終わると、人々は平和と繁栄に酔い、神を忘れた。多くの信者が去り、教会はさびれていった。

そんな現状を改革しようと立ち上がったのが、我らが若き救世主、教皇デズデモーナ三世だ。教皇は各地方に高等神学校を置いて、布教の専門家である使徒を積極的に育成し、それを全大陸へ派遣した。廃屋と化してしまった全国の教会に、再び灯をともすために。すべての教会を、生き生きとした神の家へと立て直すために。

同時に教皇は、帝都アレリスを中心にくつつもの巨大神殿を建築する方針を打ち出した。神殿建築という大事業が信者を刺激し、団結力を高め、教勢を盛り上げるのではないかと期待したからだ。神殿建築の費用は、免罪符の販売で賄われることになった。

こうして大勢の使徒が、「教会復興」と「免罪符の販売拡張」という二つの使命を担って、帝国全域に旅立っていった。

高等神学校を卒業して一年ちよつとの僕、クレス・エスフェルが、免罪符を売りつけることにかけては右に出る者はいないと評判の高いロラン・トリステイス先輩といっしょに、帝国南端のカロリツク大平原へ足を踏み入れたのは、帝国暦九二八年のことだった。

第1話「生命の欠片」(1)

一年前、僕は十七歳の誕生日と高等神学校卒業を目前に控え、希望に胸を躍らせる神学生だった。神学の理論でも法術の実践でも、成績は常に学校内でトップクラス。将来を嘱望される優等生だったといっても、けっして傲慢にはあたらないはずだ。卒業後、使徒として赴任を命じられるのも帝都アレリーズに程近い“豊かな”管区だろうし、共に布教の旅をする同行者ブラータもたぶん、教内で評価の高い優秀な先輩使徒だろう。要するにドヴァラス正教会に所属する一聖職者として望み得る限り順調な出世コースの第一歩を踏み出すだろう、と僕だけでなく周囲の誰もが予想していた。

しかし神の思いは常に、人間の浅知恵をはるかに超越した高みにある。

実際に教皇庁から命じられた僕の赴任先は、バンディアスタラー管区という、帝都からはるかに離れた辺境の地で。帝国の繁栄から取り残された、貧しい人々の住む荒れ果てた土地であったけど。(バンディアスタラーとはこの地方の古い言葉で”不毛の地”という意味で、ほんとうに草木も生えぬ荒地が見渡す限り広がる、気のめいるような僻地だ)

また、教皇庁から指名された同行者というのも、「元ヤクザらしい」「教理を説くより喧嘩の方が得意らしい」という恐ろしい噂を尾ひれのごとく従えた、悪名の塊のような人であったけど。(そして「そんな噂は、誰かがやつかみ半分に流した大げさなものに決まってる」などと甘く考えていた僕は、実物の先輩と出会って仰天する羽目になったのだ。噂はあらゆる意味で真実だった)

それもこれも、神の深い思惑によるめぐりあわせなのかもしれない、と最近ようやく思えるようになってきた。

たとえそれが、僕を鍛えるための試練の茨「いばら」道であるとしても。

剥がれ落ちて垂れ下がる天井板。朽ち果てた祭壇。漆喰がほとんど剥げて、むき出しになった荒壁。天井の穴や壊れた窓から差し込む棒状の日光が、礼拝堂の中の薄闇を鋭く切り裂き、交差している。その光の中に淡く浮かんでいる、びつくりするほどたくさん埃を眺めるともなく眺めながら、僕は聖句を唱え終えてアグア（水）の印を結んだ。

「・・・第六の円弧開放。具現化。出でよ、守護天使『バクテイ』」

！
！
そのとたん僕を取り囲んだ村人たちの間から、おおっ、という畏れに満ちた声が湧き起こった。

広いとは言えなかった礼拝堂が、うつそくと木々の生い茂る森の中の光景に変わる。ひんやりとした空気。小川のせせらぎ。分厚い枝葉の層をくぐり抜けてきた陽光が、苔に覆われた地面のあちこちに、淡い光の模様を描いている。遠くで聞こえる鳥の声。

中央に、輝くような非現実感を伴ってたたずむ人影は、僕の守護天使『バクテイ』。ゆつたりした白い衣を身にまとい、地面まで届くほどの青銀色の髪をまつすぐ垂らした、無色に近い肌と目をもつ青年の姿をしている（締まりのねえ顔してやがるな、といつもロラン先輩に冷やかされるけど 『アヴァドゥータ』みたいに、角だの牙だの尻尾だの生やした漆黒の怪物よりは、よっぼどまだ）。守護天使は大きな水瓶を携えて、列を作って待っている病人たちのもとへ、ゆつくりと近づいていった。病人たちの先頭にいるのは、黎糜熱で皮膚がただれ、痛々しい赤みをさらけ出している老婆だ。

『バクテイ』は水瓶を傾け、老婆の患部に水を注ぎかけた。老婆は心地よさげに目を細めた。

「おおっ・・・冷たくて気持ちがいい・・・いや・・・なんじゃ、これは・・・あたたかい・・・とろけるようじゃ。おおっ。おお、これは・・・！」

水の触れた部分から、老婆の皮膚が元の肌色を取り戻し始めている。

悲鳴に近い驚きの声が村人たちの口から漏れた。何人かがすばやく跪いて三根源タライスの印を切り、祈り始めた。

これこそ、神が使徒に対して特に許し給うた奇跡の御業。使徒の守護天使は人の魂に直接働きかけ、病んだ魂を癒す力を持っている。魂が癒されれば、魂と一体の存在である肉体と心も癒される。医者も見放す難しい病気をたちどころに治す。それが守護天使の力であり本分だ。

半ば廃墟と化した教会の礼拝堂で、『バクテイ』は集まった希望者全員に対し『癒し』を行った。病人や怪我人が次々と回復していった。初めて目のあたりにする神の御業に皆が感激していた。感きわまって目をうるませた村長は僕の手をかたく握りしめ、教会を建て直して御神体を清めること、今後は村をあげて信仰と教会を守っていくことを約束した。

日が沈みかける頃になっても、教会に集まった村人の数が減ることとはなかった。『癒し』を求める病人の数は多く、僕は懸命に法術を使い続けた。長時間『バクテイ』を具現化しているのは身体にも負担が大きかったけれど、疲れなどまったく感じなかった。使徒としての務め、神に与えられた使命を果たしているのだという喜びの方が大きかった。

このティアル村は、ソルバド山脈のふもとに寄り添うように数十軒の石造りの家が並ぶ、ごく小さな集落だ。そんなに人口が多いとは思えないから、たぶん村のほぼ全住人が来てくれているんじゃないか？

病人の列が途切れたので、僕は法術を解いた。森の光景が消え、元の、荒れ果てた礼拝堂の姿に戻った。驚いて辺りを見回す村人たちに僕は、教理について改めて話したいので明日また集まってもらえるだろうか、と尋ねた。必ず来ます、と大勢の人が力強くうなずいてくれた。なかなか好意的な反応だ。病気だけ治してもらえば

あとは信仰になど用はない、という人も世間には少なくないのに。僕は勇みたつて帰路につくことができた。

大平原の夕陽はどろどろに融けた溶岩みたいな濃い赤色だ。地平線近くは燃え上がるように明るいの、頭上の空は曖昧な闇に沈み始めている。村の家並みもまた、薄闇の中に沈んでいた。村の中央を東西に貫いて伸びる幅広の道の両側に、数軒ずつ固まるようにして背の低い家々が建ち並び、意外なほど立派なガラス細工の窓から夕餉の暖かさを連想させる黄色っぽい灯りが漏れ出てきている。僕が、宿泊している旅籠までの距離ともいえないような距離を歩いていると（小さな村だから端から端まで歩くのもたやすい）、五、六人の子供が後をついてきた。どの子も十歳ぐらい。薄暗い中でも、幼い顔が好奇心で輝いているのが見て取れる。

「ねえねえ使徒様。どうしてあんな魔法みたいなことができるの？

部屋を森に変えたり、病気の人を治したり・・・」

僕は足を止めてほほえみ、できるだけいねいに答えた。

「あれはね、神様の力さ。きみたちも天使を見ただろう？ 銀色の

髪をして、水瓶を持っていた男の人が天使なんだ。天使は神様から

力を借りて、この世に不思議を起こすことができるんだよ」

「天使つて誰？ どこから来たの？」

「天使は人間の魂の一部。誰でも魂の中に天使をひとり持つてるんだ。きみたちの中にも、天使がひとりずついるんだよ。まだ名前がついていないだけで」

僕の言葉は子供たちに激しい興奮を引き起こした。顔を見合わせ、さえずるように早口の囁きを交わす。

一人の子供が目をきらきら輝かせながら僕を見上げた。

「じゃあ僕たちもいつか、あんな魔法が使えるようになるの？ 使徒様みたいに？」

僕は笑いながらうなずいた。

「きちんと勉強すればね。天使を呼び出せるようになるためには、二つのことをしなくてはならない。聞きたいかい？」

聞きたい聞きたい、と子供たちが高い声を揃える。僕は子供たちにも理解できるよう、ゆっくり言葉を選んで説明した。

「まず最初に必要なのは、天使の名前を知ることだ。人間は肉体、心、魂の三つでできているけれど、いちばん中心となるのは魂でね。魂は不滅だ・・・肉体が老いて滅びても、魂は新しい肉体を借りて、何度もこの世に生まれ変わってくる。人間が生まれたり死んだりするのは、ちょうど魂が肉体という服を着替えるみたいなものなんだ。その人間の魂はもともと、ただひとつの本当の名前を持っている。でも何度も生まれ変わりを経ているうちに、いつしか自分の名前を忘れてしまった。そこで、神様との“契約”の儀式をして、忘れていた名前を神様に思い出させてもらわなくちゃならない。魂の名前、それがつまり、天使の名前だ。これが第一段階。ここまでは、いいかい？」

次に必要なのは、天使を呼び出すための“力”を身につけることだ。人間が神様と話をして、神様の力を借りるためには、大変なエネルギーが必要なんだ。そのエネルギーを法力といってね。人によって、生まれ持った法力の量には差があるけど、神様を信じて一生懸命勉強して、『人のために役立ちたい』と願ってれば、どんな強い力を手に入れることができる。そのために神学校というところに入って勉強するんだよ」

「へーーーーっ」
と子供たち。ぴんとこない、といった表情だ。

少し難しすぎる話だったかな。僕は身をかがめて、子供たち一人ひとりの顔を順にのぞき見た。神の使徒にあこがれていた、幼い日の自分を思い出しながら。

「難しく考えなくてもいいよ。僕だって、きみたちぐらいの年頃は、何も知らない子供だった・・・毎日、お父さんやお母さんの手伝いを一生懸命して、友達と仲よくして、そして夜寝る前には神様にお祈りしていればいい。正しい生活は魂の力を強くするからね。そして大きくなったら、教会で神様との“契約”の儀式をしてもらい

「なぞい」

第1話「生命の欠片」(2)

僕が旅籠に戻ると、正しい生活とは縁もゆかりもなさそうな我が大先輩が、思いつきり怠惰なありさまで仰向けに長椅子に寝そべって、カロリック大平原に関する本部の資料を読んでいるところだった。

ロラン・トリステイス先輩は、僕のような山奥出身の人間が「都会の若いヤクザ」と言われて思い浮かべる想像図を、ほぼ地でいく風貌の持ち主だ。尖った顔。不敵な表情。切れ長の灰色の瞳はおそろしく鋭くて、気の弱い人ならまともに視線を合わせることさえできないだろう。寝転んでいるときにはわからないが背丈は人目をひくほど高く、針金のように痩せていて、右肩が少し下へ落ち込んでいる。高等神学校に入学する前に喧嘩で壊した肩だそうで、どういうわけか、いかなる『癒し』によっても治すことができないのだ。

先輩は、我々聖職者の制服である、謹厳そのもののような堅いデザインの教服を、遊び人っぽく着崩すという奇跡的な特技を持ち合わせていた。先輩にかかるると、首から提げた神聖なるタラスの印の銀細工さえ、退廃的なアクセサリのように見えてしまうのだ。

一体どうしたらあんな崩れた雰囲気が出るんだろう。僕も先輩の真似をして、教服の前ボタンを三つほど外してみたことがあるけど、「急いでいてボタンを締め忘れたあわて者」にしか見えなかった。

まあ別に、僕は先輩みたいになりたいってわけじゃない。人の信頼を得るためにきちんとした外見は不可欠だ。僕は人から信頼され尊敬される使徒でありたいと思う。

部屋に戻ったとたん疲れが追いついてきた。僕は荷物を置いてから、ひとつ溜め息をつき、なんとなく辺りを見回した。宿泊費の割には広い部屋だ。いちばん奥に寝台が二つ並ぶほか、窓際に書き物机があり、それとは別に応接セットというのか、揃いのデザインの長椅子とテーブル、一人掛けの椅子二つが整然と配置されている。ランプの灯りは十分とはいえないし、床の絨毯はすり切れているし、

全体的な古さはどうしようもないけど、布教の道中に泊まる部屋としては上等の部類だ。神の使徒たる者、常に質素を心がけなければならぬ。

ふわあ、とロラン先輩がのんきに欠伸をしたので 疲れがいらだちに変わって、僕はひとこと言おうと口を開きかけた。

「ただ、口を開いたのは先輩の方が早かった。」

「なんだクレス、そのツラは。言いたいことがありますって顔してやがるな。テメエ、いつから先輩に意見できるほど偉くなった？身のほどをわきまえるよ、この野郎」

「す、すみません！・・・って、なんで僕が謝らないといけないんですかー！」

「何も言わなくていい。おまえの言いたいことなんて、ちゃんとわかってる。自分が一日外回りでがんばってるのに、俺だけ旅籠でのんびりしてるのはずるい、と言いたいんだろ？」

「あ。怠けてるという自覚はいちおうあるわけですね、先輩も」

「アホ！ 俺だって遊んでるわけじゃねえ。だいたいおまえが資料に全然目を通さないから、その分俺がいていねいに読んでやってんじやねーか。布教先の情勢を把握しておくのも使徒の大事な務めだぞ？ おまえ、活字、嫌いだろ。本部の資料とか一度もまともに読んだことないだろ。新しい村に着いた初日から、何の準備もなくいきなり布教に出ていく奴なんて、聞いたことねーぞ、この単細胞布教バカ」

僕は腰に手を当てて、勝ち誇った笑みで先輩を見下ろした。

「単細胞で悪うございしましたね・・・この村での仕事はもう終わったも同然ですよ。村長さんが、村をあげて教会を維持していくことを約束してくれました。あとは本部への司祭派遣申請手続きについて相談するだけです」

先輩は読んでいた資料を下ろして、鋭い目で僕を見上げた。

「ほおー、上出来じゃねーか。で、免罪符は何枚売れた？」

「・・・は？」

「今日の売上はいくらだったか聞いてるんだ。まさか、また一枚も売らなかつたのか？ まったくもう、布教バカはこれだもんな・・・。だから資料読めって言うてんだよ。免罪符を売るには戦略が必要なんだ」

悔しいけれど、僕は「なにもそんなにバカバカって言わなくたって・・・」と肩を落とすしかない。教皇のウイスヴェル勅令から十二年。今では免罪符の販売が布教師の至上課題とされている。どれだけ多くの人を癒したか、どれだけ多くの教会を復興したかよりも、免罪符をいくら売り上げたかによって、神への貢献が量られる。だから僕みたいに、癒しに夢中になって免罪符のことを忘れてしまうような人間は使徒として評価されないし、下手すると無能扱いされたりもするのだ。

数字は無常なまでに正直だ。この半年間の、僕の免罪符の売上高はゼロ。かつての優等生もこうなっては形無しだ。

そのとき、部屋の扉を、外から控えめにノックした者があった。どうぞ、と扉を開けてやると、そこに立っていたのは二十代半ばと見える小柄な女性だった。

第1話「生命の欠片」(3)

いわゆる美人ではない。でも、卵型の顔に浮かぶ素直で親切そうな表情と、無造作に背中に流した長い黒髪をつややかさが、好ましい印象を与える人だった。瞳はあかるい緑色で、両目の間が離れ気味なので、年下の僕がこんな事を言うのは失礼かもしれないけど、ひどく幼く見えた。純白のワンピースは輝くばかりに真新しく、凝った飾りボタンやレースが散りばめられている。華美すぎず、このティアル村のような土地柄では、周囲から浮き上がってしまふような晴れ着だ。女性は純朴な顔を憂いに曇らせて僕を見上げた。

「突然お訪ねする無礼をお許しくださいませ、使徒様。お疲れのところ大変申し訳ないのですけれど・・・」

朴訥とした、でもまぎれもない真剣さの伝わってくる口調で彼女はしゃべり始めた。

「私、この村の北の外れに住んでおります、ミレイユ・タクマインと申します。昼間教会で見せていただいた奇跡を、この私にも施していただけないでしょうか？ ええ、ええ、承知しております。もちろん昼のうちにお願いすべきだったのですが・・・村の他の人たちに知られたくなかったものですから・・・」

いいですよ、と僕は快諾する。これまで布教に歩いてきた町々で、そのような頼みを受けることは珍しくなかった。他人に知られたくない病や傷を抱えている人は大勢いる。誰もが公衆の面前で患部をさらせるわけじゃない。

長椅子に横たわったロラン先輩は、資料を顔に乘せて寝たふりをしていた。共に旅するようになってこのかた、僕は先輩が『癒し』を行うところを一度も見たことがない。あの禍々しい『アヴアドウータ』じゃ癒しは無理なのかもしれない。僕は瞳を閉じて心を澄まし、聖句の詠唱を始めた。第一から第六までの円弧を

順に開放し、ベント（風）の印を結んで守護天使『バクテイ』を具現化した。狭い旅籠の部屋が広々した緑の平原に変わる。頭上には光に満ちた青空。平原を覆いつくす背の高い草を、風がざあつとなびかせて通る。風は春の気配を含み、優しく心地よい。

ミレイユはこちらに背を向けて、床にしゃがみこんでいた。ワンピースを半分脱いでいるので、ほっそりした背中がむき出しになっている。

その肌には数えきれないほどの傷跡が刻まれていた。

鋭い爪を持つ猛獣に裂かれた跡のようだった。いったん治りかけでは、また新たに切り裂かれたのか、醜く肉が盛り上がっている箇所も多い。紫色に変わっている箇所もある。でも背中のはほとんどを埋め尽くしているのは、まだ血をにじませた生傷だった。傷ついていない元の白い肌をみつける方が難しいぐらいだった。

「・・・かわいいそうに。痛いでしょう」

暖かいそよ風がミレイユの背中をそつと撫でて通る。風の通ったところから、きれいな肌が見る見るうちに甦ってくる。彼女の口から嗚咽が漏れる。彼女は涙にむせびながら神の名を呼ぶ。

傷の数は多いけれど深くはなかったので、癒すのにさほど時間はかからなかった。癒しが済むとミレイユは立ち上がって服装を直し、丁寧に礼を述べた。

僕はさつきから訊きたくてたまらなかった質問を吐き出した。

「どうしたんです、そのひどい傷は・・・何かお困りの事があるなら、手助けさせてください。僕にできる事はありますか？」

彼女は長い睫毛をしばたかせ、涙をこらえた。でも言葉は出てこなかった。

「何が起きていますんですか。あなたにそんなむごい事をしているのは、いったい誰です」

僕の再度の質問に、無言を続けるのは失礼だとも思ったのか、ミレイユは青ざめた顔に無理に笑みを浮かべてみせた。

「つまらない事ですね・・・夫婦の間の、ちょっとした事なのです。

夫は優しい人で、普段は私に手など上げたりしないのですけど。ウオールダーさんのガラス工房を辞めて以来少し体調を崩しているようで・・・ときどき自分でもどうしようもなくなるらしいのです。ありがとうございます、使徒様。どうかお気遣いなさらないで・・・」

夫婦喧嘩の傷か。そう言われてしまうと困るんだよな。

よほどのことでない限り、夫婦の問題に部外者は口出ししにくい。あの傷は尋常ではない。絶対にただの夫婦喧嘩なんかじゃない。

彼女は「つまらない事だ」と言っているけれど　　どんなにひどい目に遭わされていても女性は愛する男をかばうものだということ、僕は今までの布教経験で学んでいる。

どうしようか。彼女を助けたいけれど、彼女が他人の介入を望んでいないのは明らかだし・・・。

僕が迷っていると、それまで身じろぎひとつしなかったロラン先輩が、

「ちよつと調べてみるか」

と言って、長椅子に座り直した。

僕は少々驚いて先輩の顔を眺めた。

「珍しいじゃないですか。仕事嫌いの先輩が自分から動くだなんて」

「失敬なこと言っじゃねーよ。勤勉は神の使徒の第一の務めだから」

「あの人のご主人に免罪符を売りつけるつもりですか」

「いや。それじゃせいぜい五十ファアーイラの無印免罪符がいいところだ。俺は、小物は相手にしねえ」

「・・・この村に、金印免罪符を買わなきゃ助からないような大罪人がいるとも思えませんけど。僕が見たところ平和でいい村でしたよ」

「だから、おまえは甘いつていうんだ。悪い奴はどこにでもいるん

だよ」

ロラン先輩は絶対に聖職者には見えない凶悪な面構えで笑った。僕は吐息を押し殺した。

先輩は、誰かが困っているのを見過ごせないとか、そんな思考方法を持ち合わせている人では全然ない。先輩が動くのは十中八九、陰に大きな悪事が潜んでいる時だけだ。そしてそういう事についてのこの人の勘は、これまで外れたことがない。

人間の魂とは本来純粹で無垢なものだが、数え切れないほどこの世に転生を繰り返しているうちに、すこしずつ汚れ、歪んでいく。貪欲や悪行は魂を汚し、そんな汚れは「肉体の死」「新しい肉体を借りての生まれ変わり」という転生を経ても、魂にこびりついて落ちることはない。汚れた魂を持つ者は、悪い運命をたどり、ますます罪と穢れを重ねていく。そして最後に魂は地獄に落ちる。二度と新たに肉体を借りることもできず、魂のまま苦痛に満ちた永遠をさまよわなければならないのだ。生命あるうちに悔い改めて善行を積み地獄行きを逃れることもできる。しかし悪に汚れきった魂がそこまで更正できることは、めったにない。そんな魂をてつとり早く救済するための手段が免罪符だった。過去の数多の聖人たちの功德のおかげをもって、どんな罪人でも免罪符さえ買えば、ただちに『救済』が約束された。そして今、僕らの教団がいちばん力を入れてきているのが、免罪符の販売を通じた罪人の『救済』だった。犯してきた罪が大きければ大きいほど、高額の免罪符を買わなければ助からない。

そういう罪深き者を闇の中から引きずり出し、免罪符を買わせて救済するのは、ロラン先輩の最も得意とするところだった。

第1話「生命の欠片」(4)

翌日は忙しい一日だった。僕が教会に顔を出すと、埃と泥にまみれていた礼拝堂はすでに村人たちの手によつて清められ、誰かが説教台になりそうな古い小卓と数脚の椅子を寄付してくれていた。そうなつてみると、何年も前に打ち捨てられたボロボロの廃屋ではあるが、だいぶ“神の家”らしく見えてくる。僕は午前と午後一度ずつ、集まった村人たちに神の教えを説いた。前日の『癒し』の印象が強いためか、とても熱心に聴いてもらえた。説教の合間に、教会の復興手續について村長と相談。癒しを求める病人たちの治療。さらに、悩みを抱えた人たちの相談に乗ったりもしているうちに、あつという間に時間は過ぎていった。

日中何度かロラン先輩の姿を見かけた。村人をつかまえては、何か熱心に話しこんでいる様子だった。

夕刻、僕はへとへとなつて、でも力を出し切った充実感とともに教会を後にした。旅籠へ向かつて歩いている途中、また今日も免罪符を売らずに終わったことに気づいた。

しまった。忘れてた。また先輩に叱られる。

僕の足はとたんに重くなつたが、旅籠までの距離は大したことはないのです、いやでもすぐに帰り着いてしまふ。先輩は目を輝かせて僕を待ち受けていた。予想に反して、免罪符の話は出なかった。

「おまえ、動物は好きか、クレス？」

僕はほほえみ、胸を張った。

「自慢は罪ですから、しませんが・・・動物と子供の扱いなら任せてください。僕、なつかれやすいタイプなんです」

「そーか。じゃあ今度のは、おまえの仕事だな」

「・・・どういうことですか？」

僕は笑いがひとりで顔から消えるのを自覚しながら尋ねた。ロラン先輩はこともなげに説明した。

「村の連中の話じゃ二月ほど前から、夜になると、あのミレイユって女の家から獣の吼えるような声が聞こえてくるそうだ。二月前と
いうのはちょうど、亭主のタクマインがガラス工房をやめた頃にあ
たる。タクマインってのはそれ以来仕事もせずに家にこもってるら
しい。おかしい動物でも飼いはじめたんじゃねーか、というのが近所
の噂だ」

「動物、ですか・・・」

僕はミレイユの背中へのひどい傷跡を思い出した。彼女の言ってい
た「夫婦の間のちよつとした事」とは、夫の愛玩動物という意味だ
つたのか？ 夫の飼っている獣が彼女を傷つけているのだろうか。
「ちよつと待つてください。それって、きつと、かなり凶暴な猛獣
ですよ。僕になついてくれるとは思えないんですけど」

「いいじゃねーか。手なずけられなきゃ、ぶちのめせば。それで万
事解決だ」

「ぶちのめすって誰が？ 僕ですか？」

ロラン先輩は肩をすくめ、「おまえ、馬鹿力だけがとりえだろー
が。自分の長所を積極的に生かせよ」と、あっさり答えた。僕は床
に倒れ伏して神に祈りを捧げたい気分になった。わけのわからない
（少なくとも、鋭い爪を持っていることだけは確かな）凶暴な猛獣
との格闘。僕が神学校で夢見ていた使徒の仕事に、そんなものは含
まれていなかった。神はどこまで僕を試そうというのか。

「ずるいですよ、先輩。いつも面倒な事は僕に押しつけるんだから。
・・・」

思わず泣き言がこぼれたが、先輩は気にも留めていないようだった。

「心配するな。おまえが獣と戦うのを、女の亭主が邪魔しようとし
たら、そっちは俺がぶちのめしてやるから」

「いや・・・そういうこと言ってるわけじゃ、ぜんっぜんないん
ですけど・・・」

まったく気乗りはしないけど

それどころか獣との対決を想

像するだけで恐怖と緊張で全身がぞくぞくするけど　　ミレイユを苦しめているものの正体をつきとめ、彼女を助けることができるのなら、行動しないという手はない。ひよっとすると、意外と人なつつこい獣かもしれないし。

夜が更けるのを待って、僕らは村外れにあるミレイユの家へ向かった。周囲の家々からぼつんと離れて建っている小さな石造りの家だった。きちんと整頓された家周りが住人の几帳面な性格を物語っている。夜中だというのに辺りはぼんやりと明るく、足元には困らなかった。タクマイン家からさらに村の外へ進むと北東から南西にかけて伸びる街道があるが、それを北東へしばらく行った辺りにひどく大きな直方体の建物があつて、その窓という窓に灯りがともっていたからだ。その建物は光を放散しているかのように見えた。輝ける巨人のように周囲を睥睨していた。光だけでなく、ガタン、ガタン、と自動工具を動かすような音がひっきりなしに響いてくる。あれがタクマインの元の勤め先であるヴォールダーのガラス工房だ、とロラン先輩が説明してくれた。夜更けなので当然かもしれないけど、見渡す限り、辺りに人の姿はまったくなかった。

ミレイユの家のすぐ横に木造の物置小屋があつたので、僕らはその陰に身をひそめた。

そのまま長い時間が過ぎた。家の灯りはとうに消え、家人は眠りについていくようだった。ガラス工房から響いてくるガタン、ガタン、という音が夜の静寂をいっそう深く感じさせる役割をしていた。こんなに遅くまで職人は働いているのか、と僕は感心した。ずいぶん仕事熱心だな。夜明けとともに起き出し、日暮れとともに仕事を終えるのが人の自然な暮らしぶりであり、神の摂理にもかなう行いだと思っていたけれど……。

無言で物陰に座り込んでいるうちに、疲れもあつて、僕はいつの間にかうとうととしていたのかもしれない。

異様な気配にはっとして目を開けた。うぐおおおおおおつ、という低い唸り声がする。まさに荒れ狂う獣の声そのもの。家の中

からだ。

「おい、出やがったぞ、クレス」

というロラン先輩の囁きを聞くまでもなかった。僕は一瞬で完全に覚醒し、立ち上がった。心の臓の鼓動がいやおうなしに高まった。

威嚇するように、あるいは人知れぬ苦悶を吐き出すかのようになり、不気味な唸り声は続いている。不意に「あうっ」という女の悲鳴が鋭く響いた。それを耳にしたとたん僕の頭の中は真っ白に弾けた。

「ミレイユさん！」

考えるより早く体が動いて、玄関に駆け寄っていた。押してみたが当然中から鍵がかかっている。僕は扉に体当たりした。三回目に肩をぶち当てたところで扉は激しく開いた。僕は家に駆け込んだ。

第1話「生命の欠片」(5)

「ミレイユさん！ どこです！ 大丈夫ですか！？」

戸外の光に慣れた目は、暗い室内の様子をほとんど見分けることができない。僕は手探りで進んだ。いろいろな物を倒したり、蹴ったりしたようだが、構っている余裕はなかった。未知の獣に対する恐怖など、どこかへ吹き飛んでしまっていた。荒々しい咆哮はいちばん奥から聞こえてくる。閉じた扉に突き当たった。僕はためらわずに押し開け、飛び込んだ。

そして立ちすくんだ。

寝台ひとつを置いただけでいっぱいになってしまふような、狭い寝室。奥の壁の幅いっぱい窓からカーテン越しに漏れ入ってくる工場の灯りのせいで、室内は薄明るい。獣など、いなかった。寝台の上で男女が抱き合って横たわっていた。仰向けに寝ている男はタクマインだろう。がっしりした体格の三十歳そこその男。これほどまでの苦痛に歪んだ顔を、僕はこれまでに見たことがなかった。顔は紅潮し、目はいっぱいに見開かれ、口は泡を吹いていた。太い筋が額に何本も浮き上がっていた。夫に覆いかぶさるようにして、ミレイユがうつ伏せに横たわっていた。彼女の白いパジャマの背中に血がにじんでいた。その背中をタクマインがしっかりと抱きしめている。

苦痛は波状に襲ってくるようだ。不意に、タクマインの体がびくんとはねた。目が完全に裏返って白眼になった。

「うとうとううとうつきよおおああああああっ！！！」

男は身もだえた。そしてミレイユの背中に爪を立てた。苦痛で錯乱した、容赦のない力で掻きむしられて、彼女の背中に血が広がるのが見てとれた。

駆けつけたロラン先輩と力を合わせて、僕は二人を引き離そうとした。二人は死んでも離れないと言わんばかりに固く抱き合っ

たので、それを離させるのは並大抵のことではなかった。タクマインはわめき散らしながら激しく暴れた。尋常ではない苦痛のあまり、完全に正気を失っている様子だった。ミレイユも目を閉じたまま、暴れる夫にしがみついていた。

僕はもう、どうしていいのかわからなかった。守護天使『バクテイ』を呼び出せば、タクマインを苦しめている原因が何であれ、とにかく今の痛みを取り除くことはできる。気の間違いを正すのは難しいが、暴れるのをやめさせておとなしくさせることはできる。けれども僕はこの状況で、心を静めて最後まで聖句を唱えきる自信がなかった。六つの円弧を開放するには百八の聖句をひとつも間違えずに詠唱しなければならぬ。すぐ目の前でミレイユが声ひとつあげずに背中を裂かれ続けているというのに、集中して詠唱なんかできるわけがない。

そのとき、寝室の中で、ぼこっ、というような鈍い音が響いた。「?」

あれほど激しく歪んでいたタクマインの顔が、呆けたような表情に変わっている。その表情のまま、妻から腕を放して、仰向けにずるずると寝台から滑り落ちた。半分まで滑り落ちたところで床に頭が着いて止まった。その姿勢で目を閉じ、いびきをかき始めた。

完全に眠り込んだようだった。僕はびっくりしてタクマインを見下ろした。あんなに苦しそうだった人が、こんなに突然眠り込むなんてあり得るだろうか!? ミレイユも寝台に座り直し、目を丸くして夫をみつめている。

ふと気づいて、僕はロラン先輩に視線を向けた。先輩の左手には、大人の二の腕ぐらいの長さの、がっしりした木の棒が握られていた。棒の表面には黒い線で複雑な模様が描かれている。線と見えるのは実際は細かく書き込まれた神聖文字で、『ゴーラクシャー』バガヴアッド聖典』の一節を綴ったものであることを、見なくても僕は知り尽くしていた。

「まさか・・・殴ったんですか、この人を？」

「楽にしてやったんだよ。神の力でな」

「なーにーが、神の力ですか！ また本部支給の『シャーンティの杖』をそんな事に使って！ 命名の儀式を仲介するための神聖な杖なのに・・・」

「うるせーな。人助けに使ったんだから、神だって気にしやしねえよ。それよりとつとと『バクテイ』呼び出してその男を癒してやれ。意外と出血がひどいみたいだ」

「誰のせいですかー!？」

第1話「生命の欠片」(6)

僕は寝室で聖句を唱えて守護天使『バクティ』を具現化し、『癒し』を行った。ミレイユの背中とタクマインの後頭部の傷はすぐに治った。

タクマインが深く寝入っている間に、僕は寝室の隣の居間で話をすることにした。ミレイユがランプを点すと、家の質素な外見とは裏腹に、質の良い調度品でとのえられた室内の様子が浮かび上がった。僕は居間の中央にあるテーブルを囲んで腰を下ろした。テーブルにはあふれんばかりの花を活けた花瓶が置かれていた。花なんて、この不毛の地にあつては、大変な贅沢品だ。

夫がこのような発作を起こすようになってもう二月になる、とミレイユは重い口を開いた。もともと丈夫な働き者で、病気ひとつしたことのない人だった。ある夜突然、尋常ではない苦痛に襲われ、わめきながら部屋中をのたうち回るようになった。発作は毎夜のように襲ってくる。医者にかかるよう彼女が勧めても、夫は「医者は要らない」とかたくなに拒絶するだけだ。ひとりで苦しむ夫を見て、彼女は暴れる夫の体を抱きしめるようになった。自分の背中に爪を立てることによって、夫が少しでも苦しみをこらえやすくなるのではないかと思つて。

「理由が・・・わからないのです。こんなに苦しいのならお医者にかかればいいのに・・・なぜ我慢し続けるのか」

うなだれた彼女の頬を二筋の涙が伝い、光の尾を引いてぽたりと落ちた。彼女は急に顔を上げて、僕の目をまっすぐみつめた。

「使徒様。あなたの奇跡で、夫の病気を治すことはできませんか？

・・・医者にかかることさえ嫌がる主人ですから、きつと使徒様のお世話になることも嫌がるだろうと思うのですが、今ならちょうど眠っておりますから。主人が目覚まさないうちに。後生です、どうか・・・！」

「・・・残念ですが。治せるかどうかはわかりません」

涙に濡れた目でみつめられると心が痛むけれど、僕は正直に答えるしかなかった。

「癒しを受け入れられるかどうかは、その人の魂によって決まるのです。素直な魂　　信仰心の篤い魂には癒しはよく効くのですが、かたくなな魂、癒されることを拒んでいる魂、あるいは神の光も届かないほど歪んでしまった病んだ魂は、癒しを受け入れることができません。その場の苦痛を止めることはできても、苦痛の原因となつている病気を完治させることはできないでしょう。また、人工物のせいで起きた患いも治しにくいんです。毒物とか、そういうものですが・・・」

「そう・・・ですか」

彼女は再び悲しげにうなだれてしまう。その表情を見て、僕はたまらなくなつた。苦しんでいるこの夫婦をなんとしてでも助けたいという強い感情が改めて湧き上がってきた。

「僕が明日にでもご主人と話をしてみましよう。神に帰依し、癒しを受け入れる気持ちになれるように、僕から説得してみます。ご主人の魂が神に向けば、どんな難病でもすぐに治りますよ。ですからミレイユさんも、ご主人が信仰を受け入れることを祈っていてください。夫婦の心が一つになればきっと素晴らしい奇跡が・・・」

「一度この男を医者にかからせる。本人が嫌がろうが何だろうが関係ねえ」

ロラン先輩の低い声が、刺すように響いた。

僕は驚いて先輩に向き直つた。　　せつかく信仰の話をしているところなのに。使徒の方から医者を勧めるなんて、筋違いもいいところだ。（たいていは、医学を盲信している病人やその家族に、医者ではなく神にすぎらなければ助からないことを説いて歩くのが僕ら使徒の務めなのだ）

目を丸くしているミレイユに向かって、先輩は断固たる口調で言い渡した。

「この病気は普通の病気じゃない。原因を知っとく必要がある」

「あなたが奇跡を起こしたのなんのと村の連中が騒いでおったが・
・本当にそんなことがあるもんかね。お祈りで病気が治るものなら、
わしら医者も商売あがったりじゃないか」

グレゴル・ゼフォン博士は、丸眼鏡の奥から、見下すような目つきで僕を見た（背の低い博士がその目つきをするためには、頭を思いっきり後ろへそらせなければならなかった）。かなりの高齢だし

たぶん六十歳に近いんじゃないだろうか 体軀は小柄だ

けれど、豊かな髪に、彫りの深い四角形の顔。秀でた聡明そうな顔も、ぎよろりとした目も、大きな鷲鼻も、はつきりとその存在を主張している。全身から威厳があふれており、いかにも「町の名士」という感じの老人だった。小柄な身の丈に合った、仕立ての良さそうな茶色の服に身を包んでいた。

「じゃあ、さっさと廃業しやがれ」と、ロラン先輩。

「……」

敵意全開で睨みあう二人の間に、あわてて僕は割って入った。

「あなたは神を信じておられないのですか」

角が立たないように、できるだけにこやかに尋ねてみる。ゼフォン博士はふんと鼻を鳴らした。

「あいにくわしは科学者だからな。そのへんの無学な職人どもとは違う。……たしかに患者の心の持ちようによって容態に変化が生じうる、ということとは否定せん。『お祈りをしてもらえれば病気が治るんだ』と固く信じこんでる人間であれば、あるいは、治ることだってあるかもしれん。だが、教養のある人間であれば、そこまで強い妄信にとらわれることはあり得ない。神だの何だの、そういう非科学的なたわごとは、わしには聞かせないでもらおうか」

「ほおー、上等じゃねえかジイさん。神の御業の威力、一度その身で確かめてみるか？」

「もう、やめてくださいよ先輩！ 喧嘩しに来たわけじゃないんですから！」

ロラン先輩の挑発にもひるむことなく、ゼフォン博士は昂然と頭を持ち上げて、ひどく強い視線で僕たちを睨んだ。

「そもそもあんたらの言動には矛盾がある。神の力で何でも治せるというなら、医者など不要じゃないか。そうだろう？ なぜわしに往診を頼まなくちゃならない？」

「誰が好きこのんでテメエみたいな強欲ジジイに・・・」

またしても悪態をつきかける先輩をさえぎるために、僕は大声を出さなければならなかった。

「あなたには見立てをお願いしたいんです。病の原因が何なのか。それを知ることが重要なんです。僕たちでは、痛みを取り除くことはできても、診断まではできませんから」

タクマインの不審な発作を目撃した翌日、僕らはさつそく医者を探したのだ。ティアル村には医者はおらず、すこし離れた隣のチェトウス町まで行かなければならないことがわかった。医者もゼフォン博士はチェトウス町の町長の屋敷のすぐ隣に居を構えていた。町長宅よりはるかに立派な豪邸だった。このあたりでは珍しい三階建の煉瓦造りで、来訪者をひるませるほど格式の高い、立派な柱の並ぶ屋根つき玄関を備えている。近隣一帯に他に医者はおらず、博士はチェトウス町やティアル村だけではなくイヴート村の患者まで一手に引き受けているそうだから、かなり繁盛しているんだろう。僕らが博士の屋敷を訪ねたのは、夜の帳（よる）が完全に下りた後のことだった。

重々しい玄関扉を入れてすぐ左手にある診察室らしい部屋で、博士は僕らを出迎えた。

「往診なら、馬車を呼んでもらわなくてはな。わしは歩いて行くのはまっぴらごめんだ」

それが博士の第一声だった。

僕はうなずいた。チェトウス町からティアル村までは街道をかな

り歩かなければならず、お年寄りにとっては厳しい道程だ。馬車が必要になることは予想できたので、町に着いてすぐ手配してあったのだ。それにしても往診先がティアル村であると僕はまだ言っていないのに、この人はどうしていきなり馬車のことを口にするんだらう。

小ぶりなシャンデリアに照らし出された診察室内は明るかった。白塗りの壁は年代物らしい黒い木棚に埋め尽くされている。どの棚にも分厚い本や薬の瓶が美しく整頓されて並んでおり、秩序と理性を表現していた。棚のほかには書き物机と座り心地の良さそうな椅子。少し間を置いて、それほど座り心地の良くなさそうな、背もたれのないもう一脚の椅子（患者用だろうか）。そして部屋の真ん中に診察台が置いてある。全体として余分な飾りのない、殺風景に近い部屋だった。ただひとつ装飾品といえるのは、書き物机の上にあるガラスの置物だった。　　どういう細工なのか、中に楕円形の金属板が埋め込まれていて、その板には黒地に金色の文字で「われら人間の叡智をもって　自然を征服し使役せよ」と書かれている。

馬車が来るのを待つ間、博士は無言で往診用の鞆にいろいろな薬を詰めていた。ふつう患者の容態がどうなのか質問したりするものじゃないのか？　どこの誰を往診してもらいたいのか、僕はまだ何も話していないのに、と不審に思っていると、こちらを見て博士は再び口を開いた。

「わしの往診料は安くはないぞ。夜中に出向くからには特別に時間外料金ももらわなきゃならん。おまえさん方は、あまり金を持っているようには見えんな。先に金を見せてもらおうか」

僕は神に仕える者として、できるだけ人の悪い面を見ないように心がけているが　それでも博士の態度に誠意の無さを感じ取り、不安を覚えずにはいられなかった。患者に対する関心や気遣いが欠落しているように感じられるのが、僕の思い過ぎだといいいのだが。ロラン先輩の方は反感をはっきりと示した。「テメエ金のことしか頭にないのかよ、このヤブ医者が」と、僕があえて思い浮かべない

ように努めていた言葉をずばり口にした。それで、すっかり雰囲気
が険悪になってしまったのだ。博士を説得して馬車に乗ってもら
うのは大変だった。チェトウス町からティアル村までの馬車の旅が
やけに長く感じられた。博士は「喧嘩ならいつでも受けて立つ」と言
わんばかりの好戦的な表情で、真つ白な口髭の端をびくびく震わ
せているし、先輩は完全にふてくされて窓の外を眺めている。ま
ったくもう。医者と呼ばうって言い出したのは先輩なのに……。

僕らがタクマイン家に着いたのは夜中に近かった。昨夜とほぼ同
じ時刻だ。明かりの消えた家の中からすでに、獣の咆哮を思わせる、
タクマインの唸り声が漏れてきていた。その声を耳にしてゼフォン
博士が顔色を変えた。医者連れて行くことをあらかじめミレイユ
に教えてあったので、玄関には鍵はかかっていなかった。僕は家
の中に踏み込んだ。

奥の寝室ではタクマインが目をむいて苦痛に暴れ回っていた。

「その男を押さえるんだ！」

ゼフォン博士が叫んだ。僕と先輩はタクマインの腕を一本ずつ
かんで寝台に押さえつけた。狭い寝室の隅に顔をひきつらせたミレ
イユが立って、悲鳴をこらえるかのように、握り拳を口元に押し当
てていた。博士は手際よく火打石を打ってランプに明かりを点すと、
それを掲げて寝台に歩み寄ってきた。そして慣れた手つきでタクマ
インの状態を観察した。つまり、目蓋をめくって眼球の様子を
確認したり、食いしばった歯の間に金属片を突っ込んでこじ開け口
内をのぞきこんだり、腹のあちこちを押さえて反応を見たりした。
ひと通り観察を終えると、博士は鞆から取り出した小瓶の液体を綿
に染み込ませ、それをかなり乱暴にタクマインの一方の鼻の穴に押
しこんだ。眠り薬だったのだろう。タクマインの体からふと力が抜
けた。両目を閉じ、寝息をたて始めた。

「この症状は病ではない」

博士は僕に向かってそう宣言した。立ちすくんだままのミレイユ
に向き直り、

「あんだ、この人の奥さんかね」

彼女がうなずくのを確認してから、博士はおだやかな口調で説明を始めた。

「あんだの旦那さんは、おそらく、俗に『生命の欠片』と呼ばれる薬品を常用していたと思われる。あんだも何度か家の中で見かけたことがあるんじゃないかね？ 真っ黒な粉だ。これぐらいの大きさの（と、指で幅を示しながら）塊になっていることもある。人の身体活動と精神活動を非常に活発にする薬だ。薬に体が慣れないうちは、つまり最初の二・三回の服用時には多少の感覚の混乱が見られるが、やがて薬を服用すると、ひどくいい気分になれる。自分が偉人になったように感じられ、何でもできると感じる。そして疲れを知らず何時間でもぶっ通しで動き続ける。薬を定期的に服用している間は、そのいい気分が持続するが・・・服用をやめたとたん、あんだの旦那さんのような症状に陥る。服用中は神経が異常な興奮状態にあったので、その反動が来るのだ。全身を焼かれるような苦痛を覚えるらしい」

「“禁断症状”ってやつか」

ロラン先輩が、僕には耳慣れない単語を口にした。ゼフオン博士は渋面のまま、ふむ、と唸った。

「坊主にしては、しゃれた言葉を知っているじゃないか？ ともかくこの症状は、医者にはどうしようもない。これ以上ひどくなることはないから安心しろとしか言えん。何日か、何週間か、あるいは何ヶ月かすれば・・・『生命の欠片』を服用していた期間の長さにもよるが・・・薬の影響が完全に抜けて、今の症状も治まるだろう。それまではまあ、我慢することだな」

「真っ黒な塊？ 『生命の欠片』？ 何のことですか。わたしには、さっぱり・・・」

ミレイユが呆然とした様子でつぶやいた。思いもかけない診断に、すっかり混乱している様子が見てとれた。

第1話「生命の欠片」(7)

「毎晩寝る前に、旦那さんにこれを飲ませなさい」

ゼフォン博士はミレイユに器を持ってこさせ、瓶からつまみ出した白い小さな丸薬をひとつひとつ数えながら入れた。博士の眼鏡がランプの灯を受けてぎらりと光った。

「最高に強力な睡眠薬だ。これを飲んでおけば少々の痛みでは目は覚めん。もつとも、眠りが深すぎて二度と目覚めなくなる危険はあるがな。・・・『禁断症状』から逃れることはできんが、症状が収まるまでの期間を、なんとかごまかしながら乗り切れることはできるだろう。わしにできるのはここまでだ」

ミレイユは神妙な表情でうなずいた。ちなみにこの薬は一粒三フアイラだ、と博士はつけ加えた。僕は思わず「ええっ！」と声をあげてしまい、博士に睨まれた。あんな小さな薬が三フアイラもするなんて！ しかも博士はそれを何十粒もミレイユに渡しているじゃないか。

ミレイユに見送られて、僕らはタクマイン家を後にした。安らぎに満ちた夜が僕らを抱きとめた。ガラス工房からの灯りのため星の光さえ見えないけれど、それでも世界の大半は平穩無事な眠りの中にあるのだという考えが僕を安堵させた。街道に止まって僕らを待っている馬車がずいぶん小さく見えた。ぶるる、と身を震わせる馬の輪郭がガラス工房からの光を浴びて白く輝いた。僕らは重い足取りで馬車をめざした。

沈黙を破ったのはゼフォン博士だった。

「原因がわかれば治せるのか、あの症状を？ 神の力というやつで？」

なにげない口調ではあったけど、こめられた真剣さは見落としてよ
うがなかった。

僕は驚いた。この人の口からそんな質問が出るとは思わなかった

のだ。あわててうなずいた。

「あの夫婦がすっかり信仰にもたれ、神の御恵みを全面的に受け入れる心になれば、どんな奇跡でも可能です。人間の魂と身体と心はひとつのもの　　魂さえ強く健康であれば身体も完全な状態に戻りますし、神にもたれている魂ほど健康なものはありませんから。でも実際問題として・・・その、『生命の欠片』でしたっけ？・・・人の手になる物によって生じた患いには、神の力も及びにくいのです。魂が病んだ結果として身体も病む、という自然の流れから外れていますからね。あとは、タクマインさんがどこまで神の力を受け入れる気になれるか・・・タクマインさんがそういう気になるよう、僕らがどれだけ働きかけていけるか、にかかっていると思うんですが・・・」

「なるほど。本人の信仰心の問題というわけか。・・・あんたら坊主は、いつもそうやって、ちゃんと逃げ道を残しているんだな」

博士は鼻を鳴らした。

その冷笑は鋭く僕の胸に突き刺さった。「逃げ道だなんて、そんな・・・」と僕がもごもごと抗議を始める前に、ロラン先輩のひややかな声が僕らの間に割って入ってきた。

「あんたの信奉してる科学技術ってやつこそ、ずいぶん罪深いシロモノじゃねーか。神が人にふさわしいものとして与え給うた以上の力を無理に手に入れようとして、さんざん悪あがきしたあげく、結果が悪いと『今の科学ではどうしようもない』と投げ出しやがる。ロクでもねえ薬やら技術やらのせいで、今どれだけ大勢の人が苦しめられてるか、あんただって知らないわけじゃねーだろ？」

少なくとも俺たちは投げ出したりはしねえ。科学技術は万能じゃないが、神は万能だからな」

「・・・」

ゼフオン博士が足を止め、僕たち二人を見上げた。眼鏡がちよつどガラス工房の光を反射し、その奥にある瞳を完全に隠している。表情が読めない。

先輩みたいにきつぱりと『神は万能だ』と言い切れなかった自分の、信仰者としての不甲斐なさに内心歯噛みしつつ、僕は驟雨のごとく降り注ぐであろうゼフオン博士の反論、毒舌に備えて身構えた。医者に向かって正面きつて科学技術を批判するのは喧嘩を売っているのと同じだ（もちろん先輩はそのつもりで言ったんだろうけど）。まず、なんとかして博士をなだめなければ。

微妙な間があった。博士の口元がふと動いた。笑った　　ように見えた。でも、まさか、そんな。

博士はそのまま何も言わずに、また歩き始めた。

街道に着き、博士が馬車に乗りこむまで、誰も口をきかなかった。僕は、いさかいを仲裁せずに済んでほっとしながらも、「神の力での症状を治せるのか」と尋ねた博士の真剣な声を思い出していた。その中にほんの少しだけど、すぎるような気持ちも混じっていたと感じられるのは気のせいだろうか？

僕の次の行動は、考えてしたものではなかった。

「博士をチェトウス町まで送ってきます」

先輩にそう言い残して、博士の後から馬車に飛び乗った。扉が閉じるのを待ち構えるように御者が馬にぴしりと鞭をくれ、馬車は街道を勢いよく走り出した。

狭い車内で博士と僕は差し向かいに座っていた。博士は驚いたように僕をまじまじとみつめていた。

「えーっと・・・」

車輪から伝わる地面の凹凸に揺られながら、僕は懸命に言葉を探した。まったく衝動的に乗りこんだので、何を話せばいいのか考えていなかったのだ。

「あの・・・『生命の欠片』ってどういうものなのか、もっと詳しく教えてもらえませんか。僕、初めて聞いたので・・・」

「あなたの相棒に訊いてみりゃいいだろう。かなり知っている様子だったぞ」

「いや・・・その・・・情報は自力で集めてこい」って、いつも

先輩に言われてるものだから・・・」

僕は口ごもった。ゼフオン博士は丸眼鏡の奥から不機嫌な表情でしばらくこちらを睨んでいたけれど、やがてため息をついて、説明してくれた。

第1話「生命の欠片」(8)

『生命の欠片』はサハという植物から作られる。根を乾燥させ、精製して、痛み止めを作るのによく使われてきたもので、帝国の中西部を中心に多く自生している植物だ。

あるとき誰かが　おそらく、痛み止めの精製にすっかり失敗した医者か薬師が　その精製の途中で強い圧力を長時間にわたって加えると、また別の効果を持った薬物を生み出せることに気づいた。それは人の心や身体の働きをとつもなく高める薬で、まるで生命そのものを燃え上がらせるように見えることから、『生命の欠片』と呼ばれるようになった。人の創造力を高め、眠っていた能力を引き出し、そのうえ疲れを知らず何日もぶっ通しで働くことを可能にする。夢のような薬だ。

けれどもそれほど世間には出回っていない。ほとんどの人には名前さえ知られていない。理由のひとつは精製が困難だということだ。サハを純度の高い『生命の欠片』に変質させるために必要な圧力は、近ごろ帝都あたりで使われるようになった蒸気機関という装置によつてしか得られない。そんな装置は国中に数えるほどしか存在しない。

また、『生命の欠片』が広く出回っていないもうひとつの理由は、「あれが人間をボロボロにしてしまう薬だからだ」

ゼフォン博士は馬車の窓を見やりながら、静かな声でそう言った。窓の外は漆黒の闇で塗りつぶされている。ティアル村からチエトウス町までの街道は、街道とは名ばかりの踏み固められた地面で、不毛の大平原をただまっすぐに走っている。真つ暗な視界の中で、馬車の前部に取り付けられたランプだけが唯一の光源だ。僕は息をつめて博士の次の言葉を待った。

「『生命の欠片』は、人間の生命力を高める薬ではない。そんな薬など存在するはずもない。神経を興奮させて、疲れを感じに

くくさせるだけなのだ。薬が効いている間は不自然なほど活動的な状態が続くが、それは体に無理を強いているに過ぎない。眠気や疲れといった、体の発する危険信号を無視して、ろくな休息もとらずに何十日も働き続ければ、待っているのは衰弱だ。あの薬に取りつかれた人間はたいてい、自分は元気いっぱい力で才能にあふれていると信じながら、最後の一瞬まで働きづめに働いて死ぬのだ」

「でも・・・そんな恐ろしい薬なら・・・さつさと飲むのをやめればいいじゃないですか。何日も眠らずにいるなんて異常だ。自分でもおかしいと気づくはずです。そりゃあ薬をやめれば、タクマインさんみたいに苦しい目に遭わなくてはいけないんだから、ためらう人もいるだろうけど・・・死ぬよりはましですからね」

僕の言葉に、博士がためた笑う気配が伝わってきた。

「それは難しいだろうな。『生命の欠片』には人の心を奪ってしまふ魔力がある。薬が効いている間は、本当に自分が万能になったかのような、すばらしい高揚感が得られるので、その感覚を忘れることができず、繰り返し薬に手を出すらしい。とり憑かれてしまうのだよ。無理に薬をやめさせようとすると半狂乱になって暴れ出す。わしもこれまで何人か『生命の欠片』の虜となった人間を見てきたが、どいつも体が衰弱しきってボロボロになっているのに、『生命の欠片』が欲しいと懇願しながら死んでいった。そういう意味で今夜の患者のような男は珍しいよ。薬を絶ちたいと考える、よほど強い理由があるのだろうか」

僕は、死んでも離れないと言わんばかりに寝台で堅く抱き合っていたタクマイン夫婦の姿を思い出し、胸が詰まった。

きっとタクマインは妻のために『生命の欠片』を絶つ決心をしたんだろう。妻に心配をかけたくないから、黙ってひとりで乗り越えようとしているのだ。医者にかかることを拒んだのは、診察を受ければ異常の原因が妻に知れてしまうと恐れたからに違いない。そして、毎夜のように背中を掻き裂かれながらも、少しでも夫が苦痛をしのぎやすくなるようにと耐えているミレイユ。まさに夫婦

愛の鑑ではないか。この善良な夫婦を助けるのが、神の使いたる僕の使命だ。

そう決意を固めると、気合いが満ちてくるのと同時に、いくつかの疑問が僕の胸に湧き上がってきた。

「その『生命の欠片』っていうのは、簡単に手に入る薬ではないんですよね」

僕の質問にゼフォン博士はうなずいた。

「さっきも言ったように、ほとんど出回っておらん。おまけに非常に高価なものだ。貧乏人がやすやすと買えるような物ではない。売ってくれる相手をみつけれられたとしても、な」

「タクマインさんはどうやって『生命の欠片』を手に入れたんでしょう。それに・・・どんなに苦しくても薬を絶とうとがんばれるぐらい意思の強い人が、どうしても『生命の欠片』など飲み始めたんでしょう?」

博士は鋭い視線でじつと僕を見据えた。馬車の前の窓から入ってくるランプの光が、博士の眼鏡に小さく映って揺れた。長いあいだ封じこめてきた秘密を打ち明けるみたいにな重々しい口調で博士は言った。

「わしにはわからん。それは医者領分ではない。・・・だが、この一年でわしが診た『生命の欠片』の患者はあの男で六人目だ。こんな田舎で六人だぞ? けっして少ない人数ではない。共通して言えることは、患者は六人ともわしの見たところ普通の職人で、生まれた村をほとんど出たこともない生粋の田舎者で、金持ちでも土地持ちでもなかったということだ。そして今夜の男以外の患者は皆、

『薬が欲しい』と泣き叫びながら死んでいった」

僕はすっかり博士の話にひきこまれていたので、馬車がいつの間にかチエトウス町に入っていることにまったく気づかなかった。博士の屋敷の前で馬車は止まった。立派な玄関が、主の帰りを待つように、いくつもの飾りランプで明るく照らし出されていた。僕らは降り立ち、僕は御者に金を払った。馬車との契約はここまでだから、

僕はティアル村まで街道を歩いて帰らなければならない（使徒の移動手段は基本的に徒歩だ。夜中の真つ暗な大平原をひとりで歩くなんて嫌だ、という神経の細い人は使徒向きではない）。

少しここで待っていなさい、と言い残してゼフォン博士は扉の中へ消えていった。しばらくたって屋敷から出てきた博士の手には一輪の花が握られていた。

可憐な感じの花だった。女性のかぶる丸帽子に似た形の小さな白い花が五、六個ずつまとまって付いて、頭を垂れている。花卉の縁だけがひどく濃い紫色なのが目を引く。葉は細長い。

博士はその花を僕に手渡した。

「・・・これが、もしかして・・・」

「そう。サハの花だ。どこかで見かけることもあるかもしれない。よく覚えておくことだ」

その口調にまだ何か含まれているような気がして　僕は相手の表情を探った。だが博士はそれ以上何も語らず、おやすみ、と屋敷の中へ姿を消した。

第1話「生命の欠片」(9)

翌朝早く、僕が教会に顔を出すと、雑巾を手にして辺りを懸命に掃除しているミレイユの姿があった。村人からの寄付で、礼拝堂に並べられている椅子の数は日に日に増えてきている。村の大工が昨日壁と天井を修理してくれたおかげで、教会は建物としての体をなし始めている。ミレイユは力をこめて、不揃いな椅子を磨きたてているところだったが、僕の姿を認めると顔を上げ、「昨日はありがとうございました」と笑った。目の下にうつすらと隈のできているその笑顔は、痛々しかった。

ひと通り掃除を終えると、ミレイユは僕に歩み寄ってきた。

「お祈りのしかたを教えていただけませんか、使徒様。わたしはこれまで神の御教えを耳にする機会がなかったものですから、お祈りを知らないのです」

まっすぐに僕を見上げて、憂いに満ちた笑みを浮かべた。

「お笑いになってくださって結構です。何も知らない、何もできない愚かな女ですわ。ただ日々の生活のことだけで頭がいっぱいの。そんな女ですけど、夫が助かるように・・・夫が神様を受け入れる気持ちになれるように、毎日ここで祈りたいと思います」

僕は彼女に真言聖句集を手渡し、これを暗唱できるまで何度も朗読するようにと勧めた。神の使徒たる者は常に冷静でいなくてはならないとわかつてはいるけれど、涙が出そうなほど激しい感情を、内心でもてあましていた。一刻も早く、苦しんでいる彼女と夫に助かってもらいたい、という強い感情だ。

ミレイユが教会で祈っている間、僕は彼女の家へ赴いた。

玄関先で僕を出迎えたタクマインは、あまり快い顔はしていなかった。僕を家の中へ招き入れようともしない。

「ミレイユが話していた坊さんってのは、あんたのことか。ずいぶん余計なことをしてくれたな」

昨夜は苦痛で人相が変わってしまっていたのでわからなかったけれど、ふだんのタクマインは、世慣れた落ち着いた雰囲気を持つ男だった。こちらをまつすぐ見据える目には知性と強い意志の光が宿っている。現実とうまく折り合いをつけている人間。言い換えると、信仰とは最も縁遠いタイプ、といったところだ。その僕の印象はたちまち裏づけられた。

「どうして勝手に医者なんぞ呼んだんだ。ゼフォン博士は金がかかるので有名なんだぞ。昨日だって、目の玉が飛び出るほどの治療費をふんだくられた。まったくいい迷惑だ。あんたにその分の金、請求したいぐらいだよ」

いきなり、この上なく現実的なセリフが飛んできた。

「出すぎた真似をしてしまったことについては、謝ります。でも・・・奥さんはずいぶん心配して、悩んでおられました。何も知らされないというのも辛いものですよ。真実を知ることによって、乗り越えるための力も生まれてくると思いますか・・・」

僕はなんとか話の糸口をつかもうとした。けれどもタクマインにはべもなかった。

「これは俺の問題だ。俺さえ我慢していればカタがつく。我慢なら金をかけずにできるからな。ミレイユが心配してると言うが、誰も心配してくれとは頼んでない。心配してもらったからといって俺が治るわけじゃない。まったくの無駄じゃないか。そうだろうか？」

僕は絶句してしまった。

この人は　ミレイユの背中へのひどい傷跡を見たことがないんだろうか。どういう思いで彼女が毎晩痛みに耐えているか、知らないんだろうか。“無駄”などという言葉がどうして出てくるんだろう。

「夫婦がお互いを思い合う気持ちは、無駄なんかじゃありませんよ。愛は何よりも崇高な感情です。奥さんは、たとえ自分の体が傷ついても、あなたの苦しみを和らげたいと懸命に努力してきたんです。その気持ちを汲み取ってあげてください」

「それが、大きなお世話だというんだ。あんたもミレイユもだ。心配の押しつけはやめろ。愛情の強制もまっぴらだ。俺がいつ、そんなものを欲しいと頼んだ？俺は独立独歩の人間で、誰の世話にならなくても生きていける。ミレイユも、無駄な事に気をもんでいる暇があったら、料理や掃除に時間をかければいい。その方がよっぽど役に立つつてもものだ。あいつ程度の頭でものを考えようとしたところで、どうせろくな考えは浮かばないんだから」

「世の中には、本当は、『独立独歩の人間』なんてひとりも存在しないですよ。自分だけの力で生きていける人間なんていない。誰もがお互いに、誰かの世話になりながら生きてるんですから」

僕は穏やかな口調を保とうと努力したけれど、見事に失敗しつつあった。感情が先走って、声が裏返りかける。いけない。神学校で習った『説法の時の正しい発声方法』を思い出そう。

けれどもタクマインは僕の動揺など気に留めていないようだった。世間に恥じる事なくまっとうに生きている人間の堂々たる態度をもつて、腰に両手を当て、胸を張った。

「違うな、お坊さん。自慢じゃないが俺は生まれてこのかた、他人様の世話になったことはない。他人の支えを必要とするのは愚か者や弱い人間だけだ。そう、ミレイユみたいにな」

僕は思いつく限りの言葉を尽くして、タクマインの関心を信仰の話題に向けようと努力したが、彼の頭の中には「神」に近いものはまったく存在していないらしかった。この人は妻に感謝することさえ知らないのだ。“より偉大な存在”によつて生かされていることの有難さを、理解してもらうなんて至難の業だ。僕との会話を早く打ち切りたくてうずうずしているらしい彼から、『生命の欠片』をどこで入手したのか訊き出そうとしたけれど、明確な答えは返ってこなかった。

「悪いが、いくら訪ねてきてもらっても、教会に対する寄付金とかそういうものは出さないぞ。うちには無駄遣いできるような金はないんだ」

そう言い残して、タクマインは僕の鼻先で扉を閉じてしまった。

第1話「生命の欠片」(10)

タクマインと別れてから、どこをどう歩いたのか覚えていない。教会までの距離なんて、たかが知れているはずなのに。

正直言つて、打ちのめされていた。

タクマインに信仰の話の説けなかったことが悔しいわけじゃない使徒として布教の旅をしていれば、あの程度の冷たい応対は日常茶飯事だ。スムーズに話を聞いてもらえる方が珍しいぐらいだから。僕がシヨックだったのは、ミレイユと夫との間に、僕が想像していたような麗しい夫婦愛が存在していなかったことだ。

タクマインが『生命の欠片』を絶とうと決めたのは、妻のためではなかった。

「金がかかって仕方ないからだよ。知ってるかどうか知らないが、高いんだ、あの薬は」と彼は言い放つたのだ。

そして彼が医者にかからず、独力で苦痛を乗り越えようとしたのは、ミレイユを心配させなくなかったからではなく、単に医者にかかる金が惜しいからだだった。

ミレイユが気の毒だった。背中肌の色が変わってしまったまで傷だらけになりながら夫に尽くしているのに、夫はそれを“心配の押しつけ”としか見ていないなんて。

教会に戻って彼女の顔を見るのはつらかった。けれども逃げるわけにはいかない。

僕が村のほぼ中心にある、かしいで崩れかかった教会の建物に近づくと、朽ち果てた扉の向こうから、

「われ祈る。わが内に常に存在する母なる神に。万物の内に存在する造物主たる神に。われ願う、わが祈りを神が聞き届けんことを。われ願う、神の言葉がわれに届かんことを。わが神は世を救うために到来された不偏の光なり。わが神は万物に祝福と栄光とをもたら

す根源なり。わが神は混沌を支配する秩序にして、たん・・・たん・・・たんすを破壊する永遠の変調なり。われ唱えん・・・」

と真言聖句の冒頭部分を唱えているミレイユの澄んだ声と、
「たんすじゃねえ！」 “単調を打破する永遠の変調”だ。何べん同じところで間違っただよ、おまえは。字もまともに読めねーのか？
神がたんすを破壊するわけあるか、アホ！」
という、思いつき聞き覚えのある罵声が響いてきた。

「先輩！ そんな言い方しなくなつて・・・！」

あわてて僕が礼拝堂内に駆け込むと やけに明るく、小ざれいに見える室内で（それは先ほどミレイユが熱心に掃除してくれたからだろうけど）、説教台の上に投げやりな姿勢で腰を下ろした口ラン先輩と、不ぞろいな椅子のひとつに両膝を合わせて腰かけたミレイユとが、揃ってこちらを振り向いた。驚いたことにミレイユの顔に晴れ晴れした表情が浮かんでいる。

「お帰りなさい。・・・どうでしたか、主人の様子は？」

明るい声で尋ねられて、僕はとっさに言葉を返せなかった。

「えーっと・・・あの・・・それはですね・・・」

ミレイユはそれ以上深く追及しようとはしなかった。曇りのない笑顔を浮かべて、真言聖句集の本を胸に抱きしめ、

「わたし、使徒様のおっしゃった通り、お祈りの練習をしています。難しいんですね、お祈りつて。でも楽しい」

「ええっ！？ 楽しいんですか、今ので・・・？」

僕は耳を疑った。ミレイユは笑顔のままうなずき、そろそろ帰らなくては、と立ち上がった。

「ありがとうございます、使徒様。また明日参ります」

僕に向かって丁寧に会釈して、礼拝堂を出て行く。僕はあっけにとられてその背中を見送った。彼女のあんな明るい様子は初めてだ。出会った日以来、悩みと心配に打ちひしがれた彼女しか見たことがなかったから

「まさか、僕のいない所で、あの人を脅したりしてないでしょうね、

先輩？ 『楽しいって言わなきゃぶつ殺す』とかなんとか」

僕が尋ねると、ロラン先輩は泣く子が怯えて黙りこむほど凶悪な表情になり、「そんなこと言うわけねーだろーが。テメエ人を何だと思ってるんだ」と唸った。もし手の届く距離にいたら、ぶん殴られていただろう。

「真言聖句は神に呼びかけ、神と語らうための言葉だ。たとえ間違えただけでも、神の言葉を唱えていれば、心が澄んで明るくなってくるのは当たり前だ。テメエ使徒やってて、そんな事もわかんねえのか」

「う……」

ときどき先輩は教科書通りの大正論を口にする。ふだんの実際の行動とギャップがあり過ぎるから、こっちは面食らってしまうんだ。

僕がひとことも返せずにいると、突然、額ですごい衝撃が弾けた。目の前が真っ暗になった。気づいたときには床にしゃがみこんでいた。額が痛い。とんでもなく痛い。その痛みの原因は、僕のすぐ足元に転がっている、壁の漆喰を塗るのに使う鏝「こて」らしかった。昨日教会の修理をしてくれた大工が忘れていったものだ。鏝

「うわ。投げましたね、こんな重くて堅い物を？ 僕を殺す気ですか！」

僕の抗議をロラン先輩はさらっと聞き流した。

「行くぞ。仕事だ。いつまでもそんな所にぐずぐず座りこんでるんじゃないよ」

「いったい誰のせいだ……って。仕事！？ 何のことですか？ どこへ行くんですか？」

ずきずきする額を押さえながら 幸い、血は出ていなかった

僕はあわてて立ち上がる。先輩は説教台から飛び降り、さつさと僕の横を通り抜けて、すでに礼拝堂の外へ出ようとしていた。外では日がさらに高く昇っていた。早朝と呼べる時刻は過ぎ、そろそろ仕事や家事を始めようとしている村人たちの姿がこちらこちら

で目についた。

「始祖ドヴァラスは『万物は流れている』とおっしゃった。流れを
読め、・・・澱みを感じ取れ。流れがせき止められて澱む所には必
ず濁りが生じる。例えば、富の不自然な蓄積のある場所、とかな」

「富の不自然な蓄積？ そんなもの、どこにあるんですか」

早足で歩いていく先輩に追いつこうとして、僕は小走りになる。

先輩が急に足を止めたのでぶつかりそうになった。不穏な目つきで
睨まれた。

「おまえ、あいかわらず、本部支給の資料をぜんっぜん読んでねえ
みたいだな。ちったあ勉強しやがれ、バカ野郎！」

いきなり後頭部に衝撃が来た。さっき額に鏝をぶつけられたばか
りだから、今度の一発はいつそうこたえた。僕は思わず頭を守るよ
うに抱えこんでいた。

「ムチャしないでくださいよ。人の頭だと思って気安くポンポン叩
いて。本当にバカになったら、どうしてくれるんですかー！」

叫びながら、ふと僕は、タクマインとの会話の後に残った苦い後
味をいつの間にか忘れていることに気づいた。

ロラン先輩みたいな同行者と組んでいると、落ちこんでいること
など許されないのだ。

そして『すべては神の贈り物。喜んで受け取るべし』という始祖
ドヴァラスの言葉に従えば　そんな境遇もひとつの恵みである
と考えられなくもない。喜び上手であること。それが僕のような立
場の者に求められる資質なのだ。

数刻もしないうちに僕らは再び村外れを歩いていた。タクマイン
家の向こうにある、巨大なガラス工房がどんどん近づいてきた。

第1話「生命の欠片」(11)

すぐ近くで見上げると、改めてその大きさに圧倒される。どっしりした褐色の煉瓦で組み上げられた、三階建ての直方体の建造物だ。装飾のほとんどない簡素なつくりの建物だが、ガラス工房だけのことはあつてガラス窓は実にたくさん付いている。各階ごとに、黒い金属製の枠で囲まれた縦長の窓がいくつも平行に並んでいる。頭上に広がる薄曇りの空を映して、何十枚ものガラス窓が白く輝いた。大きな自動工具を動かしているらしい、単調で機械的な音が振動となつて地面を伝わってきた。

このガラス工房の持ち主で、タクマインの元雇い主でもある人物の名は、オーランド・ヴォールダーという。

ロラン先輩が説明してくれたところによると、カロリック大平原でも指折りの資産家。そして“科学者”にして“実業家”だという。“科学者”も“実業家”も、今までの古い社会では見られなかったタイプの人たちだ。“文明や技術の進歩”と共に出現した新しい人種。最近は各地でちらほら見かけるようになったけど、まだまだ数は少ない。ヴォールダーはその“科学者”と“実業家”の両方を兼ねているから、いつそう珍しい存在だ。

彼はティアル村の大農場の次男として生まれた。少年のころから科学技術というものに対する強い関心を持つていた彼は、成人すると村を離れ、帝都アレリーズへ出奔した。科学技術の最先端の地であるアレリーズで、薬師としての修業を積んだ。

彼と同じく科学に興味を持っていた兄が、屋敷の一部を改造した研究室で実験をしている間に爆発事故を起こして亡くなったのは五年前のことだった。農場を継がなければならなくなり、ヴォールダーは都からティアル村へ帰ってきた。けれども彼は農場主とはならず、農場の土地を利用してガラス工房を建てた。最初はまだ、納屋に毛が生えた程度の大きさの建物だった。

もともとカロリック大平原ではガラス産業が盛んだった。原料となる石灰がソルバド山脈で多く採れるためだ。それぞれの町や村に必ずといっていいほど数軒の工房があり、親方から弟子への技術の伝承が行われてきた。『カロリック赤「ラクタ」』と呼ばれる、血のように鮮烈な真紅を特徴とするカロリック大平原のガラス製品は、昔から帝国内でも有名で、愛好者も多い。けれどもひとつひとつを手作業で仕上げていたため、数多くを製造することはできないでいた。

それを変えたのが、ヴォールダーの画期的なやり方だ。彼は大勢の職人たちを工房に集めた。ガラスを作るために必要な作業を細かく分け、それぞれ別々の職人に担当させた。砂や石灰などを混合する作業。混ぜ合わせたものを液体状のガラスだねに溶融する作業。ガラス窯の口のところで液体状のガラスだねを加工する作業。ガラス製品を乾燥窯から取り出し、分類する作業。出荷のため運び出す作業。これまで一人の職人がやっていた工程を、数十人の職人が手分けして行うことになった。ガラスだねの加工作業でさえ、「搬入工」「製造工」「吹き細工工」「集め工」「積み上げ工」という五人の職人で手分けした。こうやって分業することで、ひとりひとりの担当する作業が単純なものになったので、より手早くできるようになった。同じ作業の繰り返しになるので、作業から作業へ移行するための無駄な時間もなく効率よく仕事を進めることができるし、大勢で集中して作業をするので材料や道具を無駄なく使うことができる。ひとつの作業所で五十人が集まって手分けして働くことによつて、五十人の職人が五十の工房で作っていたころよりも桁違いにたくさんの製品を作れるようになった。ヴォールダーの工房は数多くのガラス製品を出荷し、多額の利益をあげた。

ヴォールダーは気前のよい雇い主だった。工房が儲かると、職人たちにもその分賃金はずんだ。腕のいい職人たちが遠方からもどんどん工房に集まってきた。ヴォールダーは窯を増やし、さらに大勢を雇い入れた。未熟な見習い職人にもできる仕事はあったので人

集めに苦勞はなかった。ヴォールダーは工房を開いてわずか五年で三百人以上の職人を抱える大実業家となり、巨万の富を築き上げた。

「・・・悪い人には聞こえませんが」

それが僕の正直な感想だったから、そのまま口にした。

「頭のいい商売の方法を思いついて、成功した。誰に迷惑をかけてるわけでもない。それどころか、このガラス工房のおかげで職人は高い賃金をもらえているし、ティアル村も豊かになってるんですね？ 立派な人じゃないですか、むしろ」

ロラン先輩は鼻を鳴らした。

「まだ悪人だとは言つてねーよ。ただ、アレリーズで薬師やってたんなら、『生命の欠片』のを知る機会があったはずだ。昨日のアホ医者を除けば、このヴォールダーっておっさんが、この辺りで『生命の欠片』にいちばん近い位置にいる人間、ということになる」

「出所を・・・つきとめるんですね。あの薬の」

工房からの光を浴びた夜中の寝室。苦痛に歪むタクマインのすさまじい形相。獣のような叫び声。それらがぞつとするような鮮明さでよみがえってきて、僕は思わずごくりと唾を飲んだ。

僕は好奇心の強い方じゃない。謎めいた事象の真相なんて、別に知りたくないんだ。闇に隠されている事実は、明るみに出してみると、正視に堪えないおぞましいものであることが多い。だったらそんなもの闇の中に放っておいた方がいい。僕らの仕事は人を救うことであつて悪行を暴くことじゃない。それは、都から各地に派遣されている治安維持部隊《白服隊》の仕事だ。

けれども『生命の欠片』の出所を見つけ、阻止しなければ、これからもあの薬のせいで苦しむ人が生まれ続けるだろう。だとすると、これもやっぱり神の使徒としての務めなのかな。僕はそう自分に言い聞かせ、気の進まないまま工房の玄関の呼び鈴を押した。せめてこれから会うヴォールダーが悪人でないことを、神に祈っていた。

自分だけでなく周囲にも富をもたらしている成功者は善人であるはずだ。そうであってほしい。

第1話「生命の欠片」(12)

実物のオーランド・ヴォールダーは“こざっぱりした”という形容がぴつたりの五十歳前後の男だった。薄くなりかけた髪をきちんと撫でつけ、恰幅のいい体を、都会風の洗練されたデザインの服に包んでいる。磨き立てられた白い靴には埃ひとつ付いてなさそうだ。色白の顔に、にこやかな笑みを浮かべていた。

「この工房では、人が“命”なのです。すべてを生み出し動かしているのは人間の力ですから。私は工房で働いてくれている職人から感謝しておりますし、職人を大切にしていきたいと思っております。ここでは今、三百二十四人の職人が働いていますが、私はそのひとりひとりと家族同然のつき合いをしておりますよ。本当に、職人たちは私の家族のようなものです。いや、家族以上ですな」

深い響きをもつ、耳に心地よい声。

事業で大成功を収めた資産家にしては当たりの柔らかい人だな、と僕は感心した。こうやって実際に顔を合わせるまで、どんな強烈な人物かと戦々恐々としていたのだ。どこの馬の骨とも知れない若造が何の約束もなく訪ねてきて、いやな顔ひとつせず、すぐに会ってくれる。ずいぶんよくできた人らしい。

「今日はここで働いていたタクマインさんのことについて、うかがいたいと思って来たんですが・・・」

ヴォールダーは何度もうなずいた。「ホレス・タクマインですか。ええ、覚えていますよ。とても腕のいい磨き工でね。うちとしても重宝していたのですが、健康上の理由でどうしても辞めたいと言って、二月ほど前に退職していきました。残念でしたし、意外でした。これと言って健康に問題がありそうな男には見えなかったの・・・」

ヴォールダーと僕は、工房の中を肩を並べて歩きながら会話していた。広々とした空間だった。外から見ると三階建てと見える建物

の内部は、実際には天井の高いひとつの大部屋になっている。たくさん窓から差し込む日差しのおかげで、室内は明るく快適だ。窯や大鍋、木製の長テーブルなどが整然と配置され、そこにきちんと間隔を置いて並んだ職人たちが、僕には用途のわからない道具を使って、てきぱきと作業を進めている。忙しげに丸いガラス瓶を磨いている職人のひとりが、親しげにヴォールダーに声をかけた。ヴォールダーも笑顔で言葉を返した。なごやかな雰囲気は漂っていた。ロラン先輩は僕らとすこし離れて、肩をいからせ、ぶしつけな鋭い視線を工房内の至る所に投げかけながら歩いていたが、非常に柄の悪い態度で、神に仕える人にはとても見えなかった。不意に僕らのやり取りに割り込んできた。

「ここでの仕事がキツ過ぎて健康を害した、ってことはないのか？」
う。なごやかな雰囲気を一瞬でぶち壊す、真つ向ストレートの暴言だ。僕は身の縮む思いで首をすくめる。この場から消え去ってしまった。良かった。」

ヴォールダーは笑顔を崩さなかった。でも周囲の温度がすーっと下がったような気がした。

「・・・どういうことですか？」

「何人もの人間が手分けしてひとつの製品を仕上げるってことは、だれかひとりでもペースを乱すヤツがいれば、全体の作業が止まっちゃうってことだ。朝から晩まで一瞬も気を抜かず、常に周りに合わせて一定の速さで働き続ける。あんたが職人に求めているのは要するにそういう事だ。人間に、自動工具になれと言ってるわけだ。そんなんじゃない体を壊すヤツが出るのは当然だと思っぜ。・・・それに、聞いた話じゃ、この工房の窯は決して火を落とさないんだってな。昼も夜も製造を続けていると。働いてる連中をちゃんと休ませてもらってるのか？」

ヴォールダーはしばらく答えなかった。どんな憤慨の表情を浮かべているだろう、と思っただけれど意外にも彼はまだ笑顔だった。ずいぶん失礼な事を言われているのに、気分を害した様子もない。

「夜も窯の火を落とさずにいるのはね、人より多く働きたいという職人に機会を与えるためですよ。うちでは働いた者にはその分だけ賃金で報いることにしていますので。皆よくやってくれます。無理をしても夜中に働くように、私から指示したことは一度もありませんよ」

「その割に、コイツらみんな顔色悪いぜ。墓の下から這い出してきた死人みたいな顔じゃねーか」

「たしかに今はちょっと疲れ気味かもしれませんが。大口の注文が入って、しばらく忙しかったものでね。でも、休めばすぐ良くなる程度のもですよ。・・・お疑いでしたら、ここで働く者、だれにでも尋ねてみてください。私に深夜の作業を強制されているのかと。」

答えは、間違いなく、『否』です。だれに訊いてもらってもいい」
ヴォールダーの対応は立派だった。落ち着いていて、堂々としていて、揺らぎがない。まさしく良心に曇りのない人の態度だ。ロラン先輩は「ちっ」と舌打ちしてそっぽを向き、その態度はまさしくちんぴらのものだった。僕は辺りを見回した。先輩に指摘されるまで気づかなかった、たしかにどの職人も、目のまわりがどす黒く縁取られている。憔悴しているのは明らかだ。表情だけは、やけに朗らかなんだけど。

ヴォールダーはふと足を止め、こちらに向き直った。両腕を大きく広げ、辺り全体を包み込むような仕草をした。

「ご覧ください、使徒様。ここには、まったく新しい形の『労働』があるのです。あなた方がよくご存知の古い形の労働とは違っているのです、初めは受け入れがたいのも無理はありませんが・・・人と人が力を合わせることによって、より大きな結果を生み出す。一足す一が二ではなく十にも百にもなる。それが分業の力。それが効率化というものです。すばらしいじゃありませんか？ この工房の成功は、人が協力し合うことの尊さを示す証拠なのですよ。人の和を尊ぶのは神の御教えにもかなっていると思うのですが、いかがです？」

「ええ・・・そうですね」

僕は相手の熱意に押され、あいまいにうなずいた。整頓された工房内で、大勢の人間がてきぱきと作業を進めている様子には、たしかにある種の美しさがあるな、と思いながら。

「私は予言します。ここ数年のうちに、このような種類の労働が国じゆうに広まっていくだろうと。なぜならこれは、神にも祝福された仕組みであり、万人に幸福をもたらす仕組みだからです。・・・近いうちにガラス製品を作るだけではなく、真鍮の鋳造も始めようかと思っっているのですよ。そうすればガラス製品に金属をはめ込むことができますから。よその鋳造工に仕事を頼むより、うちの工房の中でまとめて行った方がずっと効率がいいはずです。真鍮の鋳造が軌道に乗れば、また別の製品へ発展させることもできるでしょう。このようにして我々はあらゆる方向へ進歩していけるのです。どこまでも」

ヴォールダーは瞳を輝かせ、夢見る人の熱意をもって語った。進歩を語るとき、人は往々にしてこういう憑かれたような表情をする。進歩について論じるのは僕の意図ではなかったため、とりあえず、こちらの訊きたい内容に話を戻させてもらうことにした。

「ところで 『生命の欠片』、というのをご存じですか」

ヴォールダーは夢から現実に取り戻されたという風情で、急にまじめな顔になって僕をみつめた。

「私はアレリーズで薬師をしておりましたから、噂だけは聞いたことがあります。人の生命を燃え上がらせる禁断の薬だと。それが何か？」

「このカロリック大平原で 『生命の欠片』 が手に入るでしょうか？ その、つまり・・・そういう薬を作ったり、売ったりしている人物の話をお聞きになったことはありませんか？」

「それは・・・もしかすると、タクマインのことと何か関係が？」
僕は返事につまった。どう説明すればいいのか見当もつかない。

ヴォールダーは穏やかに微笑んだ。こちらの動揺を見て取りつつ

も、それを追及したりせず、その場をなごやかに収めようとする。大人の態度だ。

「聞いたことがありますな。そもそも本当に存在するのでしょうか、そんな絵空事のような薬が？ 私も名前だけは聞いていますが・・・実際にそれが作られたとか、販売されているとか、そういう話は聞いたことがありませんぞ」

彼の返事はきっぱりとしていた。

数刻後。ヴォールダーと別れた僕らは工房の中庭に立っていた。

外からは巨大な直方体に見えた工房の建物だけど、実際は中庭を囲むコの字型をしていることがわかった。中庭は咲き乱れる色とりどりの花に埋めつくされ、殺風景ともいえる工房の外見からは想像もできない華やかさだ。雲を通り抜けてきた淡い日光が花と僕らの上に降り注いでいた。工房からの機械音は休むことなく続いている。工房の建物の、コの字の開口部を塞ぐようにして、工房より古そうな石造りの建物と二階建ての木造の建物が並んで建っていた。石造りの建物は飾り気のない平屋造りで、用途が何なのか見当もつかない。小さな窓はすべて内側から黒い幕でふさがれている。木造の建物の方は窓が多くて、見たところ、住み込み職人たちの宿舎らしかった。軒下に洗濯物が吊るされ、生活の営みを感じさせた。

花畑の織りなす明るい色彩模様の中で、ロラン先輩が僕を振り返った。

「で、おまえはこれからどうするつもりだ？ 何か考えはあるのか」

「え。そんなこと急に言われても・・・」

僕は口ごもる。正直、何も考えていなかったのだ。だって僕はいきなり先輩にこの工房へ連れて来られたただけだ。ヴォールダーが『生命の欠片』と関係しているかもしれない、というのも先輩の思いつきだし・・・。

先輩は露骨に鼻を鳴らした。

「おまえ、いい加減に自分の頭で考える習慣をつけろよ。そんなだから、いつまで経つても免罪符一枚売れやしねーんだぞ」

「えーっと・・・とりあえず、ヴォールダーさんは悪い人じゃないと思います。あんなに使用人を大事にしている人が、悪人のはずありません。『生命の欠片』の出所は、他を探した方がいいんじゃないでしょうか」

僕は心に浮かんだままの事を口にしたけど、説得力なさそうだな、とは自分でも感じていた。

案の定、ロラン先輩は険悪な顔で僕を睨んだ。

「どうせおまえのことだから、あのおっさんの言う事をみんな真に受けて、『すごいなー』とか感心してたんだろ。忘れるな、コトバってのは、いちばん簡単に人をだませる道具だぜ」

僕は反論したかった。僕だって自分がだまされやすいお人好しであることは自覚してる。子供の頃からずっとそうだったから。でも僕の敬愛していた隣村の司祭様は「人を疑って、損をせずに生きていくより、人を信じて、だまされて損をしながら生きていく方が尊い」とおっしゃってくださいました。その言葉は今でも僕の支えとなっているんだ。

ロラン先輩は僕の返事を待たず、踵を返して、木造の建物に向かってさつさと歩き始めるところだった。

「どこ行くんですか、先輩」

びつくりして僕が尋ねると、先輩は振り返りもせず、

「職人連中の住処「すみか」を見てくる。ひよっとするとそのへんに『生命の欠片』が転がってるかもしれないねえ」

「え。いいんですか、勝手に入っちゃって？」

「よくないに決まってるだろーが。つまんねえこと訊くんじゃねーよ」

「それじゃ泥棒と同じじゃないですか。僕は行きませんからねっ」
するとロラン先輩は足を止めてこちらを振り返った。

「あつたり前だ。だれがおまえみたいなの図体ばかりでかいブキツチ

ヨなんか連れて行くか。見つけてくれと言ってるみたいなんだ」
そして本当に行ってしまった。職人宿舎の中へ。

僕はしばらくその場に立ちすくんでいた。

置いてきぼりにされた。その事実が頭に染みこむまで、時間が
かった。

うわあ。問答無用で人を引きずり回しておいて、いきなり置き去りなんて。何て親切な先輩なんだろう。聖職者の鑑だよ、まったくもう帰ろう。ヴォールダーはタクマインの事と無関係なんだから、僕がここにいるべき理由はない。それに、ロラン先輩の無断侵入が発覚して騒ぎになったとき、こんな所において巻き添えを食いたくはない。

けど 不思議だな。なんとなく立ち去りがたいものを感じるんだ。足が地面に張りついたように動かない。そよ風に揺れている色とりどりの無数の花から目を離せない。何か心がひつかかっている。それが何かはわからないけれど。先輩がいつも言ってる「流れを感じる」というのは、こういうことなんだろうか。

とつぜん僕は、自分の心を悩ませているものの正体を悟った。

花だ。花が不自然なのだ。

バンディアスタラー管区は緑の少ない不毛の地。特に、管区の大半を占めているこのカロリック大平原は高温の乾燥地帯で、木々を育むのに必要な雨がほとんど降らない土地だ。花畑なんて、この地方に来てから、一度も見かけたことがなかった。

異常なほど生き生きと咲き乱れているこれらの花は、自然に生えているものではない。たぶんヴォールダーが、帝都仕込みの科学技術を使って、人工的に花を咲かせているのだ。本当ならこんな不毛の地で咲くはずのない花を。けれども 何のために？

僕はゆつくりと花の中に歩み入った。何か考えがあつてではなく、目に見えないものに導かれるように。

やっぱり、あった。小さいものだけど、それはすぐに僕の目に飛び込んできた。丸帽子のような形の可憐な花。濃い紫色に縁取られ

た白い花びら。細長い葉。

サハの花だ。

一度発見してしまうと、どうして今まで気づかなかったのかと呆れてしまうほど、たくさんのサハの花が他の花に混じって咲いているのが見てとれた。

べつに驚くことではないのかもしれない。元は薬師であったヴォールダーが、薬効のある植物を庭で育てていても不思議な話じゃない。現にゼフォン博士の屋敷にもサハの花はあったのだから。でもこれを偶然と片づけられるだろうか。

僕は痛いほどに高まる胸の鼓動を持てあましながら、花畑の中ilstって、色彩の乱舞を見回していた。僕の目がふと、中庭に面した扉のひとつに吸い寄せられた。職人宿舎の隣にある古い石造りの建物にただひとつ付いている扉だ。錆の浮いた金属製のその扉は小さくて、大人なら身をかがめなければ出入りできないほどで、しかもいかにも目立たないように設置されている。

あの扉の向こうには何があるのだろうか。それを見ることができれば、いろいろなることが明らかになりそうな気がする。

僕はどきどきしながら石造りの建物に歩み寄った。禁じられた場所に入るうとしている緊張感で、膝が小刻みに震えていた。おそるおそる扉を押ししてみる。錆びているので、軋むかと思ったけど、意外と滑らかに開いた。僕は扉をくぐろうとして身をかがめた

すぐ背後で誰かの激しい息遣いが聞こえた。

次の瞬間、鈍い衝撃とともに目の前が真っ暗になり、僕は果てしない闇の底へと引きずりこまれていった。

第1話「生命の欠片」(13)

意識を取り戻して初めに感じたのは後頭部の痛みだった。

ずき、ずき・・・と大きな苦痛が波打って、吐き気がする。

僕はそつと頭を撫でてみた。腫れあがった箇所に触れると、涙が出るほど痛かった。ずいぶんひどい打撃を受けたようだ。こんなに頭にばかり傷を受けていては、冗談抜きで、本当にバカになってしまつかもしれない。今朝ロラン先輩に饅をぶつけられた額だって、まだ痛むんだから。

重い体を必死ではげまして立ち上がった。立つてみると案の定ぐらりと頭が揺れ、足元がふらついた。すぐ傍らの石壁に手をついて体を支えた。その状態のまま辺りを見回してみる。ひどく薄暗い空間だった。石壁は漆喰塗りもしていないし、足元は床ではなく踏み固められた地面だ。部屋というよりは倉庫か作業場といった雰囲気だ。すぐ近くに背の低い金属製の扉があるので、ここが僕の入り口としていた例の石造りの建物であることがわかる。

薄闇の中で、室内に大きな自動工具や作業台がいくつも置かれているのが見てとれた。部屋の片隅に、不気味な振動音を立て続けている縦長の機械と作業台があつて、台の上にはガラス製の実験器具がいくつも並んでいた。その一角だけが研究室のように見えた。縦長の機械の周りには強い光を放つランプがいくつか置かれていて、機械と作業台をまぶしいほど明るく照らし出している。室内の灯りはそれらのランプだけだ。

機械の前に立ち、目盛りをのぞきこんでは手帳に書きとめている恰幅の良い人物は、オーランド・ヴォールダーだった。彼の他に、室内にはざつと数えて十五、六人の男たちがいた。作業台に腰かけたり、床に座りこんだり、思い思いの姿勢をとっているその男たちは、立派な体格をしているけれど明らかに職人ではなかった。薄闇の中でも見て取れる、崩れた空気を漂わせている。

僕の気配を察したのか、ヴォールダーは振り返った。

「お目覚めになりましたかな、使徒様」

あいかわらず曇りのない笑顔。

あまりにその笑顔がさわやかだったので。今の状況は、僕がうすうす想像しているほどひどいものではないかもしれない、という樂觀的な考えをまだ持ち続けることができた。

「これは・・・どういうことですか？ 僕はいつたい・・・？」

僕は慎重に尋ねた。きつとこの人は筋の通った説明をしてくれるだろう。たとえば、僕がたまたま頭を扉の框「かまち」にこっぴどくぶつけ、意識を失って倒れているのを、工房の使用人がみつけてここまで運んでくれたのだ、とか。

でも返ってきた答えは非情なものだった。

「あなたが立入禁止の区域へ入ろうとしておられたのでね、申し訳ないが、ちよつと眠ってもらいました。ずいぶん『生命の欠片』に興味をお持ちのようですね。タクマインから何か吹きこまれたのですか？」

「まさか・・・あなたはやっぱり・・・！」

善良そのもの、といったヴォールダーの笑顔はいささかも揺らぐことはなかった。

「タクマインのやつめ。困った男だ。口が堅いと信じたからこそ、生きたままここを辞めるのを許してやったのに。私も人を見る目がなかったな」

「あなたはっ・・・！」

足元が崩れ、深い穴の中へ落ちこんでいくような心持ち。こういうのを絶望感と呼ぶんだらう。いい人だと信じたのに。まただまされてしまった。僕は激しい感情のままにヴォールダーの方へ駆け寄ろうとした。間髪入れず、室内にたむろしていた男たちが群がってきた。両腕をとらえられ、床に押さえこまれた。僕は腕力には自信がある方なのに、押さえこまれた腕はびくとも動かなかった。

しまった。ヴォールダーに駆け寄るんじゃなく、扉へ向かって走

つていけば逃げられたかもしれない。身動きとれない状態で反省したけれど、もう遅い。怒りなどという、使徒として抱くべきでない感情にとらわれたりしたから、こんな目に遭うんだ。

鋭い足音が近づいてくる。床に頭を押しつけられた僕の視界に、ヴォールダーの磨きあげられた靴の爪先が入ってきた。僕は頭を押さえる手に必死で逆らって顔を上げた。そして間近に立つ実業家を睨みつけた。

ヴォールダーは温厚な工房主そのものの顔で僕を見下ろしていた。「あなたのお考えになっている通りだ、使徒様。ここは私の秘密の研究所。『生命の欠片』をここで精製していました。もつとも近いうち、ここを真鍮の鑄造作業のために使わなくてはならないので、研究所もよそへ移しているところなんですがね。蒸気機関を移動させるのは大変なので、最後までここに残してあるのです」

「あなたは職人たちに『生命の欠片』を飲ませているんですね・・・夜も昼もなく、彼らを酷使するために。死ぬまで休みなく働かせるためにっ！」

「そういうおっしゃり方は心外ですな。まるで私が強制しているみたいではありませんか」

ヴォールダーはゆったりと肩をすくめてみせた。

「初めは、疲労回復剤として職人たちに配り始めたのですよ。

想像できますか？ ひとつの製品を一から十まで作り上げる代わりに、分断化された単純な作業を、朝から晩まで一定の速度で何百回もやり続けなければならぬ生活というのが、どのようなものか。物を作り出す喜びを感じられないそんな生活は、昔かたぎの職人たちにとっては、堪えがたいものだったようです。昼間あなたのお仲間が言っておられたようにね。疲れを訴える者が増えてきました。失敗が多くなり、作業効率が落ちてきました。それで彼らに『生命の欠片』を与えたのですよ。効果はきめんでした。職人は疲れを知らず働くようになりました。工房の生産高は面白いほどに増えていきました」

相手の口にした“お仲間”という語を聞いて、僕の胸に希望の灯がともった。ロラン先輩が、僕の姿が見えないのを不審に思つて、探しに来てくれるかもしれない。先輩さえ来てくれれば大丈夫だ。先輩は喧嘩が強いだけじゃなく、本来なら人を癒すためにしか使えないはずの法術を攻撃用に転化できる、とんでもない人だから。

問題は　わざわざ探しに来てくれるかどうか、ということだよな。僕のことなんてすっかり忘れて、いつもみたいに旅籠でお昼寝でもしてたら、どうしよう。

ヴォールダーの言葉は続く。

「それを私の罪だとおっしゃいますか？　ご理解いただきたいのですが、工房での製造を続けるために、他に方法がなかったのです。進歩には常に若干の不都合がつきものです。新しい働き方に適応できない者は、科学の力で背中を押してやるしかない。世の中はそのようにして前へ進んでいくのですよ」

「『生命の欠片』は単に人を元気にするための薬じゃない。あなただって薬師なんだからご存じのはずだ。限りある命を短い期間で明るく燃焼させるだけの薬だ・・・その場は疲れが取れても、あとで必ず反動が来るんですよ。それをわかった上で、職人たちに与えたのでしょうか？」

僕は声をふりしぼった。ヴォールダーは重々しくうなずいた。

「仕方のないことでした。私が喜んでいたなんて思わないでくださいよ、使徒様。いったん薬の力を覚えた職人たちは、自らもつと薬を求めるようになりました。夜中も休みなく働きたいと言いつたのも職人たちの方からです。薬のおかげで活力があり余り、いくら働いても疲れを感じない・・・そして働けば働いただけ賃金がもらえる。まさに無限の金鉱のようなものです。彼らにとつても、これほどうまい話はなかったわけです。職人たちがあまりに多くの『生命の欠片』を求めるので、こちらも初めは無償で与えていたのを、一粒いくらかと代金を取るようにしました。そうしないと、きりがありませんので」

僕はタクマインの言葉を思い出していた。そして質素な家には不釣合いなほど豪華な調度品、卓上に飾られた花、ミレイユの真新しいドレスなども。タクマインは、すこしでも多くの賃金を得るため、薬の力で我が身を追い立てて働き続けたのだらう。そして『生命の欠片』が有償になったので、割に合わない判断し、やめる決意をしたのだ、きっと。

ヴォールダーのいう“無限の金鉱”　それは「命」という名の金鉱だ。職人たちは命を削って金に換えたのだ。

「私も職人たちの身が心配でしたが・・・止めることもできなかつたのです。先ほども申し上げた通り、この工房は人が“命”。職人ががんばって働いてくれればその分この工房も潤い、工房が潤えば職人の懐も潤う。われわれの利害は完全に一致していました。われわれは、どうしようもなく依存し合って、ここまで発展してきたのです」

語り続けるヴォールダーの口調も態度も説得力にあふれていて、こんな状況でなければ、僕は鵜呑みにしていたらう。でも、この人の言葉には嘘がある。彼の事業の進め方に職人たちがみんな協力的であるような言い方をしてるけど　もしそれが本当なら、今僕をよってたかって押さえつけているような、暴力を生業とする男たちを何人も雇っている必要はないはずだ。この男たちの存在が意味するのは、ヴォールダーは言う事をきかない職人たちに対し、ときどき実力行使をしたに違いないということだ。自分の“進歩的な”やり方を押し通すために。

第1話「生命の欠片」(14)

僕は必死で顔を上げ続け、相手の鉄面皮をなんとか貫こうと試みた。

「あなたがそんな事を始めてから・・・健康を害した職人は少なくなかったはずですよ。死んだ者もいたでしょう。その人たちを、どうしたんですか？ 町医者の子フォン博士は『生命の欠片』の患者をこれまでに五人診たと言っていた。だけどあなたの口ぶりからすると、『生命の欠片』を撰っていた人数はそんなものじゃなかったはずだ。あとの人たちは、どうなったんです？」

「やれやれ・・・あなたは本当に知りたがり屋ですね、使徒様」
ヴォールダーは嘆かわしげに首を横に振った。

「本当に聞きたいんですか？ そこからは、かなり汚い話になりますよ。近年の科学技術の発達はめざましいものでしてね、人体というものの利用法も、いろいろ考案されているんですよ。例えば中庭にある、あの花壇ですが・・・いや、やめておきましょうか。ことによっては、あなたとも無関係ではなくなる話ですからな」

おだやかな顔をして、なんとという罪深い脅し文句を口にできるのだろう、この男は。工房にとって人が“命”などと言いながら、本当は自分の使っている職人を、搾取するための道具としか見ていないのだ。薬を与えて、ポロポロになるまでこき使って、働けなくなったら闇に葬る。この男は己の欲望のために、これまで何人の命を奪ってきたのか。

僕は力いっぱい暴れた。でも押さえつけている手はびくともしなかつた。

ヴォールダーの温厚な笑顔は今や醜い仮面にしか見えなかつた。彼は急にしゃがみこんだ。彼の四角い顔が、僕から近い距離に来た。

「私がかねてから、神の御業というものに興味がありましたね。科

学者としては、理屈で割り切れないものを信じたくはないのだが・
・村の教会であなたの起こした奇跡を見て、すっかり関心を惹かれ
ました。すばらしい力だ。その力を、私と工房のために役立ててく
ださる気はありませんか？ 例えば、『生命の欠片』を長い間服用
しすぎて弱った職人を、神の御業で元の体に戻してやるとか・
・報酬は思いのままですぞ」

「！・・・あなたのような罪人に加担するつもりはありません！
断れる立場だと思っておられるのですか？ お仲間が探しに来て
くれるのを待っておられるなら無駄ですよ。あなた方が滞在してお
られる旅籠の部屋に、偽の手紙を残してきましたのです。イヴート村の
村長の名前で、『急病人がいるので助けてほしい』という手紙をね
お仲間はきつとそれを見て、あなたがイヴート村へ向かったと思い
こんでいますよ。イヴート村はここから馬車で丸一日かかる距離で
すから・・・あなたが行方不明であることがわかるのは、だいぶ先
になるでしょう」

「・・・あまり甘く見ない方がいいですよ。僕の先輩はね、この国
でいちばんと言っていいほど性格のねじ曲がった人なんです。そん
な単純な手にひっかかるもんですか」

と、大見得を切ってみたものの。僕は絶望にとらわれないよう必死
で努力しなければならなかった。

不意に太い指が僕の顎をがっちりつつかんだ。

僕は驚いて、笑みの消えたヴォールダーの顔を見上げた。

頬を左右からぐいっと締めつけられて、僕の口がひとりでに開い
てしまった。

「そう毛嫌いしたものではありませんよ。あなたも一度試してみ
てはどうです、『生命の欠片』を」

あっと思ったときには、何か塊が口の中に押しこまれていた。吐
き出そうとしたけれど、ヴォールダーの手がすでに僕の口をしっか
り塞いでいた。相手は非常に巧みに位置を選んで、薬を僕の舌の上
に乗せたのにちがいない。というのは、抗議の唸り声を発しようと

した拍子に、その舌の動きだけで、薬は僕の喉の奥へ落ちこんでしまったのだ。

どうしよう。飲んでしまった。恐ろしい禁断の薬を。

苦痛にのたうち回っていたタクマインの恐ろしい形相が脳裏に浮かぶ。

薬が全身に回る前に吐き出さなくては。僕はなんとかして嘔吐しようとするけれど、何もきつかけがないのにそうそう簡単に吐けるものではない。ああ、まずいよ。ゼフオン博士はこの薬の効き目のことを何と言っていたっけ。“最初の服用時には感覚の混乱が

”とか言ってたような気がする。いったい何が起ころんだろう。早くも手足が痺れてきているように感じるのは僕の思い過ごしなんだろうか。骨を体の外へ引っぱり出されているみたい、痛みとも快感ともつかない強烈な脱力感。

「……さあさ、長い間お引止めして申し訳ありませんでしたな、使徒様。もうお帰りになっただいても結構ですよ」

からかうようなヴォールダーの声が遠く聞こえる。僕を押さえこんでいた男たちが手を離れた。自由になった僕はさっそく立ち上がろうとしたけれど、体が言うことをきかない。というか、何と表現すればいいんだろう。手足の動かし方を忘れてしまった、そんな感じだ。僕は身を起こしかけて、ぶざまに床に突っ伏した。周囲の男たちがどつと嘲笑した。

「おや、もうしばらくここにいたいとおっしゃる？ ええ、ええ、構いませんとも。ごゆっくりなさってください」

気がつくとも僕の目はほとんど見えなくなっていた。辺りはあいまいな闇に包まれ、親切ごかしたヴォールダーの声だけが響く。

「また『生命の欠片』が欲しくなったら、遠慮なくおっしゃってくださいね。でもこれは私の大事な商売道具。そうそう無償では差し上げられません。今回は、信仰を捨てるという約束と引き換えに、ということにいたしました。今後は神ではなくこの私に忠誠を誓ってください。そうすれば『生命の欠片』はいつでもあなたのも

の
で
す
よ
「

第1話「生命の欠片」(15)

信仰を捨てる？ この僕が？ そんなバカな。この男はなんといふ愚かなことを言っているのだろう。

僕はたまらなくおかしくなつて笑つた。自分の口から出てきたのは笑い声ではなく、聞いたこともない奇妙な唸り声だったけれど、まあよしとしよう。そんなことはどうでもいいことだ。何もかもどうでもいい。降つて湧いたように今ひらめいた、この輝ける真理以外のものは。とつぜん僕は、世界のあらゆる神秘を自分が理解していることに気づいたのだ。一にして全たる絶対的な真理。どうして今まで誰も気づかなかつたのだろう、世界の理「ことわり」はこんなにも単純なのに。そして、さらにすばらしいのは、どうやらその真理を今、僕はこの手で思うがままに操れるらしいことだ！

頬に当たる床の硬さに、はつと我に返つた。長々と床に横たわつていた僕はあわてて起き上がった。体も動く。目も見える。ああ、危なかつた。薬の作用であやうくおかしくなるところだった。いたいどれだけの時間、僕は呆けていたんだろうか。

いつの間にか室内は騒然としていた。僕を押さえつけていたはずの男たちが辺りを走り回っていた。飛び交う怒号。ガラスが床に落ちて割れる音。誰かの悲鳴と絶叫。

「いたぞ！ 坊主の片割れはあそこだ！」

「逃がすな。追え！ 捕らえろ！」

「この一連を献げて、火の温み、水の潤い、風の息吹の恵みを乞い願わん。」

この一連を献げて、生命の調和の恵みを乞い願わん。

この一連を献げて、個と全との合一と循環の恵みを乞い願わん。

・・・第二の円弧開放。微子合成！」

凄みのきいた声と共に、暗かつた室内があかあかと照らし出された。とつぜん中空に巨大な炎の塊が出現したのだ。走り回る男たち

の真っ只中に。

火傷を負った数名の男たちがすさまじい悲鳴をあげ、きりきり舞いして床に倒れこんだ。

もちろんこれも現実の炎ではない。法術によって、居合わせた者の魂に直接投影された心象だ。ただし魂が“火傷をした”と認識している限り、肉体もそれに合わせて変容するので、現実の炎と結果は同じだが。

ロラン先輩が僕のすぐそばまで駆けてきた。近くまで来て、僕は先輩が唇の端から血を流しているのに気づいた。殴られた様子はな
いから、たぶん微子合成を使った反動が来ているんだろう。

「先輩・・・ムチャですよ、第二の円弧だけで法力を放出するなんて」

「アホ！ テメエのせいだぞ、クレス。本当だったら今ごろ第六の円弧まで開放できてたはずなのに・・・おまえが変なこと言うから、途中で聖句間違えちまったじゃねーか。誰が帝国一ねじ曲がった性格だ、この野郎！」

「あ。聞こえてたんですか・・・」

僕は呆然とつぶやいた。

やっぱり助けに来てくれたんだ、先輩。どうやってこの建物に入り込めたのかはわからないけど。しばらく前から室内の物陰にでも身を潜めて、聖句の詠唱にかかっていたんだろう

精神集中に

向いているとはいえないこの状況で、百八連の聖句をひとことも間違えずに最後まで唱えきり、六つの円弧を解放するのは、かなりの難行のはずだ。

それにしても先輩が聖句を間違えるなんて。急におかしくなっ
て、僕は笑い始めた。

見る見る険悪になっていく先輩の表情を眼前にしなが
ら、爆笑を止めることができない。どうしよう。果てしなく愉快でたまらない。このままでは笑い死に
してしまうかも。あまりに笑いすぎて、僕の四肢をつなぎ留めてい
るネジが外れてしまった。バラバラになった

僕の体は床に落下した。ああ、ぶざまだな。それさえも笑いを呼び起こす。内耳に響く自分の笑い声がうひゃひゃひゃひゃ、という異様なものであることも、愉快さに拍車をかける。どうしてこの世界はこんなにも面白おかしいんだろう。いつの間にか、また目が見えなくなってしまうけど、気にする必要はない。今まで十八年間生きてきたその思い出だけでも、十分すぎるほどの笑いのネタに満ちているからだ。愉快だ。愉快愉快愉快愉快・・・！

誰かにむぎゅっと腹を踏みつけられて、我に返った。気づくと僕は仰向けに床に転がっていて、誰かが「ぎゃあああつ」とわめきながら僕の上を通り過ぎていったのだ。うわ、いけない。僕はまたしても意識を飛ばしてしまったらしい。いつの間にか中空に再び炎の塊が出現している。僕の上を走り過ぎていった男も、炎の直撃を食らった一人のようだ。

炎の塊に照らし出された室内に、立つだけの元気のある者はほんの五、六人しか残っていないようだった。その五、六人が部屋の中あたりで争っていた。不安定な光の中で、ありえないほど長く伸びた人の影が異様な姿でうごめき、からまり合った。火傷を負って床をのたうち回る男たちの絶叫が空間を満たし、まるで凄惨な悪夢のようだ。混乱した僕の目に一瞬、金槌らしき物を左手一本で振り回して暴れているロラン先輩の姿が映った。

いつまでも呆けている場合じゃない。先輩を援護しなくては。

僕は頼りない足を踏みしめて立ち上がった。

そして神になった。

雲を突き抜け遙かなる高みから地上を見下ろした。百億ダローリウスの海と百億ダローリウスの大地が僕の手中にあった。僕がまばたきをすると稲妻が生じ、大地に四散した。僕がひとしずくの涙をこぼすと雷鳴と共に銀色の雨が緑の森林に降り注いだ。僕が笑うと哄笑が大地を揺るがし、海が波立ち、怯えた鳥たちが群れをなして空中を渡っていった。僕は太陽と共にあった。僕は森羅万象と共にあった。僕は生まれ学び育ち遊び笑い遊び狂い働き壊し悩み苦しみ

病み老い死んでいくすべての人と共にあった。僕は息が詰まった。

みぞおちに痛撃を受けて、僕は思わず体を二つに折った。

我に返った僕の、涙でにじんだ視界に、ロラン先輩が映った。先輩は喧嘩慣れした動作で足を持ち上げ、僕のみぞおちに再び蹴りを入れてきた。まったく容赦のない、痛烈な蹴りだ。僕は床に両手をついてしまった。四つん這いになった僕を先輩はさらに蹴った。

痛い。苦しい。先輩やめて。何するんですか。

叫ぼうとしたけど声にならない。これまで数えきれないほど殴られたり物をぶつけられたりしてきたけど、ここまで本気の暴力をふるわれるのは初めてだ。こんなにも苦しいなんて。

ああ、だけど・・・よく考えてみると先輩が怒るのも無理ないな。僕は変な事ばかりしているように映るだろうからな。急にへらへら笑ったり寝転がってみたり・・・。

苦しみの中で、不意に体の内部から酸っぱいものと、突き上げるような衝動が湧き起こってきた。僕は四つん這いの姿勢のまま、床に向かって、身を震わせながら吐いた。何も出てこなくなるまで吐き続けた。

吐き終わると、驚いたことに、ひどく気分が良くなった。頭がすっきりしたように感じる。

さらに意識をしゃんとさせるため頭を振ってから、立ち上がるうとした。そのとき自分の吐いたものの中に、半分溶けかかった黒い塊をみつけた。それが何であるかはすぐにわかった。僕がさつき飲まされた『生命の欠片』だ。

もしかして僕は助かったのか？こんなに気分が良いのは薬を吐いてしまったからだろうか。

ということは、もう、自由に行動できるということだ。僕を押さえこんでいた男たちのほとんどは、すでに戦える状態ではなくなっている。

立ち上がり、辺りを見回した。大勢の人間が床に倒れているけど、

ヴォールダーの姿はない。少し離れたところで、三人の男を相手に立ち回りを演じているロラン先輩が見えた。普段と比べると、なんだか動きが悪い。まるでひどく疲れているみたいだ。男の一人の振り回した拳が顎に決まり、尻餅をついた。先輩の手がすばやくフォーゴ（火）の印を結ぶ。また微子合成を使うつもりらしい。

禁術をそんなに連発するなんて、いくら法術の天才といわれる人でも無謀すぎる。死んでしまっじゃないか。

「うおおおおおっ！！」

ためらっている暇はない。注意を引くためにわざと大声をあげて、僕は姿勢を低くし、男たちの背後から思いつきり突っ込んだ。

木こりの子として何年も 十五の年に高等神学校に入学するまで毎日、丸太をかついで山を昇り降りする生活を続けてきた僕だ。鍛えた体力は伊達じゃない。僕の両肩は二人の男の腰に同時にぶつかり、彼らを軽々と吹っ飛ばした。

《神よお許してください。せつかくお与えただいた健全なる身体と力を、人を傷つけるために使ってしまった。でもこれは人助けのためなんです。先輩の命を救うため、やむを得ずやった事なんです。もう二度と誰にも暴力をふるったりしませんから。どうか今回だけは見逃してください ！》

と心の中で神に詫びつつ、僕は残るもうひとりの男の顔を殴りつけた。手加減している余裕がなかったので、自分でもはっとするほど強烈な手ごたえがあった。血をまき散らしながら男は仰向きに倒れた。

わあ、しまった。やりすぎた。僕が心の中で懸命に詫びているうち、先輩が立ち上がり、手ぎわよく金槌で三人の男を完全に気絶させた。

ヴォールダーの子分たちが全滅してしまった後の部屋に、僕らだけが残っていた。

殴られて気絶している者、火傷の痛みで泣き叫んでいる者。悪人とはいえ、あまりにも気の毒な有様だ。《バクティ》を具現化して

傷を癒してあげなくては。でもそれはもうちよつと後の話だ。

僕らには急いで解決しなければならぬ事柄がある。

「ヴォールダーは・・・どこへ行つたんでしょう」

僕の声はしわがれていた。ロラン先輩は、まだ唸り続けている蒸気機関のすぐ隣にある扉を指さした（そんな所に扉があるなんて、僕はまったく気づかなかつた）。

「あそこから逃げやがった。あの古狸、絶対に逃がさねえ。逃げ、追うぞ」

「・・・つて先輩、大丈夫ですか？ 足元ふらついてますよ。ムチヤな法术の使い方するから・・・」

「テメエ誰に向かって物を言ってるつもりだ。ここからが俺の出番だろーが？」

第1話「生命の欠片」(16)

扉の外は薄汚れた茜色の夕暮れだった。僕らが工房の玄関をくぐったのは昼前だったから 中庭で頭を殴られた僕はすいぶん長い間気を失っていたことになる。扉を出ると、すぐ目の前に工房の通用口があった。遅い時刻にもかかわらず工房内はたくさんのランプで明るく照らされ、職人たちがあいかわらず整然と作業を続けていた。血相変えて飛び込んできた僕らを見て、彼らは仰天したのかもしれないけど、仕事を進める手にまったく乱れはなかった。雇い主がどちらへ向かったか、あっさり教えてくれた。

ヴォールダーは工房の一角を木の壁で仕切ってこしらえた事務所にいた。

工房全体の殺風景さと対照的に、事務所の内部は都会風のしゃれた雰囲気になり飾りつけられていた。壁には黒檀の棚が並び、その前に優美な曲線で構成された椅子と机が置いてある。といっても棚と机と椅子だけでほとんどいっぱいになってしまうような狭い部屋だ。シャンデリアの華やかな照明が、すべてを嘘臭く照らし出している。棚と机のすべての引き出しが開け放たれていた。ヴォールダーは引き出しから金をつかみ出して、あたふたと鞆に詰めこんでいるところだった。机の上でぱっくり口を開いた旅行鞆は、詰めこまれた大量の硬貨や紙幣や手形のせいで、奇怪な形に歪んでいた。

僕はゆっくりと事務所の中に歩み入った。

「いくらお金があっても逃げきれませんよ。神の裁きからは何人も逃れることはできないのです」

ヴォールダーは追いつめられた獣の視線で僕を見上げた。温厚な表情は跡形もなく消えてしまっていた。

「逃げる？ この私が？ はははは、何を言っておられるのですか。逃げたりするわけがないでしょう。この工房は私のもものなのですよ？ 世界の進歩の先駆けとなる、このすばらしい工房は。そのうち

世界中が私の経営に倣うようになるでしょう。私の名は歴史に残るでしょう。そんな私が、逃げるなどと……！」

初老の実業家はやけくそのような大声で笑った。その間も、鞆に金をつめこむ手は休めない。

僕は相手の瞳をじつと見据えて、さらに歩を進めた。

「職人の生命を絞りとって栄えた経営など、神がお許しにならない。あなたの言う“進歩”は、ただのまやかしです」

「あなたに何がわかるといふんです、使徒様。古めかしい迷信に埋没して、科学技術からも世界の進歩からも目をそむけているあなたに。私のやった事は間違つてはいなかった。最大の効率をあげるためには仕方のないことだったので。死んだ職人たちには気の毒なことをしましたが……進歩のためにはやむを得ない犠牲です。それに、彼らだつてそれなりの賃金はもらつたわけですから。満足して死んでいったんじゃありませんか？」

僕はあきれ果てた。

「あなたは……そんなことを本気で信じているんですか？ あなたは本当に、金と効率でしか、物事を量れないんですか？ 薬の魔力で正気を失い、衰弱して死んでいった人たちが、満足などしているはずがないでしょう」

そのとき開きつぱなしになっていた僕の背後の扉から、漆黒の異形の者がすーっと入ってきた。何の重みも持たないような動きで。鋭い角、長く尖った耳、真紅の瞳、耳から耳まで大きく割れた口、馬のひずめを備えた六本の脚、短い翼、猿の尾などをあわせ持った、その人ならざる存在はあまりに禍々しく、恐怖そのものと呼んでもよいぐらいだった。その異形の姿を目にしてヴォールダーが凍りついた。宙で動きを止めた彼の手から金貨や銀貨がじゃらじゃらとこぼれ落ちた。

第1話「生命の欠片」(17)

あ。『アヴァドゥータ』だ。

扉の外で聖句を唱えていたロラン先輩が、第六の円弧を開放して守護天使を具現化したらしい。

僕にとってその異形の怪物は見慣れた姿だったけど、知らない人にとっては、悪魔か何かに見えるだろう。少なくとも天使には見えない。ぜったいに。

「古めかしい迷信と言ったな、傲慢な人間め？ おのれの卑小さを思い知るがいい！」

身の毛もよだつような口調で『アヴァドゥータ』が叫んだ。

とたんに視界が暗転した。僕らはもはや狭い事務所ではなく、果てしない広大な暗黒の空間に漂っていた。「バカな・・・そんなバカなっ！」ヴォールダーは必死で机にしがみついた。机の上の旅行鞆には無数の金貨や銀貨がびっしり詰まっていたが、突然そのひとつひとつから青々とした双葉が伸びてきた。まるで硬貨が花の種であるかのように。見る見るうちに双葉から長い茎が伸び、葉が生い茂り、僕らの視界は緑の茎と葉で埋めつくされてしまった。僕はその葉がサハの葉にそっくりであることに気づいた。まもなく植物は真紅のつぼみをつけた。つぼみは開花した。咲いたのは花ではなく人の顔だった。何十、何百、何千もの、人の顔をした花。それらの小さな顔がヴォールダーを睨みつけ、いつせいに口を開いて、この世のものとは思えない不気味な悲鳴をあげた。顔たちの叫びが空間を埋めつくした。叫び声が次第に大きくなり、聞いているのが耐えられないほどの音量と不気味さに達した瞬間、顔は爆発でも起こしたように弾け飛んだ。濃い真紅の血液が飛び散った。何千もの顔がいつせいに弾けたので、血が雨のように降り注いだ。旅行鞆には金貨ではなく血が溜まり始めた。

ヴォールダーが絶叫した。狂乱状態で頭を抱えこみ、激しく机に

突つ伏す。なんとかして眼前の恐ろしい光景から逃れようとするかのように。

血の雨の中で、今度は植物から真紅の腕が何本も生えてきた。人間の男の腕のように生々しい筋肉の質感を備えている。それがヴォールダーの全身にからみつく。四肢を捕らわれて身動きの取れなくなつたヴォールダーの顔を、何本もの腕が襲つた。腕がその手に握っているのは黒い球体 『生命の欠片』だつた。腕はヴォールダーの口をこじ開け、中に『生命の欠片』を押しこんだ。一個ではない。何個も何個も。

「うぐつ・・・ぐぎつ・・・！ ぐぐぐぐぐぐおつ・・・！」

無理に薬を押しこまれてヴォールダーの顔の形が変わつていた。不意に彼は嘔吐しようとするように大きく身を震わせた。でも腕たちは手もなく彼を押さえこみ、口をしつかり塞いで、吐かせなかつた。苦悶のあまり仰向いたヴォールダーの顔は涙と血で汚れていた。血は彼のものではなく、頭上に生い茂つた植物から降り続けているものだ。

「現世で許されぬ罪を犯した者は地獄に堕ち、未来永劫、哀れな魂ひとつとなつてさまようのだ。・・・現世で人を食いものにした者は、地獄で食いものにされる。生きながら食われる苦痛を永遠に味わい続けるがいい！」

暗黒の空間に『アヴァドゥータ』の情け容赦ない宣告が響いた。

口を塞がれたまま、ヴォールダーがくぐもつた悲鳴をあげた。

第1話「生命の欠片」(18)

数え切れないほどの『生命の欠片』を押しこまれたおかげで丸く膨れ上がった彼の腹が、急に裂けて、巨大な双葉が出現したのだ。ヴォールダーの腹からすごい勢いで植物の茎が伸び始めた。おそらく彼の腹の中で植物の根が暴れ回っているのだろう。体内に収まりきれなかった白い根が、ところどころ内側から皮膚を破って顔を出し、また体内へ引っ込んでいく。ヴォールダーは喉も涸れんばかりに絶叫を続けていた。しゃれたデザインの服が、降り注ぐ血の雨だけでなく彼自身の血で重く濡れ始めた。彼の味わっている苦痛がどれほど凄まじいものか、僕には想像することさえできない。

うーん。今日のロラン先輩の法術はいつもにも増しておぞましいな。手加減はしてるんだらうけど。僕が半ばあきれながら見守っている、

「救済を望むか、咎人よ。この苦しみを逃れるには、神による魂の救済しかない」

と、広大な空間の中空に浮遊している守護天使『アヴァドゥータ』の、この世ならざる声が降ってきた。

ヴォールダーは苦しみに顔をひき歪めつつ、何度もうなずいてみせた。

彼をとらえていた真紅の腕が外れ、植物の中にしゆるしゆると引っ込んでいった。ヴォールダーは四つん這いになり、激しく咳きこみながら『生命の欠片』を吐き出した。

「助けてください……私が悪かった……何でもしますから……ああ、お願いだ……!」

「おまえほど罪に穢れた魂では、この先一生かけて懺悔しても、すべての罪を拭い去ることはできない。地獄堕ちを逃れたければ免罪符を買うのだ。そうすればおまえの受けるべき償い、罰、苦難を教会が免除する。おまえの罪深い魂もただちに救済される。地獄堕ち

を逃れば、また来世も人として生まれ変わることができらう。どうするのだ？ 人として永遠の循環を手にするか、魂のまま永遠の煉獄を徘徊するか・・・」

「か・・・買います、買いますっ、免罪符！ お願いです・・・買わせてください。私にはとても耐えられない・・・！」

ヴォールダーは泣きながら床に崩れ落ちた。

ロラン先輩はヴォールダーに金印免罪符を四十枚売りつけたうえに、事業をやめて全財産を教団に寄付することと、自首して地方総督の裁判を受け、罪を償うことを約束させた。（ヴォールダーの寄付金はティアル村の教会の再建費用にあてられることになる。教会を正式に再建するには、教団本部に司教派遣願を提出するなど複雑な手続が必要で、おまけに費用もかかるのだ）

そして先輩は、ヴォールダーの手下たち十六人にも、しつかり朱印免罪符を売りつけた。そういうポイントを外さないところが、免罪符売上ナンバーワンの座を維持する秘訣だろうな。

僕らがふらふらの足取りで旅籠の部屋に帰り着いたのはもう真夜中近かった。

大変な一日だった　長椅子に身を投げ出したとたん、疲労と恐怖が一気に追いついてきた。

よく考えてみると、こうして無事に切り抜けることができたのは、神のご加護以外の何物でもない。ひとつ間違えば僕は今ごろ『生命の欠片』に狂って信仰を捨てていたかもしれないし、僕を探しに来た先輩も荒くれどもにやられて闇に葬られていたかもしれないのだ。本当に危ないところだった。

僕は静かに神に感謝の祈りを捧げた。

「今日の件の報告書と計算書はおまえがまとめとけ。俺もう寝るか
ら」

寝台にうつ伏せに倒れこんで、先輩が唸った。僕は反射的に口を

尖らせた。

「えーっ、また僕ですか？ たまには先輩が書いてくださいよ、報告書」

「あ？ テメエ、先輩に意見しようなんて百万年早えんだよ」

「僕だって今日は疲れてるんですから。ヴォールダーさんの、あの内臓ぐちゃぐちゃを癒すのは大変だったんですよ？」

文句を言いながらも、僕は素直になれない自分自身をうらめしく思った。本当は助けくれたお礼を言いたいののに、言葉がまっすぐに出てこない。感謝を口にできないなんて信仰者としては救いがた

い。

ロラン先輩の顔色は今もまだ、ただごとじゃなく悪かった。微子合成をはじめとする、守護天使を媒介としない法術は、今のところ教団内の規則で禁止されている技なのだ。不完全な円弧の開放状態で法力を放出することは術者の身体にとってもない負担を与え、ときには死に至らしめることもあるためだ。普通の使徒ならそんな技、行使することすらできない。

あるとき先輩は僕を置き去りにすることもできたはずなのに、助けに来てくれた。大勢の敵の中へ。禁じられた危険な法術を使ってまで。

先輩はこんな風に、ときどき優しいから、憎みきれないんだよな。ふだんは乱暴で横暴で怠け者でどうしようもない人だけだ。

僕は長椅子の背もたれに身をあずけて、ぼんやりと天井を眺めた。

「ねえ先輩。ひとつ訊きたいんですけど」

「あんだよ」

「さつきは、僕に『生命の欠片』を吐き出させようとして蹴ったんですよね？ 僕を助けようとして？」

ここで先輩が肯定してくれれば、助けくれたお礼が言いやすい。そう思つて尋ねてみたのに。

返つてきたのは予想以上に実もフタもない返事だった。

「そ・ん・なわけあるか、アホ！ 頭にきたから蹴ったに決まつて

んじゃねーか。いつも『足手まといにはなるな』って言うてるのに、性懲りもなく、あっさり敵さんにつかまりやがって。どこまで手間をかけさせりゃ気が済むんだ。物事をややこしくするのはおまえの趣味か」

「うえー、やっぱり？　・・・がっかりです」

「がっかりしてるのはこっちだ。俺たちがこれまで巻きこまれた厄介事は、十のうち九つまでが、おまえのせいだぞ。お約束みたいに毎回毎回ドジ踏みやがって」

「そ・・・そんなことありませんよ！　せいぜい、十のうち六つか・・・七つぐらいです」

あとは、疲れも忘れたかのように、いつもの悪口の応酬。

けっきょく口に出せなかった感謝の言葉は、胸にしまっておくことにした。素直にお礼を言える日がいつ来るのか　そもそもそんな日が来るのかどうかも、わからないけれど。

第1話「生命の欠片」(19)

翌日の昼下がり。僕はタクマイン家を訪ねた。

ヴォールダーのことをタクマイン夫妻に告げるべきかどうか、まだ迷っていた。彼が『生命の欠片』を商売のために利用していたこと。彼が改心してガラス工房を閉鎖し、全財産を教団に寄付した上で、『白服隊』の駐屯所に出頭して罪を告白する決意をしたこと。『白服隊』に出頭すれば、彼は地方総督の法廷で裁かれ、おそらく監獄島カーラグレーに送られることになるだろう。けれどもヴォールダーの罪とその償いについて知ったところで、タクマインの禁断症状という、夫婦を今苦しめている問題が解決するわけじゃない。

しかし、僕はそれとは別に、ホレス・タクマインにどうしても話したい事があった。村外れの彼の家までの道程は、ほんの一瞬のよう感じられた。

頑丈な扉をノックすると、以前にも増して不機嫌な顔つきのタクマインが姿を現した。髪がぼさぼさに乱れ、目が充血している。ひどく憔悴した感じだ。

「ミレイユなら、いないぞ。・・・もう二度とここへは戻らないかもしれない」

「どういうことですか」
僕はびっくりして訊き返した。タクマインは高まる感情を持って余すように、苛立たしげな仕草をした。

「昨日の夜うちを出て行った。それっきり戻ってこない。結婚してから一度も俺に逆らったことなんぞなかったのに。昨日、初めて、俺に口答えした。それで口論になって・・・泣きながら家を飛び出していったんだ。あんたのせいだぞ。あんたが神様なんて変な考えを吹き込むから、ミレイユがおかしくなって・・・いや、違うな。すまない。八つ当たりだ」

「……！」

タクマインの弱りきった態度は僕を幸福な気分にした。あまりの幸福感に、顔がほころぶのを止めることができなかった。

この人はミレイユをとて愛しているんだ。彼女が姿を消したことで、こんなにも動揺し、やつれているのがその証拠だ。こないだは「愛情なんぞ必要ない」などと冷たい言葉を口にしていただけ、本当にそう思っているのなら、こんなに憔悴するはずがない。冷淡な態度はうわべだけなのだ。

僕はきつとアホみたいにニヤニヤしていたのに違いない。

タクマインの眉間に見る見るうちに怒気が集まってきた。

「……何がおかしいんだ、お坊さん。笑い事じゃないぞ」

「あ、いや、すみません。つい」

僕はゆるんだ頬を両手で押さえて、真顔に戻ろうと努力した。でも、タクマインに鋭く睨みつけられても、上機嫌を抑えるのは難しかった。

「すみません。僕はあなたを誤解していたようです。もっと……その……自分のことしか考えていない人なのかと。あなたは奥さんをとてても大事にしているんですね。ヴォールダーさんの工房で、『生命の欠片』を飲んでまで働き続けたのは、奥さんに少しでもいい暮らしをさせてあげたかったからでしょう？ 夜も昼もなく一生懸命働けば、たくさんお金がもらえて、家を飾ったり奥さんに綺麗な服を買ってあげられる。そう考えたからでしょう？」

タクマインはふんと鼻を鳴らし、困ったように視線をそらした。「女房に楽な暮らしをさせてやるのが、男の当然の務めだろう？」

俺は特別な事をしたわけじゃないさ。……なのにミレイユのバカは、人の気持ちなんざまるでわかっちゃいない。「健康を犠牲にして稼いだ金なんかいらない」などと、寝ぼけた事を言いやがる。冗談じゃない。うまい飯、上等な酒、村のどの女より立派なドレス……今の豊かで幸せな暮らしは、すべて俺が稼いだ金で買ったものじゃないか。幸福は金を出して買うものだ。体をいたわって、のんび

り仕事をしていたんじゃ、人並み以上の幸せなんざ手に入りっこない
い」

「ミレイユさんはきつと・・・“人並み以上の”幸せなんて欲しくない
いんですよ」

あれほどまでに夫を愛している彼女が、たとえ口論したとしても、
夫を置いて姿を消すはずがない、と僕はタクマインに保証した。い
ろいろ話をしているうちに、タクマインが、『禁断症状』による発
作を起こしている間ミレイユの背中をかき裂いていたことを、自分
では覚えていないらしいことがわかった。僕は背中をひどい傷だら
けにして耐えていたミレイユのことを彼に話してやった。タクマイ
ンは打ちのめされた様子だった。

「俺が、あいつに、そんな事を・・・？ 知らなかった・・・そう
言えば、朝起きるといつも爪が血だらけになってるので、おかしい
とは思ってたんだが・・・まさか・・・」

体の両側に力なく垂らした拳が小刻みに震えていた。僕は元気づ
けようと、彼の肩に手を置いた。

「いっしょに来てください。奥さんの居場所なら、僕に心当たりが
あります」

前回会ったときには完全に心を閉ざしていたタクマインが、今日
はこんなにも素直に、揺れる心の内を僕みたいな若輩者にさらけ出
してくるのは、ミレイユの熱心な祈りが天に通じて、神が働いて
くださったからに違いない。僕は彼を教会に案内した。修理が進み、
大勢の村人が掃除に来てくれるおかげで、日に日に美しく整いつつ
ある教会だ。礼拝堂のいちばん奥には説教台が据えられ、その前に
皆が寄付してくれた、大きさもデザインもばらばらの椅子が二、三
十脚ほどきちんと列をなして並べられていた。最前列の椅子のひと
つに腰かけているミレイユの後ろ姿が見えた。膝の上に聖句集が開
かれているので、読んでいるのかな、と思ったけど、近づくと彼女
がうたた寝していることがわかった。長い睫毛がなめらかな頬に伏
せられている。とても幼い寝顔だ。タクマインが何か言おうとして

口を開け、唇を震わせ、そのまま思いとどまるのを、僕は黙って眺めていた。そのときミレイユの頭が、がくと大きく前へ倒れた。眠りが浅くなつた拍子に、彼女の口から寝言のような声が漏れた。

「・・・神様・・・主人を・・・ホレスをお助けください・・・」

タクマインは彼女の傍らに膝をつき、両手で彼女の手を取った。

初めて耳にした単語を復唱するみたいに、あるいは、大切な呪文をけっして忘れまいと確認するみたいに、妻の名を呼んだ。何度も何度も。ミレイユが目を覚ました。夫に気づいて大きく微笑んだ。その緑色の瞳に、見る見るうちに涙の粒が湧き上がってきた。

手を取り合い、互いの顔の中に樂園を見るかのようにみつめ合う夫婦を残して、僕は満ち足りた思いで礼拝場を後にした。

intermission

僕がその馬車を見かけたのは偶然だった。

用事があつてタクマイン家を訪れた帰りに、なにげなくヴォールダーのガラス工房だった建物に視線を投げると、街道に停まっている馬車が目に入ったのだ。工房より街道をさらに北東に進んだ辺りだ。

工房に用事があるにしては、馬車を停める位置が不自然だ。あの辺りに何かあるんだろうか。

僕はなんとなく好奇心に駆られて近づいてみた。近くで見ると

ちよつと工房の建物の陰になって村からは見えない位置に

が正方形の区画にびっしりと植わり、いきいきした緑色を見せている。その緑の中で、花卉の赤、黄、白、紫などの色彩が際立っている。大地に忽然と出現した印象を与える花畑だった。周囲の見わたす限りほとんど草も生えていない白い砂地と、花の生えている箇所との境目が不自然なほどはつきりした直線なので、余計に唐突さが増している。このカロリック大平原でこんなたくさんの花が自生するはずがない。この花畑も工房の中庭のものと同様、ヴォールダーがなんらかの理由で作ったものだろう。

咲き乱れる花の中に、チエトウス町の医師、グレゴル・ゼフォン博士がたたずんでいた。

博士はすぐに僕の気配に気づき、振り返った。夕方に近い時刻だった。傾きかけた日を正面から受け、博士の眼鏡が黄色く輝いた。

「非科学的な風習だな、墓参りなど。ここに収められているのは死者そのものではない・・・死者の肉体を構成していた物質の残滓のいくばくかに過ぎん。死んだ人間はもはやどこにも存在しないのだ。

わかつては、いるのだから」

「お墓・・・ですか」

博士が穏やかに声をかけてくれたのに勇気づけられ、僕はさらに近づいた。花に半ば埋もれるようにして、いくつかの古い石が見える。それらは墓石に似ていなくもない。

「教会の裏手にあるのが村の共同墓地だと思っていました。こんな所にも墓地があつたんですね」

つぶやいた僕に、博士は皮肉な笑みを投げた。

「あんたも知らないわけじゃないだろう。どの村落でも、共同墓地で埋葬を断られた連中の墓が必ずどこかにある。たいていは暗闇病で死んだヤツらの墓だ・・・数年前に特效薬が開発されるまで、暗闇病は不治の病だった。感染力が強く、患者が一人出れば、七日以内にその村落は全滅するといわれた。だから患者は、発見されるとすぐに村を追放されたし、死んでからも村に戻ることは認められなかったのだ」

僕はうなずいた。子供の頃から暗闇病の恐ろしさは噂に聞いていた。それに、特效薬が開発されるまで、暗闇病の患者を救えるのは神の御業による癒しだけだったので、昔の使徒や布教師は暗闇病の蔓延する地方に自ら進んで赴いて教えを広めたといわれている。

「博士のお知り合いの方も、ここに・・・？」

尋ねてみたけど、答えは返ってこなかった。博士は僕の質問が聞こえなかったような顔で話題を変えた。

「さつきオーランド・ヴォールダーと話してきたのだが。人相がまったく変わっておつた・・・別人のようだ。いったい何があつたのだ？」

「ああ・・・それはですね・・・」

僕は何と言えばうまく伝わるかを考えながら、少し口ごもった。ロラン先輩の心象光景によって味わった恐怖のため、あの恰幅の良かったヴォールダーがすっかりおれてしまったのだ。髪が一本残らず抜け、顔の皮膚が皺くちやになり、背筋が丸くなり背丈が縮んだ。そういった変化は病でもケガでもないため、僕の『バクティ』では癒せなかった。今のヴォールダーは、以前の彼の亡霊のように

しか見えないだろう。

「ヴォールダーさんは神を知り、今まで犯してきた罪を悔い改めました。生まれ変わったと言ってもいいかもしれません。その過程で大変な心の葛藤や苦しみがあったので、その苦悩が外見さえも変えてしまったのです。今のヴォールダーさんは完全な心の平穩の中にあるはずです。神に帰依し、神と調和していますから」

我ながら的を得た説明ができた、と思ったのに、博士は釈然としない顔をしているだけで、理解してくれただけの様子はなかった。僕は「お友達だったんですか、ヴォールダーさんと？」と尋ねてみた。ゼフォン博士は首を横に振った。

「オーランドとは、それほど行き来はなかった。オーランドの兄のダイナムとは親しくしていたよ。親友であり、互いの良き理解者であり、最大の好敵手でもあった。あの爆発事故さえなければな。惜しい男を亡くしたものだ・・・世界は、歴史を変えるかもしれない偉大な発明家を失ったのだ」

不意に強い風が吹き、花々を揺さぶった。ざあああっ、という乾いた音をたてて葉がすれ合った。花は色鮮やかで美しかった

たとえ人工的な方法で栽培されたものだとしても。ふと気づくとゼフォン博士がひどく鋭い視線で僕を見上げていた。

「あんたらの神は・・・オーランドを救うことはできないのか？ 罪を犯した者は裁きを受け、その・・・なんと言うか・・・地獄、とやらの落ちるしかないのか？」

「いいえ。ヴォールダーさんの魂は救済されました」

僕は自信を持ってきっぱり答えた。ゼフォン博士の視線をまっすぐに受け止めた。

「他人の命を奪うことは最大の罪です。罪を犯せば魂は穢れ、穢れが積もり重なった魂は、死しても二度と人間として生まれ変わることはできず、苦痛に満ちた地獄を永遠に彷徨うことになるのが本当ですが・・・免罪符の効力により、ヴォールダーさんの魂は地獄落ちの罰を免除されました。つまり来世もまた人間として生まれ変わ

れるということですよ。ヴォールダーさんはこの先おそらく監獄島力
ーラグラールに送られ、今世はそこから一歩も出られないでしょうが、
魂の救済が約束されているので心安らかな余生を送れるはずですよ。
これまでの生き方を悔い改めて善行を積みめば、来世はさらに明るい
ものになるでしょう」

「そうか・・・よくわからんが・・・とりあえず良い事なのだ、
それは？」

ゼフォン博士は腕組みをし、小首をかしげた。その通りです、と
僕は保証した。博士は確信のこもらない調子で、ふむ、と唸り、た
め息をついた。それに続く言葉は非常に低い声で発せられたので、
耳をすませなければほとんど聞き取れないほどだった。

「あなたには打ち明けるが・・・だいぶ前から、オーランドがやっ
ている事を、わしはうすうす感じておった。気づかないわけはな
いだろう？」 『生命の欠片』の患者は皆、あの男の工房で働いてい
た連中なのだからな。だが、わしは・・・信じたくなかった。親友
の弟を悪く思いたくはなかったのだ。様子を見ていれば、そのうち
オーランドの潔白を証明するような事実が出てくるのではないかと
期待して、ただ待っていた。・・・端的に言えば、見て見ぬふりを
していたわけだ。どうだ？ わしもオーランドと同罪ということに
ならないか？ あの男の悪事を知りながら、そのままやらせていた
のだからな」

僕は戦慄に似た震えを覚えながら小柄な老人をみつめていた。

ゼフォン博士の態度は静かで、物憂げとさえ言えるほどだったけ
ど、内に隠された激情がはつきりと伝わってきた。

神の目から見た罪と罰など、科学一辺倒のこの人にとっては何の
意味も持たないはずなのに。この人はどうしてすがるような眸で僕
をみつめるんだろう。

「あなたも恐れているのですか、地獄を？」

僕の問いかけに、博士は大きな目をまたたかせただけで、しばらく
く答えなかった。変わらないその表情の奥で、底知れぬ昏「くら」

い深淵が不意に口を開くの、僕は確かに見た。

ゼフォン博士は花をかき分けて僕に歩み寄ってきた。僕の横を通り過ぎて花畑を出て行こうとする、そのすれ違いざまに足を止めた。「人間は死んだらそれきりだ。肉体は四元素に還元され、やがて消滅する。死後の世界など、己の終末を受け入れられぬ連中の世迷言にすぎん。わしがそんな非科学的なものを恐れるわけがなかるう。ただ・・・世間のバカどもが『地獄』と呼ぶものに類似した状態は今この世に、確かに存在する。現実にも・・・そして、人の心の中にもな」

意外なほど強い口調でそう言い切ると、あとは僕には目もくれず、馬車に向かって早足で歩き始めた。

僕はちよつとの間ぼんやりしていたので、博士の後を追うのが遅れた。よくわからないけど、今の言葉が、助けを求める魂の叫びのように聞こえたのだ。神でもなんでもいい、この現実に存在する地獄から自分を救い出してほしい、という。それとも、そんな感覚はまた例によって僕の早とちりにすぎないんだろうか。

陽光はさつきより黄色味を増し、ゼフォン博士の後姿は逆光に吞まれてほとんど見えなくなってしまった。博士が馬車の扉を引き開けるときの軋み音だけがやけに身近に響いた。

「実は、わしが今日この村へ来たのは、あなたに話があったからなのだ。ここで会えるとは思わなかった。どこか落ち着いて話のできる場所はないか？・・・ただしあなたの教会は勘弁してくれ。ああいう線香臭い所はどうも好きになれん」

第2話「跛行（はこづ）の踊り手」（1）

「はあっ、はあっ、はあっ……！」

自分の荒い呼吸を、ふと耳ざわりなものとして意識した。もうどれぐらいの間、全力で駆けているのか。限界を越えて酷使された肺腑や脚が悲鳴をあげ始めている。雑草の生い茂る暗い山道。突き出た枯れ枝に足をとられて何度も転びそうになる。倒れたら最後だ。二度と立ち上がることはできないだろう。だから僕は必死で足を前に運び続ける。

僕はもともと体力には自信がある方だ。多少走ったぐらいでは息が上がったりしない。だからこんなにも消耗しているのには理由がある。

理由のひとつは、今の僕が、右手でまるで切り出した材木を運ぶようにして、十七歳の　　それほど華奢とはいえない　　少女を肩にかつぎ、左手でその少女の荷物まで持っている状態であることだ。少女も荷物もずっしりと重い。荷物なんて打ち捨てておきたかったのに、少女がそれを許してくれなかったのだ。

僕にかつがれている少女がときどき、

「こんな風に運ばれていると、なんだか略奪されてるみたいで、すてき……」

などと、思わず力が抜けるようなセリフを発するので、いつそう疲労に拍車がかかる。

僕を消耗させるもうひとつの理由は。

完全武装した《白服隊》の兵士に追われているという事実だ。

《白服隊》というのは、首都アレリーズから各地に派遣されている、帝国軍直属の治安維持部隊だ。地方総督が抱えている私兵とは格が違う。総督とは独立した地位を保ち、皇帝の出先機関として総督府に常駐し、各地方の平和を守る。皇帝の権威を帝国の隅々まで行き渡らせると共に、各地方の情報を集めて首都に送るのがその任

務だ。もちろん《白服隊》に所属する兵士は最高の訓練を受けた戦いの専門家ばかりだ。鍛え抜かれた肉体と、強靱な意志と、最新の技術で作られた武器を備えている。

そんな人たちに夜道を追い回されるのは、悪夢以外の何物でもない。ただでは済まさないという殺気が背後からありありと伝わってくる。恐怖が僕の呼吸を浅くし、消耗を深める。息が苦しい。左右によれ始めているふらふらの走り方は、我ながら、まるで出来の悪い踊りのステップのようだ。

いったいどうして、こんなことになってしまったんだろう。

神の使いたる者が、まるで卑しい盗賊みたいに、兵士に追われて逃げ回るなんて。

「ねえ使徒様。もっと速く走れないの？ 追いつかれそうよ」

緊迫感のかけらもない、のんびりした少女の声が背中側で響いたけれど（僕が、少女の足が前に来るようにしてかっついていいるため、彼女には後ろの様子がよく見えるのだ）、振り返る余裕はなかった。今より速く走るなんて無理だ。がくがく震える脚を前へ進めるだけで精一杯なんだから。

右足の爪先に鋭い衝撃と痛みが走った。一瞬、僕の体は宙に浮いた。かと思うと顔から胸、腹にかけてしたたかに地面に打ちつけられていた。石か何かにつまずいて倒れてしまったらしい。地面に投げ出された少女の、小さな悲鳴が聞こえる。

僕はあわてて立ち上がるうとした。

でも体を動かす前に、転んだ瞬間とは比べものにならない、さらに重い衝撃が肩の上に落ちてきた。痛みでじいんと半身が痺れた。立ち直る間もなく、同じような衝撃が頭といわず背中といわず次々と落ちてくる。

ああ。ダメだ。とうとう追いつかれてしまった。

そしてどうやら今、僕は兵士たちにとり囲まれて、袋叩きにされているらしい。

遠のく意識の中で、他人事みたいにそう思った。少しでも打撃か

ら逃れようと必死で体を丸め、頭を守りながら。

どうしてこんなことになってしまったのか、納得のいく理由はひとつもみつからないけど。

事の発端なら思い出すことができる。

「あんたらに相談したい事があるのだが」
チエトウス町の医師・ゼフォン博士の言葉が、そもそもの始まりだった。

第2話「跛行の踊り手」(2)

「原因不明の奇病、ですか」

僕は半ばぼんやりと聞き返した。科学と合理主義の化身みたいな博士の口から“原因不明”などという語が出るのが、ひどく不思議に感じられたのだ。

ティアル村の旅籠の部屋で、ゼフォン博士は古びた椅子に背筋を伸ばして腰かけ、深くうなずいた。

「イヴート村に住む、十七歳の少女でな。半年ほど前、突然足が動かなくなつた。本人いわく、両足がつけ根の部分から、岩にでもなつたように重く感じられ、いくら動かそうとしても言う事をきかないそうだ。痛みはないらしい。診察してみたが医学的に見たところ患者はまったくの健康体で、足にも何も異常はない。動かない原因がわからないのだ。わしもいろいろ文献を研究してみたが、そのような症状の例はない。この近隣の至る所から名医と呼ばれる医師を集めて検討したが、無駄だった」

僕らの滞在している部屋は、来客を迎えるには十分な広さがあり、おあつらえむきの応接セットもある。といつても来客なんてまるでおかまいなしのロラン先輩が長椅子を独占して昼寝中なので、ゼフォン博士と僕はテーブルの角をはさむようにして、それぞれ一人掛けの椅子に腰かけているのだが。大きな窓から低い角度で差し込む日の光が、博士の豊かな髪を血の色に染め上げていた。窓の外では、ソルバド山脈の不規則な稜線が茜色の空を黒々と切り取っていた。すでに夕刻から夜にかかる時間で、ランプの灯がなければお互いの顔を見分けるのさえ難しくなっていた。僕は博士にお茶を勧めた。

いやな事でも思い出したのか、ゼフォン博士の口元が不快そうに歪んだ。

「今の医学では説明のつかない病なので、患者の母親も絶望的になつて、とうとう祈禱師に頼り始めたのだ。足が動かないのは呪いの

せいではないか、とな。あんたも知っているだろうがイヴート村というのは、特に無学な連中の多い所で、昔ながらの非科学的な迷信が幅をきかせておる。村人の大半は、病気になる、まず医師ではなく祈禱師を呼びに走る有様だからな。シーシヨアとかいう、あの辺りで有名な祈禱師を頼んだのだが・・・もちろん効果など出るはずもない。まじないで患者の足を治すことはできなかった」

「ああ、《賢者シーシヨア》ですか。この村でもずいぶん評判を聞きましたよ」

相手の不機嫌をやわらげようと、僕はことさらに明るくい口調で答えた。

「村人からの信望の厚い、立派な方みたいですね。この地方でもう何十年も祈禱師をしていて、治した病人は数えきれないとか。でもまじないで病気が治るはずはありませんから・・・僕が思うに、たぶん病人の相談に乗ったりして、心の悩みをやわらげているんじゃないでしょうか？ 心が軽くなるだけで、身体の症状も楽になることがありますから」

「立派な方が聞いて呆れる。シーシヨアという男はな、祈禱一回ごとに五百ファアイラもの金を取っておるんだぞ。効果があるうとなかろうと、だ。あやしげな香を焚いて、もごもごと口の中でまじないを唱えるだけで五百ファアイラだ。そんな法外な話があるか。わしの時間外往診料でさえ一回百五十ファアイラなのに」

博士はとうとう本格的に怒り出した。

最後のひとは話の本筋とずれているような気がするけど、それを指摘したらやっぱり失礼に当たるだろうな、と僕が考えていると、博士はぎょろりとした大きな目で僕を睨み上げた。

「病人がインチキまじない師に食い物にされているのを見るのは、どうにも我慢がならん。それで、わしが知りたいのは 神とやらの力で、この少女を治すことができそうか、ということだ」

不意に訪れた沈黙。僕は背筋を伸ばし、はっとするほど真剣なゼフォン博士のまなざしを正面から受け止めた。どうしてだろう、科

学一辺倒のはずのこの人は、ときどきこんな、すぎるような目をする。僕の使徒としての力量が試されている瞬間だ。ふと、そう感じた。

「明言を避けている」なんて、もう二度と思わせてはいけない。

僕個人は頼りない人間だけど、ドヴァラス正教はあいまいな所のない、完成された、頼るに足る御教えなのだ。そのことを博士にもわかってもらわなくては。

第2話「跛行の踊り手」(3)

「その点についてはご安心ください。『神の御業』で癒せない病などありません。お医者の手に余る難病や奇病を癒すのが、もともと僕ら使徒の得意分野なんですよ」

自信ありげに見えることを願いながら、きつぱりと断言した。

ゼフォン博士は口髭をひねり、ふん、と鼻を鳴らした。その表情は渋いままだったけど、僕はなんとなく、博士が内心満足している様子を感じ取ることができた。

「まさか、このわしが坊主に頼る日が来ようとは夢にも思わなかったが・・・少しでも可能性があるなら、いかに非科学的に見えるものでも試してみるのが、逆に正しい科学者の態度といえるだろう。それで、もうひとつ確認しておきたい事があるのだが」

「はい。何ですか？」

今度はどんな厳しい指摘が飛んでくるだろう。僕は息を殺し、姿勢を正して相手の言葉を待ち受けた。

「村の連中から聞いたのだが。あんたら坊主は、病人を治しても、治療代を請求しないというのは本当か」

そう尋ねるゼフォン博士の目は真剣そのものだった。

「・・・!!」

肩すかしを食らって、がくつと力が抜けるのを感じた。博士が隣町からわざわざやって来たのは、それが理由だったのか。

「ええ。癒しは『神の御業』ですから、それについて対価を受け取ることは許されていないのです。たとえ教団への寄付という名目であつても、です。御教えに感服した人からの自発的な寄付ならお受けできますが」

「そうか。それを聞いて安心した。まあ、患者の親は娘の治療のためなら金に糸目をつけんお方だが・・・古くからの友人としてはやはり、あまり金のかかる事を勧めたくはないからな。それでは、わ

しといっしょにイヴート村へ来てくれるか。令嬢の足を治してもらいたい。明日の朝出発すれば夜にはイヴート村に着けるだろう」

わかりました、と僕はうなずいた。話が決まったのでゼフォン博士は立ち上がり、扉へ向かって歩きかけた。

「馬車はわしが手配しておく。御者への支払いは心配しなくてもいいぞ……患者の親が払ってくれる」

「……かなり裕福な方の方ですよですね？」

これから会おうとする相手について少しでもイメージをつかもうと思って、僕は尋ねてみた。移動に丸一日かかる距離まで馬車を雇えば結構な金額になる。そんな金を簡単に出せるような人は相当の太っ腹だ。

「『裕福か』、だと？」

博士は一瞬げんそうな表情をしたけれど、やがて一人で納得したらしく「ああ。そう言えば、まだ話していなかったな」とつぶやいた。いかにも重大な事実を告げるような、もったいをつけた態度で、

「患者の名はディファイ・ハドリアナ・タイドランド。あのタイドランド家の一人娘だ。馬車代などノミに食われたほどにも感じんさ」

博士は「あの」タイドランド家、と言った。僕がその名を知っているのが当然であるかのように。

でもあいにく、僕はそんな名前は初耳なのだ。

日が落ちると元気になるロラン先輩がやがて目を覚ましたので、僕は明日イヴート村に赴くことになったと報告した。先輩は長椅子に起き上がり、全身の関節を順番に鳴らしながら僕の話聞いていたが、最後に「じゃあ明日までにこの宿を引き払う準備をしとけ」と、あっさり言った。僕は驚いた。

「え。イヴート村からは、もうこのティアル村に戻らないってことですか？」

「村長に、本部に提出する司祭派遣願、もう書かせたんだろ？ ヴォーグラーのおっさんから司祭派遣の申請金もせしめたし。これ以上この村にとどまる理由はねえ。本部から指定された俺たちの布教ルートはこの先、イヴート村、管区首都カティーエ、クラホマーン町だ。イヴート村まで馬車で運んでもらえるんならちようど好都合じゃねーか」

「そりゃあ、そうなんですけど・・・」

先輩の言うことは間違っていない。けっして立ち止まらず、先へ進み続けること。それが僕らに課された使命だから。少しでも多くの土地に教えを広めるため、使徒が正当な理由もないのにひとつの町村に一月以上とどまり続けることは教団の布教規則で禁じられているほどのものだ。

でも僕は、こんなにもあわただしくティアル村を出立するのが、心残りでならなかった。この村で知り合った大勢の人たち。それぞれに悩みを抱えながら、御教えに心を寄せ始めた人たち、教会の修理に手を貸してくれた人たち。そういった人たちすべてに、きちんといとまごいをするには、明朝までという時間は短すぎる。それに、将来ここの教会に赴任してくるであろう司祭に最善の状態を引き渡せるよう、もう少し教会に手を加えておきたかった。

けれども、いったんイヴート村へ行つてティファイハドリアナ嬢を癒し、それからまたこのティアル村に取つて返して、改めて今度は徒歩でイヴート村へ向かう、というのは大変な時間の無駄だ。馬車で丸一日かかる距離を徒歩で旅するには四、五日。下手をすればそれ以上の日数がかかる。

「・・・わかりました。出発の準備をします」

そう答えるしかなかった。動き出そうとして、ふと頭に浮かんだ質問があつたので、僕はそれをなんとなく口にした。

「ところで先輩。タイドランドって名前、聞いたことありますか？ 有名な家らしいんですけど」

言い終わらないうちに後悔していた。こちらを睨みつける先輩の

背後から、ものすごくあからさまな殺気が立ちのぼり始めていたからだ。僕は後ずさりした。

「あ。すみません。もういいです。本部からの資料にちゃんと書いてあるんですよ。わかっています。ごめんなさい。後で読んでおきます。これからも質問する前に、まず資料を読むようにします。反省しています。だから・・・まさか投げたりしませんよね、そのポット。熱湯が入ってるんですよ。危ないですから。ね？」

都の文明が届き切らない、昔ながらの生活習慣の残るこのバンディアスタラー地方では、日暮れと共に眠りに就く人が多い。夜に人を訪ねることが許されるのは非常時だけだ。礼儀に反するのは十分わかっていたけれど、この村を去る前にどうしても話をしておきたい人が何人かあったので、僕は夜の村中に出て行った。村長の家から始めて、順番に目的の家を回っていると、村外れにあるタクマイン家はいちばん最後になってしまった。一昨日、ついにタクマインが癒しの業を受け入れてくれたのだ。一度の癒しだけで、“禁断症状”はかなり良くなったようだった。妻に対する感謝の念が芽生えたことで、彼の魂は少し神に近づいたのかもしれない（感謝というのはそんなにも崇高な感情なのだ）。

扉を叩くと、顔を出したのはミレイユだった。夫はすでに眠りに就いたという。

明日この村を発たなければならなかったことを僕は彼女に告げた。

ミレイユはまなざしを曇らせた。僕は詳しい説明をしなかったけど、彼女は何かを感じ取ったらしい。

「また、この村に帰ってきてくださいますよね、使徒様？ これつきり、ということはありませんよね？」

「ええ。いつか、必ず。あなた方のことはけっして忘れません」

それが僕にできる精一杯の約束だった。本部から各使徒に与えられる布教ルートが、同じ町村を通ることは絶対がない。そんな無駄

をするには世界は広すぎる。神の御教えが届いていない地が、この世にはまだまだいくらでもあるのだから。僕が使徒として再びこの村に足を踏み入れることはないだろう。もし将来ティアル村に戻れるとすれば、僕が司祭にまで出世して、この村の教会に着任するという可能性があるくらいだ。

それでも、その可能性はゼロじゃない。神のお導きがあれば必ず再会できるはずだ。いつかきつと、また会いたいと思う人たちすべてと再会できるように、がんばって出世しよう。自分で赴任地を選べるぐらい偉い司祭になろう。

そんな決意を心の中で繰り返しながら、真つ暗な夜道を旅籠まで歩いて帰った。出世のためだったら、苦手なたまらない無味乾燥な資料も読み通そう、とさえ考えていた。

「初めに言っておくがな。タイドランド夫人は非常に感じやすい、繊細な方なのだ。あまりに下品な言動は慎んでもらわなくてはな。

言い換えると、夫人の前ではひとことも口をきくな、という意味だが」と、ゼフォン博士。

「けっ！ あんたみたいな性根の腐った金の亡者でも平気でつき合ってるんだから、大した“繊細”じゃねーだろ」と、ロラン先輩。

あー、いきなり始まっちゃったよ。まだ顔を合わせて数秒と経っていないのに。

早朝。旅籠の玄関先に停まった馬車の前で、朝のあいさつも済まないうちに険悪な応酬を始める二人を、僕はなんとか抑えようとした。

「まあまあ、積もる話は馬車の中で、ということにして。とりあえず出発の準備をしませんか？ 長い道程ですからね。少しでも早く出発した方が・・・」

「何が『積もる話』だ。そんなもん、あるわけねーだろーが。適当に場を収めようとしてんじゃねえ」

「夫人を侮辱することは許さんぞ。ああ、それからな。デイフィ」
ハドリアナ嬢は夫人以上に繊細で感じやすい女性だ。大事に育てられ、屋敷からほとんど外に出たこともない箱入り娘なのだ。あまりに下品でがさつで野蛮な人間に出会ったら、驚きのあまり卒倒してしまうかもしれない。だから、あんたは、お嬢様にはいつさい近づくな。同じ部屋に立ち入るのも禁止だ。おかしなものを見聞きして、お嬢様の純粋な心が穢れてしまったら大変だ。この世の中に、あんなのような壊れた人間が存在し得るといふことさえ、お嬢様は知らぬ方がいい……」

「この野郎、言わせておけば好き勝手言いやがって。放っておいてもすぐに神に召される老い先短いジジイだと思つて大目に見てやつてたが、どうやらよつぽど死に急いでるらしいな。……せめてもの慈悲だ。丸焼きになるのがいいか、八つ裂きになるのがいいか、選ばせてやる。命が本当に果てる直前まで懺悔は聞いてやらねーかならな」

「ああ、もうっ！ いい加減にしてください、二人とも！！ 朝っぱらからそんなに騒いだら近所迷惑でしょう！？ いい加減にしないと僕……手元が狂つて、この馬、そっちにぶん投げちゃうかもしれませんよっ！」

果てしない口論を止める方法を他に思いつかず、僕は馬車につなされた馬の前肢を肩にかつき上げて恫喝した。馬がいやがっていないなき、暴れたので、逃がさないようにしっかりと肢を抱え込んだ。ロラン先輩とゼフォン博士は不意に怒鳴り合いをやめて、呆気にとられたように僕を眺めた。僕らの荷物を運ぼうとしていた御者が「ひえええっ、やめてください」と悲痛な声をあげて地べたにへたり込んだ。

「……おまえの声がいちばんでけえんだよ、クレス」と、いちおうトーンダウンした口調で、先輩が言った。

ともかくその後は、特にごたごたもなく順調に出発の準備が進んだ。暗褐色の塗装の真新しい、五、六人は乗れそうな立派な二頭立

ての馬車に、僕らは黙々と荷物を積み込んだ（僕らの手回り品はそんなに多くはないので、積み込みに時間はかからなかった）。眠りから覚めきらない村を朝日が優しく照らし出していた。石造りの家々が桃色の光を浴びて輝き、まるで夢の中の光景のように、美しく僕の記憶に焼きついた。旅籠の主人に見送られて、僕らはティアル村を出発した。

イヴート村までの道程は長かった。見渡す限りの白い砂地の平原を、街道がゆるやかにうねりながらどこまでも伸びていく。

出発前あれだけ大騒ぎしたことを思うと、道中はおおむね平和だった。馬車の中で、ロラン先輩は博士から借りた医学書を、博士は僕の『始祖正伝』を読むのに熱中していて、ほとんど口をきかなかったからだ。二人ともひどく真剣な顔で書物を睨んでいた。この人たちは、専門外なのに、よくもこんな小難しい本を読み続けられるよな、と僕は感心した。たとえ後で相手を罵倒するためのネタを探しているだけだとしても、だ。

僕は寝不足の目をこすりながら、教団本部から支給された資料を読もうと努力した。

資料と僕は、致命的なまでに相性が悪い。僕はけっして読書や勉強が嫌いなわけじゃなく、教義に関する書物はいくら読んでも苦にならないんだけど、どうもこの資料みたいな、お役所的な言葉の羅列は苦手だ。資料には僕らの布教地についての地理、歴史、政治、現在の情勢など大事な情報が書いてある。ロラン先輩にいつも言われるとおり、使徒なら必ず目を通しておかなければならないものだ。でも昨夜も、徹夜で資料を読んで勉強しようとして心に決めたのに、頭がもうろうとして、さっぱり内容を把握できずに終わったのだ。

とりあえずページをばらばらとめくって、タイドランド家について書かれている箇所を探した。すぐにみつかった。イヴート村の「現在の情勢」の最初の方に書いてあった。

タイドランド家とは、バンディアスター地方でも有数の名門で

ある。百五十年近く前の帝国統一戦争時代、イヴート村が最前線の要塞であった頃にタイドランド家の令嬢が戦勝祈願の舞いを当時の皇帝に献上し、その翌日に帝国側が奇跡的な逆転を収め、異民族制圧のきつかけを作ったのが始まりだという。令嬢の踊りの直後に戦況が変化したのは、たぶん偶然にすぎないだろうけど、当時の人々はそうは思わなかった。令嬢は戦勝の女神として奉られたのだ（きつと兵士たちが発奮するぐらい、すばらしい舞いだったのに違いない）。それから歳月が流れた今でも、タイドランド家と皇帝とのつながりは続いている。タイドランド家の娘は代々、成人すると宮廷に出仕し、毎年都で開かれる建国記念祭で舞姫を務めるならわしになっていく。その舞いには、国を加護する不思議な力があると信じられているのだ。宮廷で暮らすうちに皇帝の側室となった娘も何人かいる。

古めかしい迷信だな。ただの踊りに不思議な力なんてあるはずがない。奇跡は神のみの領分だ。

だけど皇帝の後ろ楯を得て、タイドランド家が大変な権力を握ったことは間違いのない事実だった。皇帝はバンディアスタラー地方の塩の流通経路の管理をタイドランド家に任せただので、タイドランド家はまたたく間に巨万の富を築いた。

前の当主のギデロ・タイドランドが五年前に病で亡くなって以来、夫人のジニャーナが家政を取り仕切っている。ギデロが生前、地元の有業者や要人と親交を深めていたおかげで、ジニャーナ・タイドランド夫人も現在そういう人たちの支援を借りて、塩の流通事業をうまく切り回している。ギデロとジニャーナの間には子はない。デイフィハドリアナはギデロと十五年前に亡くなった先妻との間にできた娘である。

道路の窪みに車輪がはまり込んだらしい。馬車がひとしきり大きく揺れ、僕は窓枠に思いつきり頭を打ちつけた痛みで目を覚ました。目を覚ました、ってことは　いつの間にか僕、寝てたんだ。ああ、いけない。資料を読んでいるとどうしても睡魔に勝てなくなる。

タイドランド家が有力で豊かな家であることは、よくわかった。でも資料はデイフィ嬢の人となりや彼女の不思議な病の原因について、何の手がかりも与えてくれてない。けっきょく本人に直接会ってみなければ何も始まらない、ということじゃないか。

僕は窓の外の景色を見やった。

草木のほとんど生えていない砂地ばかりの平原が続いているが、この辺りに来ると、バチカと呼ばれる、分厚い表皮に覆われた植物をちらほら見かけられるようになる。水の少ない土地でも育つので、このカロリック大平原で唯一自生している植物だ。ちょうど人間ぐらの背丈で、輪郭も気味悪いほど人間に似ている。それも、四肢が変形し、痙攣に似た独特の動きをする暗闇病の患者がもがいている姿にそっくりなのだ。バチカは縁起が悪い植物とされている。町中に生えていたら、すぐに刈り取られてしまうから、このようにある程度村落から離れた所でしか見かけない。

平原と、白い砂と、無数ののたうち回る人々のような輪郭を示すバチカ。そんな寂莫たる地上の光景に覆いかぶさる天蓋のように。色あせた青空が広がっている。

故郷を遠く離れると空の色さえ違って見えるけれど、実際はこの空は、僕の生まれ故郷の上にも、同じように広がっているのだろう。使徒に憧れて故郷を飛び出してから、ずいぶん長い距離を歩んできた気がする。

僕は子供の頃からの夢をかなえた。神に仕える身となった。そして望み通り、全国を布教に歩いている。

それなのに、心を引き裂かれるような焦燥感に、ときどき襲われるのはなぜだろう。

馬車がイヴート村に到着したのは、日が完全に落ちてからのことだった。ソルバド山脈の斜面に沿って煉瓦造りの家が寄り添う、かなり大きな村落だ。昔の要塞だけのことはあって、村は背の高い城壁で完全に囲まれていた。馬車は村に入れないので、僕らは村の入口から、高台にあるというタイドランド邸まで、歩いて行くこと

になった。

ゼフォン博士が先頭に立って案内してくれた。村には見たところ、まっすぐで平らな道は一本もないようだった。すべての通路が急勾配の階段になっていて、迷路のように交差し曲がりくねっている。ときどきちよつとした広場に出るが、そこからもいくつかの階段が伸びていて、村の別々の場所へ通じている。階段に沿って同じような顔をした古い家々が並ぶ。視界は限られているし、やたら何度も方向を転換する階段のせいで、位置感覚などあつという間にどこかへ行ってしまう。このひどく複雑な構造は、村全体がひとつの要塞だった頃の名残だ。敵が村に侵入しても簡単には進めないように、あえてややこしく作つてあるのだと博士が説明してくれた。

タイドランド邸は村のいちばん高い位置にあるのだから迷わず行けそうなものだけだ。たぶん博士の案内なしで一人で行けと言われたら、たどり着けずに終わるだろう。ひとときわ長くて急な階段を昇りきつたところに、広々した庭と、おとぎ話から抜け出た宮殿みたいにきらびやかな屋敷が見えてきたときには、「長い旅路の末にようやく目的地に着いた」という安堵と達成感が湧き上がってきた。

夜なので細かい造りはわからないけど、とにかく大きな屋敷だ。ガラス窓がたくさん付いていて、そのすべての窓に灯りがとまり、まるで宝石みたいにまばゆく存在感を主張している。

玄関の扉は三階建ての建物ぐらいの高さのある巨大なものだった。こんな大きな扉を見るのは、一度だけ行ったことのある帝都アレリーズの教団本部以来だ。木製だけど、真鍮の枠のがちり嵌まった、いかにも頑丈そうな扉で、どんな外敵が来てもびくともしなさそうだ。これも要塞だった時代の名残かもしれない。ゼフォン博士が呼び鈴を押すと、扉はその巨大さからは信じられないほど滑らかに開いた。お仕着せ姿の、執事らしい初老の男性が顔を出した。

「おや、これはゼフォン様。いらっしやいませ」

僕は光の海の中に招き入れられた。室内はあまりに明るくて、夜に慣れた目にはまぶし過ぎた。玄関ロビーなのだろう　たぶ

ん。だけどこのロビーだけでも、ちょっとした教会の礼拝堂ぐらいの広さがある。高い天井から重そうに吊り下がったシャンデリアが、百近い蝋燭の光で、辺りを陽気に照らし出していた。床は精巧な寄せ木細工で、それほど新しいものではなさそうだけど、長年かけて丁寧に磨き込まれた木の深い光沢を見せていた。壁沿いにいくつも並べられた小卓に燭台や花瓶が置かれ、都会風の洗練された華やかさを醸し出している。室内に、不思議な甘い香りが漂っていた。

「夜分に申し訳ないが、奥様はお手すきかな？ 会ってほしい人間を連れて来たのだ。デイヴィ嬢の病を治すのに役立つのではないかと思つてな」

ゼフォン博士がしかつめらしい顔でそう切り出した。執事は大げさな身ぶりで揉み手をし、頭を下げた。

「大変申し訳ございません。実はただいまシーシヨア様がいらつしやつております。お嬢様のために七点夜のご祈祷の最中でございます」

僕は、やけに派手に動く執事の顔の造作と、つるんとした皮膚をしげしげと眺めてしまった。笑つてはいないんだらうけど、いつも笑つているように見える。この人、まるで喜劇役者みたいな顔つきをしているな。

博士はいまいましたそうに舌打ちした。執事は言葉を継いだ。

「ゼフォン様もご承知でしょうが・・・シーシヨア様がいらつしやると、いつも奥様とお二人で寝室にこもり、夜を徹してご祈祷なさるので・・・奥様のお体が空くのは早くても明日のお昼頃になるかと。どうかそれまでお待ちいただけられないでしょうか？」

この人の言葉に、なんともいえない不快なものが含まれているように感じるのは、僕の気のせいだろうか？

「あのインチキ祈祷師め！」

博士の口から激しい言葉が飛び出した。

「まったく。タイドランド夫人ほどの賢明な女性が、どうしてあのようなペテン師にいつまでも惑わされているのか、不思議でならん。

まじないでデイファイ嬢が少しでも良くなつたか。何が七点夜の祈祷だ」

勧められもしないのに勝手にロビーの豪華な椅子に腰を下ろしたロラン先輩が「結果を出せない医者じゃ、インチキまじない師と大差ねーな」と涼しい顔で言い放つた。博士は燃える憤怒の瞳で先輩を振り返つた。二人が睨み合っている間に、「まあ、シーシヨア様は非常に精力あふれる方でいらつしやるのでね」と、誰にともなくつぶやいた執事が、とつぜん僕の方に向き直り、不自然なほど大きな笑みを作つた。

「いらつしやいませ、お坊様。お部屋を用意させますので少々お待ちください。お食事はお済みですか？」

「え？ ああ、いや、まだですけど・・・」

「では後ほどお部屋の方に運ばせます」

先輩との睨み合いを中断したゼフォン博士が、執事に向かって尖つた声を放つた。

「この二人は、それほどいい部屋でなくても構わんぞ。物置でもいいぐらいだ。坊主つてやつは粗末な暮らしが好きだからな」

「黙りやがれ。この、くたばり損ないが」

と毒づくロラン先輩の声をかき消そうと、僕は「すみません、夜分に押しかけて。お世話になります」とことさらに声を張り上げ、執事に愛想よく微笑みかけた。

第2話「跛行の踊り手」(4)

どこかで誰かの笑い声がしたような気がした。玉をころがすような声、というのか。澄みわたった女性の声だ。

僕は目を開けた。

辺りは真っ暗だった。

笑い声と思っただのは風のいたずらか何かだろう。人が大笑いするような時刻じゃない。窓を開いて空模様を確認すると、夜明け直前であることがわかった。東の地平線近くで夜の闇がしぶしぶ光に場所を明け渡しつつあった。

習慣の力は偉大だ、と僕はあらためて感心する。どんな環境でもぐっすり眠れるのが僕の特技のひとつだが、そのおかげで、どんな場合でもたいてい同じ時刻に目が覚める。規則正しい生活は使徒の務めでもある。

昨夜、僕はタイドランド邸の二階に、一部屋ずつ客室を割り当てられたのだ。ゼフォン博士が指示したように、本当に「それほどいい部屋ではない」のかどうかはわからない。とにかく客室の広さは僕らがふだん泊まる最低ランクの旅籠の部屋が四つは入るようなものだったし、室内の装飾は目がくらむほど豪華だった。不平を言っただけいけないけれど、あまりにも豪華すぎて、肩が凝ってきた。やたらとたくさんある小卓や棚の上に、あきらかに高価とわかる花瓶や小物や精巧なガラス製品が所狭しと並べられているので、僕のような粗忽者は、うっかりそれらを落として壊したりしないよう、ひとつひとつの動作にもものすごく気を使わなければならない。毛足の長い絨毯はふかふかで、まるで宙を歩いているみたいに足元を頼りなくした。

僕は、やわらか過ぎる寝台で眠ったせいでこわばってしまった体をほぐしながら、荷物の中から『ゴージャクシャーバガヴァッド』聖典を取り出した。規定通りに朝の拝礼をする。拝礼が終わる頃に

は空全体が明るみ始めていた。夜は明けたけど、皆まだ眠っているようだ。屋敷全体が静まりかえっている。

僕は再び窓ぎわに近寄って見下ろした。眼下には屋敷の中庭が広がっていた。見事な庭園だった。水路が中庭いっぱい大きな三つの円を描いており、どういう仕掛けなのか、そこには絶えず水が流れ続けている。水路の三つの円が組み合わさった中心に、あずまやのような古い石造りの建物がある。そして円内は色とりどりの花で覆い尽くされている。

バンディアスタラー地方では、庭園といえばオアシスを模した緑と水が欠かせない。オアシスは癒しと憩いの象徴だからだ。でも僕のこれまで見た庭園は、乾燥に強い品種の樹木を植えているのが普通だった。花畑なんて。あまりにも珍しい。ヴォールダーと何か関係があるんじゃないのか。

そう考えるだけでなんともいえず胸がざわついた。あの花畑をもっと近くで見たい。庭園をちよつとぐらい散歩させてもらっても、家の人は気分を害したりしないんじゃないかな。いや、きつとしないはずだ。庭園の見事に惹かれたのだと言えば、むしろ喜んでもらえるに違いない。強引にそう自分に言い聞かせ、僕は客間を出た。重厚な感じの絨毯が敷きつめられた無人の廊下をまっすぐ進むと、やがて幅広の階段があつて、ゆるやかに半回転しながら昨夜僕らが通された玄関ロビーへ下っているはずだった。

僕が階段に近づくとつれて、階下のロビーで交わされている小声の会話が、はつきり耳に届くようになってきた。

ひとり執事らしい。もうひとは、ひどく若々しい、少年のような声の持ち主だ。

「・・・それで今、誰が泊まってるの」

「画家のベルドリル様が半月ほど滞在なさっています。奥様の肖像画が仕上がるまでずっとお泊りになる予定です。昨日の朝からシーシヨア様がお越しです。昨夜からチェトウス町のゼフォン博士が、お坊さんを二人連れておいでになっています。シーシヨア様もゼフ

オン博士もご滞在期間の予定は決まっております。それから・・・
《白服隊》の隊長様がこの三日ほど泊まっておられました。今日
カティールにお帰りになる予定です」

「ふーん・・・いつもに比べると、少ないんだね。でも“彼”が来て
るんだつたら、僕は退散した方がよさそうだ。・・・薬だけ置いて
いくよ。これ、ジニャーナに渡しておいて。忘れちゃダメだよ。

『アムリタ』が切れると奥様はおかんむりだから」

他人の会話を立ち聞きしている形になるのを気まずく思いつつ、
でも引き返すわけにもいかなないので、僕は金張りの手すりに手をす
べらせながら階段を下りた。ロビーの全容が視界に入ってきた。寄
せ木細工のフロアの真ん中で、旅行用の灰色の長外套に身を包んだ
背の高い人影が、執事に黒い小瓶を手渡しているところだった。

「あ。それからね、執事君。きみは好奇心が強い性質「たち」みた
いだから、ひとつ忠告しておくよ。・・・間違つても、この『アム
リタ』を味見してみようなんて思わないこと。これは最新の科学を
駆使して開発されたばかりの薬でね。成分も、まだ安定してないん
だ。ジニャーナの年齢や体質に合わせて、毎回すこしずつ調整を加
えている、いわば試作品なのさ。ジニャーナ以外の人々が口にしたら、
腸「はらわた」が焼け、血が沸騰し、たちまちにして絶命するから。
・・・わかつたね」

執事はびくりと肩を震わせ、気味悪そうに手の中の小瓶を眺めた。
僕の気配に気づいたのか、長外套の人影がこちらを振り向いた。

声を聞いて想像した通り、まだ若い。見たところ僕と同じぐらいの
年頃だ。軽く波打つ銀色の髪に縁取られたその顔は、両目の部分だ
け穴の開いたマスクに覆われていて、人相がまったくわからない。
そのマスクというのも光沢を帯びた黒色の生地、蝶をかたどった
マスクで、縁に細かい宝石飾りがついていたりして、ちょうど上流
階級の人が仮面舞踏会につけていくような代物だ。ふだんから顔に
つけて歩き回るようなものじゃない。若々しい柔らかさをた
たえた赤い唇がほほえみの形に開いた。

「おや、お坊様。おはようございます。ずいぶん早起きなんですね？」

相手の若さにほっとしながら僕もあいさつを返した。階段を下りきって、近くで若者の顔を見たとき、僕は驚きを表に出さないようにこらえなければならなかった。蝶のマスクが傷跡を隠すためのものだとということがわかったからだ。赤くひきつれた皮膚がマスクの生地の下からのぞいている。見たところ火傷のようだ。それもかなり大きい。

「あなたもお医者さんですか。お嬢さんの病気を治すためにいらっしやっただんですか」

会話の口火を切るためにそう尋ねてみると、若者は唇に微笑を乗せたままかぶりを振った。

「そんなものじゃありません。僕はタイランド夫人の数ある愛人の中でも最年少のひとり・・・というのは冗談で、古い友人です。科学の研究は、趣味でやってるんですよ。不老不死の妙薬、つてやつを作ってみたいと思ひましてね」

「不老不死？」

僕はとつさに反論しようとした。何度も何度も新しく身体を借りてこの世に生まれかわり、無限の転生を重ねるのが人間の魂というものだ。その循環は身体の生と死があつてこそ成立する。不死など神の摂理に反する。

けれども若者のほほえみはどこまでも軽やかだった。

「それも冗談です。不老不死などありえない、僕だつてそんな事わかっていますよ。誰も死ななくなったら、世の中が人間であふれてしまつじやないですか。そんなの気味悪いでしょう？」

不意に若者は長外套の裾を派手にひるがえし、玄関へ向かつて歩き始めた。

「今発てば朝のお茶の時間までに力ティーエに戻れるかもしれいな。・・・では失礼します、お坊様。機会があつたらまた」

「じぎげんよう」

僕は若者の後ろ姿を見送った。名前さえ聞けなかつたけど、なぜだか彼とはまた会う機会があるような気がした。

庭園を散歩させてもらえないか尋ねると執事は快諾してくれた。案内に従って一階の廊下を進み、中庭に通じる扉を開ける。とたんに、さわやかな冷たさに満ちた空気が顔を打った。うつとりするほど耳に心地よい、水が流れるばしゃばしゃという音。そして少し離れた所で、花々がこちらを誘うように揺れている。僕は庭園に歩み寄って観察してみた。何かがわかると期待していたわけじゃないけど。サハの花は見当たらなかった。

水路をまたいで花畑の中に入り、植物をかき分けつつ歩みを進める。僕の足がとつぜん、柔らかいけれどしつかりした存在感のある物を踏みつけた。と同時に、

「いったーい！ 手、踏んでる踏んでるっ！」

かん高い悲鳴が響きわたった。

僕はぎよつとして足を引いた。地面の高さから、きらきら光る紫色の目がこちらを見上げていた。驚いたことに花に埋もれるようにして年のころ十四、五の少女が大の字になって寝転がっていたのだ。僕が踏んでしまったのは彼女の左手だった。少女はレース飾りのたくさんついた白いパジャマ姿だった。靴も履いておらず素足のままだ。寝床から抜け出してきて、そのまま花の中へ倒れこんだように見える。押しつぶされた茎や葉の上で、長い金髪がひどく無造作な感じでもつれ、広がっていた。

「どうしたんですか。気分でも悪いんですか？」

僕の質問に、相手はきつぱりと首を横に振った。

「違うわよ。悪いのは気分じゃなくて、機嫌。お母様ったら夜中だつていうのにバルコニーに出て大騒ぎしてるんだもの。あんなにうるさくちゃ、眠れやしないわ」

パジャマの襟首や袖からのぞく少女の真っ白な肌に、うつすら透けて見える青い血脈が複雑な模様を描いていた。こんなにも白い肌を僕は見たことがなかった。それに加えて、顔の造作もすべて小作

りで繊細なので、「儂」はかな「い」という形容がぴったりだった
だろう。まっすぐこちらを見返す、表情豊かで生き生きした二つの
瞳がなければ。

「・・・ここで寝てれば、誰にも邪魔されないし、余分なものも見
なくて済むでしょ。あたし、花って好きだわ。こっやって花に囲ま
れてるの、最高よ」

この少女がデイフィーハドリアナ・タイドランドであることは、
もはや尋ねるまでもなかった。少し離れた所、花畑の外側に、精巧
な車椅子が転がっている。彼女の持ち物だろう。病弱な令嬢と聞い
ていたけれどそれほどひ弱でもなさそうだ。ひどく色白なのは確か
だけど、表情にも声にも健康的な力があふれている。彼女を苦しめ
ている病が何であれ、これなら回復も早いにちがいない。

「ところであなた誰？ 見かけない顔ね。お母様の新しいお友達？」
デイフィーの質問はその視線と同じように率直だった。高飛車でも
なく、警戒している風もなく。ただ知りたいから訊くのだからというよ
うな素直な問いかけ。

僕はほほえみ、礼儀正しく答えた。

「僕はクレス・エスフェル。ドヴァラス正教の使徒です。こちらへ
はチエトウス町のゼフォン博士と一緒に来ました。あなたの脚を癒
すために」

「えーっ、またあ！？ いいわよ、もう。治療もご祈祷も、もう要
らない」

相手の反応はまったく予想外のものだったので、僕は途方に暮れ
てしまった。「もういいって・・・どういうことです。治りたくな
いんですか？」

令嬢はあっけらかんと首を横に振った。

「治りたくないわけじゃないけど。たぶんもう治らないんだって諦
めてる。だって、今までずいぶん大勢のお医者さんに診てもらった
けど、どうにもならなかったのよ。うちへ最近訪ねて来るの
は、あたしの脚を治すだなんて言いながら、本音はお母様と仲良く

なりたい人ばかり。そんな人たちの相手するの、疲れちゃったわ」
「デイフィは幼さの残る顔に、不意にひどく大人びた色を浮かべて僕を見上げた。」

「だからあなたも、まっすぐお母様のところへ行けばいい。あたしお母様にはちゃんと、あなたにお祈りしてもらったって話しておくわ。大丈夫よ。お母様はたくさんのお友達と過ごすのが好きなの。あたしの脚が治らなくなつて、そんなには、気にしないから」

鈍い僕にも、なんとなく事情が飲み込めた。同時に、目の前の少女に対する猛烈な同情が湧き上がってきた。僕は横たわったデイフィのすぐ傍らの地面に膝をつき、近い位置から、できる限りの誠意をもつて語りかけた。

「僕はあなたのお母様に会いに来たわけじゃない。あなたを癒すために来たんです。どうか、神の御業を受けてください。僕にあなたのため祈らせてください。あなたが神の力を受け入れる気持ちになれば、どんな難しい病でも必ず治ります」

大きく見開かれたデイフィの瞳が食い入るように僕をみつめていた。

「必ず治るの？ 本当に？」

「ええ。神の仕業に間違いはありません」

「・・・あなた、お母様に会いたくないの？」

「いや、そりゃあ、泊めていただいたお礼ぐらいは言わなくちゃいけないかなーと思います、別にどうしても会いたいわけじゃありません」

「そう・・・そうなの」

突然デイフィは、ぶん、と力強い動作で両腕を振り回し、その反動で上体を起こした。地面に座ったその姿勢で僕にほほえみかけた。初めて見る彼女の笑顔は無邪気で、無防備なものだった。

「じゃあ、やってみて。ご祈禱して。あたし小さい頃力テイ

ーエの町で神様のお話を聞いたことあるのよ。例えば、えーっと・・・『嘘の分だけ本当になる』とか、『弱いものがいちばん強い』と

か。面白かったわ、なぞなぞみたいで。お祈りの仕方もそのときに習ったの。まだ覚えてる。こうやるのよね、確か、指をこんな風からませて・・・」

そう言っつて、三根源「タレース」の印に似た感じで手を組み合わせせてみせる。

始祖ドヴァラスの箴言を「なぞなぞ」と言われて僕はがつくりきた。でも彼女が話を聞いたことがあるというのは本当らしい。管区首都であるカティーエには教皇庁の出張所がある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0657f/>

反逆使徒

2010年10月15日22時36分発行